

Oracle® Collaboration Suite

リリース・ノート

リリース 2 (9.0.4.1.0) for HP-UX PA-RISC (64-bit) and
Linux x86

部品番号 : B14150-04

2006 年 7 月

Oracle Collaboration Suite リリース・ノート, リリース 2 (9.0.4.1.0) for HP-UX PA-RISC (64-bit) and Linux x86

部品番号 : B14150-04

原本名 : Oracle Collaboration Suite Release Notes, Release 2 (9.0.4.1.0) for hp-ux PA-RISC (64-bit) and Linux x86

原本部品番号 : B12156-06

Copyright © 2003, 2006, Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software-Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかえる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることが使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、および Retek は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	xi
対象読者	xii
関連ドキュメント	xii
表記規則	xiii

1 Suite 全般の問題

1.1	新機能	1-2
1.2	インストールの問題	1-2
1.2.1	SUSE Linux Enterprise Server 9 (SLES 9) へのインストール	1-2
1.2.1.1	SLES 9 のソフトウェア要件	1-2
1.2.1.2	SLES 9 の環境設定	1-3
1.2.1.3	SLES 9 に対して実行するインストール前の追加手順	1-4
1.2.1.4	SLES 9 のための追加のインストール手順	1-6
1.2.1.5	SLES 9 でのインストール後の手順	1-10
1.2.1.6	SLES 9 への Patch Set 1 (9.0.4.2) のインストール	1-10
1.2.1.7	SLES 9 の既知の問題	1-11
1.2.2	SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 8 へのインストール	1-11
1.2.2.1	UnitedLinux のためのインストール前の追加手順	1-11
1.2.2.2	UnitedLinux のための追加のインストール手順	1-13
1.2.3	Red Hat Enterprise Linux 3 へのインストール	1-13
1.2.3.1	ソフトウェア要件	1-13
1.2.3.2	環境の設定	1-14
1.2.3.3	インストール前の追加手順	1-15
1.2.3.4	追加のインストール手順	1-15
1.2.3.5	インストール後の追加手順	1-19

1.2.3.6	既知の問題およびバグ	1-19
1.2.4	Red Hat Enterprise Linux 3 for AMD64/EM64T への Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) のインストール	1-20
1.2.4.1	ソフトウェア要件	1-20
1.2.4.2	インストール前の追加手順	1-21
1.2.4.3	環境の設定	1-22
1.2.4.4	追加のインストール手順	1-23
1.2.4.5	Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) のインストール	1-27
1.2.4.6	ランタイム環境の設定	1-27
1.2.5	Red Hat Enterprise Linux 4.0 Systems への Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) のインストール	1-28
1.2.5.1	ソフトウェア要件	1-28
1.2.5.2	環境の設定	1-29
1.2.5.3	追加のインストール手順	1-30
1.2.5.4	既知の問題	1-32
1.2.6	SuSE SLES8 for AMD64 への Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) のインストール	1-33
1.2.6.1	ソフトウェア要件	1-33
1.2.6.2	環境の設定	1-36
1.2.6.3	追加のインストール手順	1-38
1.2.6.4	Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) のインストール	1-40
1.3	既知の制限および回避策	1-41
1.3.1	シード済 Information Storage データベースで RAC を有効化できない	1-41
1.3.2	Portal がインストールされていない場合に Oracle Collaboration Suite で発生する エラー	1-42
1.3.3	Oracle Collaboration Suite Web Client	1-42
1.3.3.1	Web Client が韓国語ロケールで動作しない	1-42
1.3.3.2	アップグレード時に Web Client Configuration Assistant で障害が発生	1-42
1.3.3.3	Files ポートレットの自動登録の失敗	1-44
1.3.3.4	UNIX でのイメージ破損	1-45
1.3.3.5	Collaboration Suite の「ようこそ」ページでのリンクの破損	1-46
1.3.4	Oracle9iAS Web Cache が起動しない	1-46
1.3.5	Oracle Enterprise Manager for Oracle Email が起動しない	1-47
1.3.6	Email のアップグレード中に発生する参照名エラー	1-47
1.3.7	データベースが登録されていない	1-48
1.3.8	Database Configuration Assistant のエラー	1-48
1.3.9	シングル・サインオンの写真の登録	1-48

1.3.10	Delegated Administration Services でのユーザー情報の作成または編集	1-48
1.3.11	root.sh スクリプト実行時に発生するファイルが見つからないというエラー	1-48
1.3.12	「ようこそ」ページの iSupport リンク	1-49
1.3.13	Upgrade Assistant を実行した際のポート番号の変更	1-49
1.3.14	SSL を使用した Oracle Collaboration Suite コンポーネントの構成	1-50
1.3.15	Linux のみ : Oracle Calendar のアップグレード	1-51
1.3.16	Linux のみ : 問合せの確認を実行する Oracle Enterprise Manager プロセスのハング	1-51
1.3.17	HP-UX のみ : \$ORACLE_HOME/oui/bin/runinstaller 使用時の 11.0 システムでの 前提条件の失敗	1-51
1.4	ドキュメントの訂正	1-51
1.5	リリース 2 (9.0.4.1) での既知のバグ	1-52
1.6	リリース 2 (9.0.4.2) での既知のバグ	1-55

2 グローバリゼーション

2.1	新機能	2-2
2.2	既知の制限および回避策	2-2
2.2.1	インストールおよびアップグレードの言語サポート	2-2
2.2.2	アラビア語用の双方向サポート	2-3
2.2.3	Web Conferencing Document Converter 用の言語サポート	2-3
2.2.4	Infrastructure および Information Store データベースのキャラクタ・セット	2-3
2.2.5	Web Conferencing における「Host Name」の翻訳のエラー	2-3
2.2.6	インターナショナル・ユーザー ID	2-4

3 Oracle Calendar

3.1	Oracle Calendar Server	3-2
3.1.1	新機能	3-2
3.1.2	リリース 2 (9.0.4.1) での既知の制限および回避策	3-4
3.1.3	リリース 2 (9.0.4.2) での既知の制限および回避策	3-5
3.1.4	新規および更新されたサーバー・パラメータ	3-8
3.1.4.1	unison.ini ファイルの新規パラメータ	3-8
3.1.4.2	unison.ini ファイルの更新されたパラメータ	3-18
3.1.4.3	更新された UNIX 環境変数	3-27
3.1.5	ドキュメントの訂正	3-27
3.2	Oracle Calendar Administrator	3-31
3.2.1	新機能	3-31

3.2.2	既知の制限および回避策	3-31
3.3	Oracle Calendar SDK	3-32
3.3.1	新機能	3-32
3.3.2	既知の制限および回避策	3-33
3.4	Oracle Calendar アプリケーション・システム	3-33
3.4.1	Oracle Calendar Web Client	3-33
3.4.1.1	新機能	3-33
3.4.1.2	既知の制限および回避策	3-35
3.4.1.3	ドキュメントの訂正	3-38
3.4.2	Oracle Calendar Web Services	3-38
3.4.2.1	新機能	3-38
3.4.2.2	既知の制限および回避策	3-39
3.4.3	Oracle Sync Server	3-39
3.4.3.1	新機能	3-39
3.4.3.2	既知の制限および回避策	3-39
3.4.3.3	デバイス関連の問題	3-40
3.5	Oracle Connector for Outlook	3-44
3.5.1	新機能	3-44
3.5.2	既知の制限および回避策	3-46
3.5.3	構成パラメータ	3-47
3.6	Oracle Calendar Desktop Client	3-55
3.6.1	Oracle Calendar Desktop Client for Windows	3-55
3.6.1.1	新機能	3-55
3.6.1.2	既知の制限および回避策	3-56
3.6.2	Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh	3-56
3.6.2.1	新機能	3-57
3.6.2.2	既知の制限および回避策	3-58
3.6.3	Oracle Calendar Desktop Client for Linux	3-59
3.6.3.1	新機能	3-59
3.6.3.2	既知の制限および回避策	3-60
3.6.4	Oracle Calendar Desktop Client for Solaris	3-61
3.6.4.1	新機能	3-61
3.6.4.2	既知の制限および回避策	3-62
3.7	Oracle Calendar Sync クライアント	3-62
3.7.1	Oracle Calendar Sync for Palm for Windows	3-62
3.7.1.1	新機能	3-63
3.7.1.2	既知の制限および回避策	3-63
3.7.2	Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh	3-64

3.7.2.1	新機能	3-64
3.7.2.2	既知の制限および回避策	3-65
3.7.3	Oracle Calendar Sync for Pocket PC	3-65
3.7.3.1	新機能	3-65
3.7.3.2	既知の制限および回避策	3-66
3.8	クライアントの共存に関する動作	3-67

4 Oracle Email

4.1	新機能	4-2
4.2	既知の問題	4-2
4.2.1	Web Client 用の JDK 1.4.2	4-2
4.2.2	Oracle Email Migration Tool 用の JDK 1.4.1	4-3
4.2.3	NNTP サーバーの手動アップグレード	4-3
4.2.4	TargetDN 属性	4-3
4.2.5	Oracle Text	4-3
4.3	既知のバグ	4-5
4.3.1	Oracle Email 管理	4-5
4.3.1.1	HP-UX のみ : Email コンポーネントの問題およびデータベース・リスナー	4-8
4.3.2	Oracle Email Migration Tool	4-9
4.3.3	サーバー	4-11
4.3.4	Oracle Webmail	4-13
4.4	ドキュメントの訂正	4-15
4.4.1	Oracle Email 管理者ガイド	4-16
4.4.1.1	デフォルトのスパム対策パラメータ Prevent Service Denial Attack	4-16
4.4.1.2	表 8-5: リスト・サーバーのパラメータ	4-16
4.4.1.3	Webmail クライアントが IMAP で動作しない	4-16
4.4.2	Oracle Email Migration Tool Guide	4-16
4.4.2.1	第 2 章「Requirements Before Migration」	4-16
4.4.2.2	第 3 章「Migration Tasks」	4-18
4.4.2.3	付録 C	4-18
4.4.3	Oracle Email アプリケーション開発者ガイド	4-19
4.4.3.1	第 2 章「Java API リファレンス」	4-19
4.4.3.2	ディレクトリ管理コードの例	4-20
4.4.4	Oracle Email Java API Reference	4-21
4.4.4.1	OracleFolder addACI メソッド	4-21
4.4.4.2	単純なメッセージの追加	4-21
4.4.4.3	電子メールの自動終了 / 削除	4-22

4.4.4.4	ログインとフェッチの例で使用されている不正な名前のサンプル	4-23
---------	-------------------------------------	------

5 Oracle Files

5.1	新機能	5-2
5.1.1	ワークフロー構成の拡張	5-2
5.1.2	ロシア語で使用可能な Oracle Files Web UI と Oracle FileSync クライアント	5-2
5.1.3	カスタム・ワークフローの作成	5-2
5.1.4	Oracle Files User Interface へのブランド情報の追加	5-3
5.1.5	システムに障害が発生した後のドメイン・コントローラの信頼性の向上	5-3
5.1.6	自動ユーザー・プロビジョニング	5-4
5.1.7	Oracle Files の追加機能	5-4
5.2	認証とシステム要件	5-4
5.2.1	クライアントの認証	5-4
5.2.1.1	SMB	5-5
5.2.1.2	Web ブラウザ (Web ユーザー・インタフェースおよび Enterprise Manager Web Site 用)	5-6
5.2.1.3	FTP クライアント	5-7
5.2.1.4	AFP	5-7
5.2.1.5	NFS クライアント・サポート	5-7
5.2.1.6	WebDAV: Web フォルダ	5-8
5.2.1.7	WebDAV: Oracle FileSync クライアント	5-9
5.3	廃止予定	5-10
5.4	一般的な問題	5-10
5.4.1	ポータル・ページからログアウトしても、Oracle Files からログアウトしない	5-10
5.4.2	ワークスペースの作成で発生するエラー	5-10
5.4.3	アーカイブのコンテンツの BFILE 記憶域への移動 (デフォルト)	5-11
5.4.4	Windows XP での Web フォルダのマッピング	5-11
5.4.5	Internet Explorer を使用した HTML ファイルの保存	5-11
5.4.6	ポップアップ・ブロックによって発生する可能性がある Oracle Files UI の問題	5-12
5.4.7	Outlook Express による、マルチバイト・キャラクタを含む Oracle Files の URL の破損	5-12
5.4.8	スタンバイ・データベースの制限	5-12
5.5	構成の問題	5-12
5.5.1	ワークフローの問題	5-12
5.5.1.1	カスタム・ワークフローの作成	5-12
5.5.1.2	LDAP パッケージ	5-13

5.5.1.3	複数のインスタンス	5-14
5.5.1.4	Oracle Workflow へのユーザーの提供	5-14
5.5.2	Oracle Text の問題	5-14
5.5.3	キャッシュの問題	5-14
5.6	Oracle Internet Directory の問題	5-15
5.6.1	ユーザー・プロビジョニング障害	5-15
5.7	グローバル化・サポートの問題	5-15
5.7.1	Internet Explorer でドキュメントにマルチバイトのファイル名を付けて保存する際の エラー	5-15
5.7.2	粗い太字フォントまたはイタリック・フォント	5-16
5.7.3	キャラクタ・セットの制限	5-16
5.8	既知のバグ	5-16

6 Oracle Ultra Search

6.1	新機能	6-2
6.2	Ultra Search の「ようこそ」ページ	6-2
6.3	デフォルトの Ultra Search インスタンス	6-2
6.4	ドキュメント検索オプションの制限	6-3
6.5	Complete Sample Query Application の翻訳	6-3
6.6	動的ページ索引付けの制御	6-3
6.7	Cookie のサポート	6-4
6.8	クローラ・キャッシュ削除の制御	6-4
6.9	INSO フィルタ使用環境の設定	6-5
6.10	既知のバグ	6-5

7 Oracle Voicemail & Fax

7.1	新機能	7-2
7.2	既知の制限および回避策	7-3

8 Oracle Web Conferencing

8.1	新機能	8-2
8.2	既知の制限および回避策	8-2
8.2.1	データベース・サービス名に関する制限	8-2
8.2.1.1	インストール	8-2
8.2.1.2	インストール後	8-3
8.2.2	インストールおよび構成の問題	8-5

8.2.2.1	クリーンな再インストールと削除	8-6
8.2.2.2	Real-Time Collaboration のコア・コンポーネント・インスタンスの一部としての OC4J RTC アプリケーションの作成	8-10
8.2.2.3	Oracle HTTP Server の構成	8-10
8.2.2.4	OracleAS Web Cache での PNG ファイルのイメージ圧縮のオフ設定	8-11
8.2.2.5	利用状況レポートの電子メールによる通知の構成	8-12
8.2.2.6	カスタム・データベース使用時のデモのアップロード	8-13
8.2.3	ユーザー管理の問題	8-14
8.2.4	ポップアップ・ウィンドウの表示の許可	8-16
8.2.5	既知のバグ	8-16

9 Wireless

9.1	はじめに	9-2
9.2	新機能	9-2
9.2.1	Over the Air (OTA) プロビジョニング	9-2
9.2.2	任意のモバイル機器からのリアルタイムなブラウザ・アクセス	9-3
9.2.3	ユビキタスな音声アクセス	9-3
9.2.4	SMS または電子メールからの非同期コマンドによる即時アクセス	9-4
9.2.5	マルチチャネルでのアラートと通知	9-4
9.2.6	所在と連絡先の管理	9-4
9.3	Oracle Hosted Voice Gateway	9-4
9.4	既知の制限および回避策	9-5
9.4.1	ワイヤレス SMS 通知の問題	9-5
9.4.2	連絡ルールの切替えポートレットの障害	9-5
9.4.3	ワイヤレス電子メールのタイムアウト・パラメータの増加	9-5
9.4.4	メッセージの複数のコピーの生成	9-6
9.4.5	Portal に戻る URL の構成	9-6
9.4.6	Wireless Calendar	9-6
9.4.7	Wireless Files	9-6
9.4.8	停止中と表示される Wireless のステータス	9-7
9.4.9	マルチバイト・キャラクタとワイヤレス通知	9-7
9.4.10	Wireless Webtool と Wireless Customization のための Oracle Portal プロバイダ登録の 失敗	9-7
9.4.11	Microsoft Internet Explorer 使用時に発生する一般的なシングル・サインオン・エラー	9-8
9.4.12	外部リポジトリを持つ複数の ORACLE_HOME では使用できない Oracle Wireless プロセスのステータス	9-8

9.4.13	サポートされない Jabber のマルチバイト・ユーザー名	9-9
9.5	Wireless & Voice の使用	9-9
9.5.1	SMS、電子メールまたは双方向ポケットベルから Collaboration Suite にアクセスする ための ASK コマンド	9-9
9.5.1.1	Calendar	9-9
9.5.1.2	アドレス帳	9-10
9.5.1.3	メール	9-10
9.5.1.4	FAX	9-10
9.5.1.5	ディレクトリ	9-11
9.5.1.6	ショート・メッセージ	9-11
9.5.1.7	Instant Messaging	9-11
9.5.1.8	ファイル	9-13
9.6	ドキュメントの訂正	9-13
9.6.1	Calendar Server	9-13
9.6.2	Wireless Configuration Assistant の表示	9-14
9.6.3	メッセージングを有効にするための Oracle Wireless の構成	9-14
9.6.4	オンライン・ヘルプの表示	9-15
9.6.5	Nuance 音声 Web サービス・ゲートウェイ	9-15
9.6.6	Speechgenie ゲートウェイ	9-15

はじめに

この章の内容は次のとおりです。

- [対象読者](#)
- [関連ドキュメント](#)
- [表記規則](#)

注意： このリリース・ノート情報は、公開時の情報です。最新の情報は、<http://otn.oracle.co.jp> の Oracle Technology Network Japan で入手できます。

<http://otn.oracle.com>

対象読者

このリリース・ノートは、Oracle Collaboration Suite を利用される方を対象としています。

関連ドキュメント

詳細は、次の Oracle ドキュメントを参照してください。

- 『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』
- 『Oracle Collaboration Suite クイック・インストレーション・ガイド』
- 『Oracle Calendar 管理者ガイド』
- 『Oracle Email 管理者ガイド』
- 『Oracle Email アプリケーション開発者ガイド』
- 『Oracle Email Migration Tool Guide』
- 『Oracle Collaboration Suite Oracle Voicemail & Fax 利用ガイド』
- 『Oracle Web Conferencing 管理者ガイド』
- 『Oracle Files 管理者ガイド』
- 『Oracle Files プランニング・ガイド』
- 『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle Voicemail & Fax 管理者ガイド』
- 『Oracle9iAS Wireless 管理者ガイド』

リリース・ノート、インストール関連ドキュメント、ホワイト・ペーパーまたはその他の関連ドキュメントは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) から、無償でダウンロードできます。

<http://otn.oracle.co.jp/membership/>

すでに OTN-J のユーザー名およびパスワードを取得している場合は、次の URL で OTN-J Web サイトのドキュメントのセクションに直接接続できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

表記規則

この項では、このマニュアルの本文およびコード例で使用される表記規則について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [本文の表記規則](#)
- [コード例の表記規則](#)

本文の表記規則

本文では、特定の項目が一目でわかるように、次の表記規則を使用します。次の表に、その規則と使用例を示します。

規則	意味	例
太字	太字は、本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。	この句を指定すると、 索引構成表 が作成されます。
固定幅フォントの大文字	固定幅フォントの大文字は、システム指定の要素を示します。このような要素には、パラメータ、権限、データ型、 Recovery Manager キーワード、SQL キーワード、SQL*Plus またはユーティリティ・コマンド、パッケージおよびメソッドがあります。また、システム指定の列名、データベース・オブジェクト、データベース構造、ユーザー名およびロールも含まれます。	NUMBER 列に対してのみ、この句を指定できます。 BACKUP コマンドを使用して、データベースのバックアップを作成できます。 USER_TABLES データ・ディクショナリ・ビュー内の TABLE_NAME 列を問い合わせます。 DBMS_STATS.GENERATE_STATS プロシージャを使用します。

規則	意味	例
固定幅フォントの小文字	固定幅フォントの小文字は、実行可能ファイル、ファイル名、ディレクトリ名およびユーザーが指定する要素のサンプルを示します。このような要素には、コンピュータ名およびデータベース名、ネット・サービス名および接続識別子があります。また、ユーザーが指定するデータベース・オブジェクトとデータベース構造、列名、パッケージとクラス、ユーザー名とロール、プログラム・ユニットおよびパラメータ値も含まれます。 注意：プログラム要素には、大文字と小文字を組み合わせて使用するものもあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。	パスワードは、<code>orapwd</code> ファイルで指定します。 <code>/disk1/oracle/dbs</code> ディレクトリ内のデータ・ファイルおよび制御ファイルのバックアップを作成します。 <code>hr.departments</code> 表には、<code>department_id</code>、<code>department_name</code> および <code>location_id</code> 列があります。 <code>QUERY_REWRITE_ENABLED</code> 初期化パラメータを <code>true</code> に設定します。 <code>oe</code> ユーザーとして接続します。 <code>JRepUtil</code> クラスが次のメソッドを実装します。
固定幅フォントの小文字のイタリック	固定幅フォントの小文字のイタリックは、プレースホルダまたは変数を示します。	<code>parallel_clause</code> を指定できます。 <code>Uold_release.SQL</code> を実行します。ここで、<code>old_release</code> とはアップグレード前にインストールしたリリースを示します。
山カッコ内のテキスト < >	山カッコは、 <code>Oracle Calendar</code> の変数を示します。	<code><hostname></code> 、 <code><port></code> を入力します。

コード例の表記規則

コード例は、SQL、PL/SQL、SQL*Plus または他のコマンドライン文の例です。次のように固定幅フォントで表示され、通常のテキストと区別されます。

```
SELECT username FROM dba_users WHERE username = 'MIGRATE';
```

次の表に、コード例で使用される表記規則とその使用例を示します。

規則	意味	例
[]	大カッコは、カッコ内の項目を任意に選択することを表します。大カッコは、入力しないでください。	DECIMAL(<i>digits</i> [, <i>precision</i>])
{ }	中カッコは、カッコ内の項目のうち、1 つが必須であることを表します。中カッコは、入力しないでください。	{ENABLE DISABLE}
	縦線は、大カッコまたは中カッコ内の複数の選択項目の区切りに使用します。項目のうちの 1 つを入力します。縦線は、入力しないでください。	{ENABLE DISABLE} [COMPRESS NOCOMPRESS]
...	水平の省略記号は、次のいずれかを示します。 ■ 例に直接関連しないコードの一部が省略されている。 ■ コードの一部を繰り返すことができます。	CREATE TABLE ... AS subquery; SELECT col1, col2, ... , coln FROM employees;
.	垂直の省略記号は、例に直接関連しない複数の行が省略されていることを示します。	SQL> SELECT NAME FROM V\$DATAFILE; NAME ----- /fs1/dbs/tbs_01.db /fs1/dbs/tbs_02.dbf . . . /fs1/dbs/tbs_09.dbf 9 rows selected.

規則	意味	例
その他の記号	大カッコ、中カッコ、縦線および省略記号以外の記号は、記載されているとおりに入力する必要があります。	acctbal NUMBER(11,2); acct CONSTANT NUMBER(4) := 3;
イタリック体	イタリック体は、特定の値を指定する必要があるプレースホルダや変数を示します。	CONNECT SYSTEM/system_password DB_NAME = database_name
大文字	大文字は、システム指定の要素を示します。これらの要素は、ユーザー定義の要素と区別するために大文字で示されます。大カッコ内にはないかぎり、表示されているとおりの順序および綴りで入力します。ただし、大 / 小文字が区別されないため、小文字でも入力できます。	SELECT last_name, employee_id FROM employees; SELECT * FROM USER_TABLES; DROP TABLE hr.employees;
小文字	小文字は、ユーザー指定のプログラム要素を示します。たとえば、表名、列名またはファイル名などです。 注意： プログラム要素には、大文字と小文字を組み合わせるものもあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。	SELECT last_name, employee_id FROM employees; sqlplus hr/hr CREATE USER mJones IDENTIFIED BY ty3MU9;
山カッコ内のテキスト < >	山カッコは、Oracle Calendar の変数を示します。 <hostname>, <port> を入力します。	;%ORACLE_HOME/bin/ldapmodify -h <host> -p <port> -D cn=orcladmin -w <password> -f index.ldif

Suite 全般の問題

この章では、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) および Patch Set 1 (9.0.4.2) のすべてのコンポーネントに影響のある問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [インストールの問題](#)
- [既知の制限および回避策](#)
- [ドキュメントの訂正](#)
- [リリース 2 \(9.0.4.1\) での既知のバグ](#)
- [リリース 2 \(9.0.4.2\) での既知のバグ](#)

1.1 新機能

現在、Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) が使用可能です。このパッチには、重要なバグ修正および新機能が含まれています。このパッチは、次の URL の Oracle Internet Support Center (OISC) よりダウンロードできます。

<http://support.oracle.co.jp/>

このパッチに含まれる新機能およびバグ修正の詳細は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0)』を参照してください。

1.2 インストールの問題

この項では、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) の次のインストールの問題について説明します。

- [SUSE Linux Enterprise Server 9 \(SLES 9\) へのインストール](#)
- [SUSE Linux Enterprise Server \(SLES\) 8 へのインストール](#)
- [Red Hat Enterprise Linux 3 へのインストール](#)
- [Red Hat Enterprise Linux 3 for AMD64/EM64T への Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 \(9.0.4.2.0\) のインストール](#)
- [Red Hat Enterprise Linux 4.0 Systems への Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 \(9.0.4.2.0\) のインストール](#)
- [SuSE SLES8 for AMD64 への Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 \(9.0.4.2.0\) のインストール](#)

1.2.1 SUSE Linux Enterprise Server 9 (SLES 9) へのインストール

Oracle Collaboration Suite を SuSE Linux Enterprise Server 9 にインストールするには、『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』で説明されている手順の他に、この項の次の手順を実行します。

1.2.1.1 SLES 9 のソフトウェア要件

[表 1-1](#) に、SLES 9 のオペレーティング・システム要件および各コンポーネントのバージョンを確認するコマンドを示します。Oracle Collaboration Suite でサポートされているオペレーティング・システム固有のソフトウェアの最新リストは、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

表 1-1 ソフトウェア要件

コンポーネント	要件	コマンド
Linux のカーネル・バージョン	Kernel 2.6.5-7.97	\$ <code>uname -a</code>
glibc バージョン	glibc-2.3.3-98	\$ <code>rpm -q glibc</code>
必須オペレーティング・システム・パッケージ	binutils-2.15.90.0.1.1-32	\$ <code>rpm -q package_name</code>
	pdksh-5.2.14	
	sysstat-5.0.1	
	libstdc++-3.3.3-43	
	gcc-3.3.3-43	
	orarun-1.8-109	
	gnome-libs 1.4.1.7-671.1	

特定のパッケージをインストールする必要がある場合は、次のコマンドを実行してパッケージをダウンロードおよびインストールします。

```
# rpm -i package_name
```

1.2.1.2 SLES 9 の環境設定

2.4.21 を指定するために LD_ASSUME_KERNEL 環境変数を設定します。

- Bourne シェル、Bash シェルまたは Korn シェルの場合：

```
$ LD_ASSUME_KERNEL=2.4.21
$ export LD_ASSUME_KERNEL
```

- C シェルまたは tcsh シェルの場合：

```
$ setenv LD_ASSUME_KERNEL 2.4.21
```

/usr/lib/libInternalSymbols.so が含まれるように LD_PRELOAD 環境変数を設定します。

- Bourne シェル、Bash シェルまたは Korn シェルの場合：

```
$ LD_PRELOAD=/usr/lib/libInternalSymbols.so
$ export LD_PRELOAD
```

- C シェルまたは tcsh シェルの場合：

```
$ setenv LD_PRELOAD /usr/lib/libInternalSymbols.so
```

1.2.1.3 SLES 9 に対して実行するインストール前の追加手順

次のインストール前の手順を実行します。

1. 必要に応じて、perl 実行可能ファイルに対して次のシンボリック・リンクを作成します。

```
$ ln -sf /usr/bin/perl /usr/local/bin/perl
```

2. 必要に応じて、fuser 実行可能ファイルに対して次のシンボリック・リンクを作成します。

```
$ ln -sf /bin/fuser /sbin/fuser
```

3. root ユーザーとして次の手順を実行して、環境を再設定します。

- a. 次のコマンドを入力します。

```
$ cd /etc/profile.d
$ mv oracle.csh oracle.csh.bak
$ mv oracle.sh oracle.sh.bak
$ mv alljava.sh alljava.sh.bak
$ mv alljava.csh alljava.csh.bak
```

- b. テキスト・エディタを開き、\$HOME/.profile ファイルの次の行をコメント行にします。

```
. ./oracle
```

- c. oracle アカウントからログアウトします。

- d. oracle アカウントに再度ログインして、変更を有効にします。

4. Java パッケージがシステムにインストールされている場合は、JAVA_HOME などの Java 環境変数を設定解除します。

5. 次の手順に従って、適切なコンパイラ環境を作成します。

- a. gcc_old パッケージをインストールします。

これによって、/opt/gcc295 ディレクトリに GCC 2.95.3-175.2 バージョンがインストールされます。

注意： gcc_old パッケージは、SuSE Maintenance Web サイトからダウンロードできます。

<http://sdb.suse.de/en/psdb/html/49cf8a59749a910eabbcaabd33d048ad.html>

- b. Oracle の一部の make ファイルには、/usr/bin/gcc ディレクトリへのハード・コードされたパスが含まれているため、次のシンボリック・リンクを作成します。

```
$ ln -s /opt/gcc295/bin/gcc /usr/bin/gcc
$ ln -s /opt/gcc295/bin/gcc /usr/bin/cc
```

6. /etc/services ファイルを調べて、次のポート範囲が使用可能であることを確認します。

- Oracle Internet Directory で必要なポート 4031-4040
- Oracle Enterprise Manager で必要なポート 1810-1814
- Real-Time Collaboration の 2400 ~ 2700 の範囲内の 5 つ以上の空きポート
- Webcache のポート 4000
- TNS Listener のポート 1521
- Email のポート 25、143、110、993.995

注意： 使用されるポートの完全なリストは、『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』を参照してください。

必要に応じて、/etc/services ファイルからエントリを削除し、システムを再起動します。

1.2.1.4 SLES 9 のための追加のインストール手順

次の項では、Oracle9iAS Infrastructure、Oracle Collaboration Suite Information Storage および Oracle Collaboration Suite Middle-Tier を SLES 9 にインストールする場合に実行する必要がある追加のインストール手順について説明します。

1.2.1.4.1 Oracle9iAS Infrastructure

次の手順を実行します。

1. 次の手順を実行して、JDK 1.3.1_10 をダウンロードします。
 - a. JDK 1.3.1_10 の stagehome をダウンロードします。詳細は、Bug#3335292 を参照してください。
 - b. ダウンロードした JDK 1.3.1_10 の shiphome のディスク 1 のディレクトリから Installer を起動します。
 - c. 宛先パスを Infrastructure の Oracle ホーム・ディレクトリ（/opt/oracle/infra など）として設定します。
 - d. ソース・パスは変更しないでください。
 - e. JDK 1.3.1_10 のインストールを続行して、完了します。
2. ダウンロードした JDK 1.3.1_10 の shiphome のディスク 1 のディレクトリから Oracle Universal Installer を再度起動します。
 - a. 宛先パス（/opt/oracle/infra など）が、JDK 1.3.1_10 のインストール時に選択したディレクトリと同じディレクトリであることを確認します。
 - b. ソース・パスを変更して /Disk1/stage/products.jar ファイルを指定します。
3. Installer によって、メモリー不足を報告するエラーが返されます。このエラーを解決するには、次の手順を実行します。
 - a. Installer のエラー・ウィンドウで「OK」をクリックします。
 - b. Installer のウィンドウは閉じないでください。
 - c. Bug#3656396 のパッチを適用します。
4. 『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』で説明されているインストールを実行します。

表 1-2 に、インストールの再リンク・フェーズ中に発生する可能性があるエラーを示します。

表 1-2 SLES 9 での再リンク・エラー

エラー	解決方法
ins_sqlplus.mk 再リンク・エラー	次の手順を実行します。 - 別の端末ウィンドウを開きます。 - ORACLE_HOME 環境変数を設定します。 \$ORACLE_HOME/bin ディレクトリが含まれるように PATH 環境変数を設定します。 - Bug#3159913 のパッチを適用します。 - インストールのエラー・ウィンドウで「再試行」をクリックします。
ins_ctx.mk 再リンク・ エラー	次の手順を実行します。 - 別の端末ウィンドウを開きます。 - Bug#2037255 のパッチを適用し、9.0.1 バージョンのパッチを使用します。 パッチの README で説明されているとおり、make コマンドを実行すると失敗します。この失敗は無視します。 - 次の手順を実行して、リンク行に \$(LINKLDLIBS) が含まれるように、\$ORACLE_HOME/ctx/lib/ins_ctx.mk ファイルの行 14 を変更します。 \$(LINK) \$(CTXHXOBJ) bug2037255.o \$(INSO_LINK) \$(LINKLDLIBS) - Installer のエラー画面で「再試行」をクリックします。

1.2.1.4.2 Oracle Collaboration Suite Information Storage

次の手順を実行します。

- Bug#3903504 のパッチをダウンロードします。このパッチは、SLES 9 をサポートするために更新された oraparam.ini ファイルを提供します。
- 次のコマンドを実行して、ディスク 1 から Installer を起動します。

```
$ cdrom_mount/runInstaller -paramFile path_to_local_oraparam.ini
```

たとえば、次のようになります。

```
$ cdrom_mount/runInstaller -paramFile /home/oracle/oraparam.ini
```

- 3. メモリー不足のエラーが画面に表示された場合は、「続行」をクリックします。
- 4. 『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit) 』で説明されているインストールを実行します。

表 1-3 に、インストールの再リンク・フェーズ中に発生する可能性があるエラーを示します。

表 1-3 SLES 9 での再リンク・エラー

エラー	解決方法
ins_sqlplus.mk 再リンク・エラー	次の手順を実行します。 1. 新しい端末ウィンドウを開きます。 2. ORACLE_HOME 環境変数を設定します。 3. \$ORACLE_HOME/bin および /sbin ディレクトリが含まれるように PATH 環境変数を設定します。 4. Bug#3152145 のパッチを適用します。Red Hat 3.0 に固有の手順については、パッチ内の README.txt ファイルを参照してください。 5. Installer のエラー・ウィンドウで「再試行」をクリックします。
ins_oemagent.mk 再リンク・エラー	次の手順を実行します。 1. 新しい端末ウィンドウを開きます。 2. ORACLE_HOME 環境変数を設定します。 3. \$ORACLE_HOME ディレクトリが含まれるように PATH 環境変数を設定します。 4. 9.2.0.3 バージョンのパッチを使用して、Bug#3119415 のパッチを適用します。 5. Installer のエラー画面で「再試行」をクリックします。

1.2.1.4.3 Oracle Collaboration Suite Middle-Tier

次の手順を実行します。

- 1. 次の手順を実行して、JDK 1.3.1_10 をダウンロードします。
 - a. JDK 1.3.1_10 の stagehome をダウンロードします。詳細は、Bug#3335292 を参照してください。
 - b. ダウンロードした JDK 1.3.1_10 の shiphome のディスク 1 のディレクトリから Oracle Universal Installer を起動します。

- c. 宛先パスを **Infrastructure** の Oracle ホーム・ディレクトリ (`/opt/oracle/infra` など) として設定します。
 - d. ソース・パスは変更しないでください。
 - e. JDK 1.3.1_10 のインストールを続行して、完了します。
2. 次の手順を実行して、ダウンロードした JDK 1.3.1_10 の **shiphome** のディスク 1 のディレクトリから **Oracle Universal Installer** を再度起動します。
 - a. 宛先パス (`/opt/oracle/midtier` など) が、JDK 1.3.1_10 のインストール時に選択したディレクトリと同じディレクトリであることを確認します。
 - b. ソース・パスを変更して `/Disk1/stage/products.jar` ファイルを指定します。
3. **Installer** によって、メモリー不足を報告するエラーが返されます。このエラーを解決するには、次の手順を実行します。
 - a. **Installer** のエラー・ウィンドウで「OK」をクリックします。
 - b. **Installer** のウィンドウは閉じないでください。
 - c. Bug#3656396 のパッチを適用します。
4. 『Oracle Collaboration Suite インストールेशनおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』で説明されているインストールを実行します。

表 1-4 に、再リンク・フェーズ中に発生する可能性があるエラーおよびその解決方法を示します。

表 1-4 SLES 9 での再リンク・エラー

エラー	解決方法
<code>ins_sqlplus.mk</code> 再リンク・エラー	次の手順を実行します。 1. 新しい端末ウィンドウを開きます。 2. <code>ORACLE_HOME</code> 環境変数を設定します。 3. <code>\$ORACLE_HOME/bin</code> ディレクトリが含まれるように <code>PATH</code> 環境変数を設定します。 4. Bug#3159913 のパッチを適用します。 5. Installer のエラー画面で「再試行」をクリックします。

5. `root.sh` スクリプトを実行するように要求されたら、`oracle` ユーザーとして Bug#3711218 のパッチを適用します。これによって、**Webcache Configuration Assistant** でのエラーの発生を回避できます。

1.2.1.5 SLES 9 でのインストール後の手順

2.4.21 を指定するために LD_ASSUME_KERNEL 環境変数を設定します。

- Bourne シェル、Bash シェルまたは Korn シェルの場合：

```
$ LD_ASSUME_KERNEL=2.4.21
$ export LD_ASSUME_KERNEL
```

- C シェルまたは tcsh シェルの場合：

```
$ setenv LD_ASSUME_KERNEL 2.4.21
```

/usr/lib/libInternalSymbols.so が含まれるように LD_PRELOAD 環境変数を設定します。

- Bourne シェル、Bash シェルまたは Korn シェルの場合：

```
$ LD_PRELOAD=/usr/lib/libInternalSymbols.so
$ export LD_PRELOAD
```

- C シェルまたは tcsh シェルの場合：

```
$ setenv LD_PRELOAD /usr/lib/libInternalSymbols.so
```

1.2.1.6 SLES 9 への Patch Set 1 (9.0.4.2) のインストール

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) を正常にインストールおよび構成した後、次の手順に従って Patch Set 1 (9.0.4.2) を適用します。

1. [1.2.1.2 項「SLES 9 の環境設定」](#) の説明に従って、環境変数を設定します。
2. Oracle internet Support Center より Oracle Collaboration Suite Patch Set 1 (9.0.4.2.0) をダウンロードします。
3. Disk1/install/linux/oraparam.ini ファイルをローカル・ファイル・システムにコピーし、ファイル内の Linux=redhat-2.1,UnitedLinux-1.0 という行を Linux= に変更します。
4. 次のコマンドを実行して、ディスク 1 から Installer を起動します。

```
$ cdrom_mount/runInstaller -paramFile path_to_local_oraparam.ini
```

たとえば、次のようになります。

```
$ cdrom_mount/runInstaller -paramFile /home/oracle/oraparam.ini
```

5. Oracle Collaboration Suite Patch Set の README ファイルの説明に従って、Patch Set を適用します。

1.2.1.7 SLES 9 の既知の問題

SLES 9 には、次の既知のバグが存在します。

表 1-5 SLES 9 の既知の問題

Bug#	説明	処置
3795078	Enterprise Manager の Web ページにメモリー使用量のチャートが表示されません。	解決するには、このバグ用のパッチを適用します。
3798290	WebCache 管理インタフェースを使用して WebCache を正常に起動できません。	Enterprise Manager コンソールまたは OPMN を使用して Webcache を管理してください。または、Webcache 管理 GUI を使用すると正常に起動できるため、エラーを無視しても問題ありません。
3800837	OCS 9041 ifscs のインストールは正常に完了しますが、Enterprise Manager ページの iFS リンクにアクセスするとパスワードが間違っているというエラーが表示されます。また、このページには ifs コンポーネントのリストも表示されません。	解決するには、このバグ用のパッチを適用します。

1.2.2 SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 8 へのインストール

Oracle Collaboration Suite を UnitedLinux 1.0 にインストールするには、『Oracle Collaboration Suite インストールガイドおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』で説明されている手順の他に、次の手順を実行します。

1.2.2.1 UnitedLinux のためのインストール前の追加手順

Oracle Collaboration Suite を UnitedLinux 1.0 にインストールする前に、次の手順を実行します。

1. hostname コマンドが、次に示すように完全修飾されたホスト名を返すことを確認します。

```
$ hostname
hostname.domainname
```
2. 適切なコンパイラ環境を作成します。
 - a. gcc_old パッケージをインストールします。これによって、/opt/gcc295 ディレクトリに GCC 2.95.3 がインストールされます。

- b. 次のシンボリック・リンクを作成します。Oracle の一部の **make** ファイルには、`/usr/bin/gcc` ディレクトリへのハード・コードされたパスが含まれているため、これらは必須です。

```
prompt> ln -s /opt/gcc295/bin/gcc /usr/bin/gcc
prompt> ln -s /opt/gcc295/bin/gcc /usr/bin/cc
```

3. Java パッケージがシステムにインストールされている場合は、`JAVA_HOME` などの Java 環境変数を設定解除します。

注意： 何もインストールされていないシステムに **UnitedLinux** をインストールする場合、**UnitedLinux** ディストリビューションとともに提供される Java パッケージはインストールしないことをお勧めします。

4. Perl 実行可能ファイルに対して次のシンボリック・リンクを作成します。

```
$ ln -sf /usr/bin/perl /usr/local/bin/perl
```

5. `oracrun-1.8-18` という `oracrun` パッケージがシステムにインストールされている場合は、次の環境変数を設定解除します。

- `ORACLE_HOME`
- `ORACLE_SID`
- `ORACLE_BASE`
- `ORA_NLS33`
- `TNS_ADMIN`
- `SDK_HOME`
- `JDK_HOME`
- `JRE_HOME`
- `JAVA_HOME`
- `JAVA_ROOT`
- `CLASSPATH`

6. 1025 ～ 49151 の範囲の 5 つのポートが使用可能なことを確認します。

必要に応じて、`/etc/services` ファイルからエントリを削除し、システムを再起動します。1025 ～ 49151 の範囲のこれら 5 つのポートは、**Real-Time Collaboration (RTC)** コンポーネントで必要です。5 つのポートが使用可能でない場合、関連付けられている **Configuration Assistant** は失敗します。

1.2.2.2 UnitedLinux のための追加のインストール手順

Infrastructure または Oracle Collaboration Suite を UnitedLinux 1.0 にインストールすると、再リンク・フェーズ中にエラーが表示されます。Installer のウィンドウは閉じないでください。エラーを解決するには、次の手順を実行します。

1. 新しい端末ウィンドウを開きます。
2. `$ORACLE_HOME/lib/sysliblist` ファイルを編集し、次のエントリを行の最後に追加します。

`-lgcc -L/opt/gcc295/lib/gcc-lib/i486-suse-linux/2.95.3`
3. 次のコマンドを実行します。

`prompt> $ORACLE_HOME/bin/genclntsh`
4. Installer のウィンドウで「再試行」をクリックします。その後、インストールはエラーを表示せずに続行されます。

1.2.3 Red Hat Enterprise Linux 3 へのインストール

Oracle Collaboration Suite を Red Hat Enterprise Linux 3 にインストールするには、『Oracle Collaboration Suite インストールガイドおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』で説明されている手順の他に、次の手順を実行します。

1.2.3.1 ソフトウェア要件

表 1-6 に、Red Hat Enterprise Linux 3 のオペレーティング・システム要件および各コンポーネントのバージョンを確認するコマンドを示します。サポートされている Red Hat Enterprise Linux 3 固有のソフトウェア・パッケージ（カーネル・バージョン、rpm パッケージなど）の最新リストは、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

表 1-6 オペレーティング・システム要件

コンポーネント	要件	コマンド
Linux のカーネル・バージョン	2.4.21-4.EL	\$ uname -a
glibc バージョン	glibc2.3.2-95.3	\$ rpm -q glibc
必須オペレーティング・システム・パッチ	setarch-1.3-1 pdksh-5.2.14 gnome-libs-1.4.1.2.90-34.1 compat-glibc-7.x-2.2.4.32.5 compat-db-4.0.14.5 compat-gcc-7.3-2.96.122 compat-gcc-c++-7.3-2.96.122 compat-libstdc++-7.3-2.96.122 compat-libstdc++-devel-7.3-2.96.122	\$ rpm -qa

1.2.3.2 環境の設定

インストールを開始する前に、次の追加タスクを実行して環境を設定します。

1. root ユーザーとして、/usr/bin/gcc および /usr/bin/g++ 実行可能ファイルの名前を次のように変更します。

prompt> mv /usr/bin/gcc /usr/bin/gcc323
prompt> mv /usr/bin/g++ /usr/bin/g++323
2. root ユーザーとして、次のコマンドを入力してシンボリック・リンクを作成します。

prompt> ln -s /usr/bin/gcc296 /usr/bin/gcc
prompt> ln -s /usr/bin/g++296 /usr/bin/g++
3. hostname コマンドが、次に示すように完全修飾されたホスト名を返すことを確認します。

prompt> hostname
hostname.domainname

4. Java パッケージがシステムにインストールされている場合は、Java 環境変数を設定解除します。たとえば、JAVA_HOME 環境変数を設定解除するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> unset JAVA_HOME
```

5. Oracle 関連のインストール環境変数がデフォルトで設定されている場合は設定解除します。環境変数を設定解除するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> unset VARIABLE_NAME
```

6. カーネル・バージョン 2.4.19 を指定するために LD_ASSUME_KERNEL 環境変数を設定します。

C シェルの場合：

```
% setenv LD_ASSUME_KERNEL 2.4.19
```

Bourne シェル、Bash シェルまたは Korn シェルの場合：

```
$ LD_ASSUME_KERNEL=2.4.19; export LD_ASSUME_KERNEL
```

1.2.3.3 インストール前の追加手順

インストールを開始する前に、次のインストール前の追加手順を実行します。

1. 新しい端末ウィンドウを開きます。
2. root ユーザーとしてログインします。
3. Oracle Universal Installer を実行する前に、パッチ 3006854 を適用して libcwait シンボルの問題を解決します。パッチの取得に関しては、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

1.2.3.4 追加のインストール手順

次の項では、Oracle9iAS Infrastructure、Oracle Collaboration Suite Information Storage および Oracle Collaboration Suite Middle-Tier を Red Hat Enterprise Linux 3 にインストールする場合に実行する必要がある追加のインストール手順について説明します。

1.2.3.4.1 Oracle9iAS Infrastructure Oracle9iAS Infrastructure を Red Hat Enterprise Linux 3 にインストールする際、次の手順を実行します。

1. パッチ 3335292 を使用して、JDK 1.3.1_10 をダウンロードします。

2. JDK 1.3.1_10 インストール・ソフトウェアをダウンロードしたディスク 1 のディレクトリからインストーラを起動します。
3. Oracle9iAS Infrastructure の Oracle ホーム・ディレクトリの名前およびフルパスを宛先パス (/opt/oracle/infra など) として入力します。

注意： ソース・パスは変更しないでください。

4. JDK 1.3.1_10 のインストールを実行します。
5. JDK 1.3.1_10 インストール・ソフトウェアをダウンロードしたディスク 1 のディレクトリからインストーラを再度起動します。
6. 宛先パスが、JDK 1.3.1_10 のインストール時に選択したディレクトリ (/opt/oracle/infra など) であることを確認します。
7. ソース・パスとして `mount_point/stage/products.jar` を選択します。
8. 『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』で説明されている残りのインストール・タスクを実行します。

表 1-7 に、再リンク・フェーズ中に発生する可能性があるエラーおよびその解決方法を示します。

1.2.3.4.2 Oracle Collaboration Suite Information Storage

Oracle Collaboration Suite Information Storage を Red Hat Enterprise Linux 3 にインストールする際、次の手順を実行します。

1. 1 枚目の CD-ROM からローカル・ファイル・システムに `mount_point/install/linux/oraparam.ini` をコピーします。
2. `oraparam.ini` ファイルを編集して、行 `Linux=redhat-2.1, UnitedLinux-1.0` を次のように変更します。

`Linux=`
3. 『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』で説明されている残りのインストール前のタスクを実行します。

4. 1 枚目の CD-ROM からインストーラを起動するには、次のコマンドを使用します。

```
cdrom_mount/runinstaller -paramFile path/to/local_oraparam.ini
```

注意： 環境の設定に使用した端末と同じ端末からインストーラを起動します。

表 1-7 に、再リンク・フェーズ中に発生する可能性があるエラーおよびその解決方法を示します。

1.2.3.4.3 Oracle Collaboration Suite Middle-Tier

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier を Red Hat Enterprise Linux 3 にインストールする際、次の手順を実行します。

1. パッチ 3335292 を使用して、JDK 1.3.1_10 をダウンロードします。
2. JDK 1.3.1_10 インストール・ソフトウェアをダウンロードしたディスク 1 のディレクトリからインストーラを起動します。
3. Oracle Collaboration Suite Middle-Tier の Oracle ホーム・ディレクトリの名前およびフルパスを宛先パスとして入力します。たとえば、`/opt/oracle/mtier` です。

注意： ソース・パスは変更しないでください。

4. JDK 1.3.1_10 のインストールを実行します。
5. JDK 1.3.1_10 インストール・ソフトウェアをダウンロードしたディスク 1 のディレクトリからインストーラを再度起動します。
6. 宛先パスが、手順 3 で入力したディレクトリであることを確認します。
7. ソース・パスとして `mount_point/stage/products.jar` を選択します。
8. 『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』で説明されている残りのインストール・タスクを実行します。

表 1-7 に、再リンク・フェーズ中に発生する可能性があるエラーおよびその解決方法を示します。

表 1-7 Red Hat Enterprise Linux 3 での再リンク・エラー

エラー	解決方法
ins_sqlplus.mk 再リンク・エラー (Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite Middle-Tier)	1. 新しい端末ウィンドウを開きます。 2. ORACLE_HOME 環境変数を設定します。 3. \$ORACLE_HOME/bin が含まれるように PATH を設定します。 4. パッチ 3159913 を適用します。 5. OUI のエラー・ウィンドウで「再試行」をクリックします。
ins_ctx.mk 再リンク・エラー	1. 新しい端末ウィンドウを開きます。 2. パッチ 2037255 (バージョン 9.0.1) を適用します。パッチ内の README.txt ファイルで説明されているとおり、make コマンドを実行すると失敗します。この失敗は無視します。 3. リンク行に \$(LINKLDLIBS) が含まれるように、\$ORACLE_HOME/ctx/lib/ins_ctx.mk ファイルを次のように編集します。 Line 14: \$(LINK)\$ (CTXHXOBJ) bug3027255.o \$(INSO_LINK) \$(LINKLDLIBS) 4. OUI のエラー・ウィンドウで「再試行」をクリックします。
ins_sqlplus.mk 再リンク・エラー (Oracle Collaboration Suite Information Storage)	1. 新しい端末ウィンドウを開きます。 2. ORACLE_HOME 環境変数を設定します。 3. 次の行が含まれるように PATH を設定します。 \$ORACLE_HOME/bin /sbin 4. パッチ 3152145 を適用します。Red Hat Enterprise Linux 3 に固有の手順については、パッチ内の README.txt ファイルを参照してください。 5. OUI のエラー・ウィンドウで「再試行」をクリックします。
ins_oemagent.mk での oemagent 再リンク・エラー	1. 新しい端末ウィンドウを開きます。 2. ORACLE_HOME 環境変数を設定します。 3. \$ORACLE_HOME/bin が含まれるように PATH 環境変数を設定します。 4. パッチ 3119415 (バージョン 9.2.0.3) を適用します。 5. OUI のエラー・ウィンドウで「再試行」をクリックします。

1.2.3.5 インストール後の追加手順

カーネル・バージョン 2.4.19 を指定するために LD_ASSUME_KERNEL 環境変数を設定します。

C シェルの場合：

```
% setenv LD_ASSUME_KERNEL 2.4.19
```

Bourne シェル、Bash シェルまたは Korn シェルの場合：

```
$ LD_ASSUME_KERNEL=2.4.19; export LD_ASSUME_KERNEL
```

1.2.3.6 既知の問題およびバグ

この項では、Oracle Collaboration Suite を Red Hat Enterprise Linux 3 にインストールする場合の既知の制限およびバグについて説明します。

- 次のタスクを実行すると、次に示す、バイナリが不適切に構築されるエラーが発生します。
 - a. webcachectl start コマンドを使用した Web Cache の起動
 - b. unistart および unistop コマンドを使用した Calendar Server の起動および停止エラー・テキストは次のとおりです。

「Incorrectly built binary which accesses errno or h_errno directly. Needs to be fixed」

このエラーは無視しても問題ありません。
- 次の既知のバグは、Red Hat Enterprise Linux 3 に存在します。

Bug#	説明	処置
3339835	Oracle Directory Manager (ODM) ヘルプ・ナビゲータが正常に機能しません。 Oracle9iAS Infrastructure を Red Hat Enterprise Linux 3 にインストールする際、ODM ヘルプ・ナビゲータにヘルプ・トピックの目次が表示されません。	ありません。

1.2.4 Red Hat Enterprise Linux 3 for AMD64/EM64T への Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) のインストール

Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) を Red Hat Enterprise Linux 3 for AMD64/EM64T にインストールするには、『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』で説明されている手順の他に、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.0) をインストールするための次の手順を実行します。その後、Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) をインストールするための最後の手順を実行します。

1.2.4.1 ソフトウェア要件

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.0) をインストールする前に、次の追加手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを使用して、Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 および Quarterly Update 1 がインストールされていることを確認します。

```
prompt> cat/etc/issue
Red Hat Enterprise Linux AS release 3 (Taroon Update 1)
```

3. サポートされている最小のカーネル・バージョンと glibc バージョンおよび必須のソフトウェア・パッケージがインストールされていることを確認します。

表 1-8 に、Red Hat Enterprise Linux 3 for AMD64/EM64T のオペレーティング・システム要件および各コンポーネントのバージョンを確認するコマンドを示します。サポートされている Red Hat Enterprise Linux 3 for AMD64/EM64T 固有のソフトウェア・パッケージ (JDK バージョンなど) の最新リストは、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

パッケージがインストールされているかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> rpm -q package_name
```

パッケージがインストールされていない場合は、次のコマンドを使用して、パッケージをダウンロードしてインストールします。

```
prompt> rpm -i package_name
```

表 1-8 オペレーティング・システム要件

コンポーネント	要件	コマンド
Linux のカーネル・バージョン	2.4.21-9.EL	prompt> uname -a
glibc バージョン	glibc2.3.2-95.6	prompt> rpm -q glibc
必須オペレーティング・システム・パッチ	gcc-3.2.3-20.x86_64 libgcc-3.2.3-20.i386 setarch-1.3-1.x86_64 pdksh-5.2.14-21.x86_64 compat-glibc-7.x-2.2.4.32.5.i386 ¹ compat-gcc-7.3-2.96.122.i386 compat-libstdc++-7.3-2.96.122.i386 compat-libstdc++-devel-7.3-2.96.122.i386 compat-gcc-c++-7.3-2.96.122.i386 sysstat-4.0.7-4.x86_64 gnome-libs-1.4.1.2.90-34.1.i386 ¹	prompt> rpm -qa

¹ Red Hat Enterprise Linux 3 for x86

1.2.4.2 インストール前の追加手順

インストールを開始する前に、次のインストール前の追加手順を実行します。

1. 新しい端末ウィンドウを開きます。
2. root ユーザーとしてログインします。
3. パッチ 3423540 を適用します。このパッチによって、/stub/lib/libcwait.so ライブラリ（32 ビットの共有ライブラリ）および /stub/lib64/libcwait.so ライブラリ（64 ビットの共有ライブラリ）が作成されます。その後、/etc/ld.so.preload ファイルに次の行が追加されます。

```
/stub/$LIB/libcwait.so
```

パッチの取得に関しては、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

注意： このパッチをインストールするには /usr/bin/gcc ディレクトリに gcc-3.2.3-20 (x86-64) 実行可能ファイルが必要なため、次の手順に進む前にこのパッチを適用しておく必要があります。

1.2.4.3 環境の設定

インストールを開始する前に、次の追加タスクを実行して環境を設定します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. コンパイラ環境に対して次のシンボリック・リンクが存在することを確認します。

```
gcc -> gcc296
g++ -> g++296
```

シンボリック・リンクが存在するかどうかを確認するには、次のコマンドを使用します。

```
prompt> cd /usr/bin
prompt> ls -l gcc g++
```

シンボリック・リンクが存在しない場合は作成する必要があります。root ユーザーとして、次の手順を実行します。

- a. 次のコマンドを使用して、既存ファイルのバックアップを作成します。

```
prompt> mv /usr/bin/gcc /usr/bin/gcc.backup
prompt> mv /usr/bin/g++ /usr/bin/g++.backup
```

- b. 次のコマンドを使用して、コンパイラ環境に対するシンボリック・リンクを作成します。

```
prompt> ln -s /usr/bin/gcc296 /usr/bin/gcc
prompt> ln -s /usr/bin/g++296 /usr/bin/g++
```

必要に応じて、元のファイルをリストアできます。ただし、Oracle Collaboration Suite インストールを適切に再リンクするには、この手順で説明しているとおりリンクを再作成する必要があります。

3. hugemem カーネルが使用されている場合は、次のコマンドを使用してアーキテクチャを設定します。

```
prompt> setarch i386
```


4. `hostname` コマンドが、次に示すように完全修飾されたホスト名を返すことを確認します。

```
prompt> hostname
hostname.domainname
```

5. `oracle` ユーザーとしてログインします。
6. Oracle 関連のインストール環境変数がデフォルトで設定されている場合は設定解除します。たとえば、`/etc/profile.d` にある `.profile` や `.login` ファイルまたはスクリプトの `ORACLE_HOME`、`PATH`、`LD_LIBRARY_PATH` を設定解除します。環境変数を設定解除するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> unset VARIABLE_NAME
```

7. Java パッケージがシステムにインストールされている場合は、Java 環境変数を設定解除します。たとえば、`JAVA_HOME` 環境変数を設定解除するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> unset JAVA_HOME
```

8. 次の環境変数を設定します。

C シェルの場合：

```
% setenv LDEMULATION elf_i386
% setenv LD_ASSUME_KERNEL 2.4.19
```

Bourne シェル、Bash シェルまたは Korn シェルの場合：

```
$ LDEMULATION=elf_i386; export LDEMULATION
$ LD_ASSUME_KERNEL=2.4.19; export LD_ASSUME_KERNEL
```

9. Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.0) をインストールする前、または動作中のシェルから Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.0) プロセスを実行する前に、`linux32` エミュレータを使用します。`linux32` エミュレータを起動するコマンドは次のとおりです。

```
prompt> linux32 bash
```

1.2.4.4 追加のインストール手順

次の項では、Oracle9iAS Infrastructure、Oracle Collaboration Suite Information Storage および Oracle Collaboration Suite Middle-Tier を Red Hat Enterprise Linux 3 for AMD64/EM64T にインストールする場合に実行する必要がある追加のインストール手順について説明します。

1.2.4.4.1 Oracle9iAS Infrastructure

Oracle9iAS Infrastructure を Red Hat Enterprise Linux 3 for AMD64/EM64T にインストールする際、次の手順を実行します。

1. パッチ 3335292 を使用して、JDK 131_10 インストール・ソフトウェアをダウンロードします。
2. ダウンロードしたインストール・ソフトウェアを一時領域に抽出します。
3. 一時領域内のディスク 1 のディレクトリからインストーラを起動します。
4. Oracle9iAS Infrastructure の Oracle ホーム・ディレクトリの名前およびフルパスを宛先パス (/opt/oracle/infra など) として入力します。

注意： ソース・パスは変更しないでください。

5. JDK 1.3.1_10 のインストールを実行します。
6. JDK 1.3.1_10 インストール・ソフトウェアをダウンロードしたディスク 1 のディレクトリからインストーラを再度起動します。
7. 宛先パスが、JDK 1.3.1_10 のインストール時に選択したディレクトリ (/opt/oracle/infra など) と同じであることを確認します。
8. ソース・パスとして *disk1_mount_point/stage/products.jar* を選択します。
9. 『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit) 』で説明されている残りのインストール・タスクを実行します。

表 1-9 に、再リンク・フェーズ中に発生する可能性があるエラーおよびその解決方法を示します。

1.2.4.4.2 Oracle Collaboration Suite Information Storage

Oracle Collaboration Suite Information Storage を Red Hat Enterprise Linux 3 for AMD64/EM64T にインストールする際、次の手順を実行します。

1. ローカル・ファイル・システムに
disk1_mount_point/install/linux/oraparam.ini ファイルをコピーします。
2. oraparam.ini ファイル内の次の行を変更します。

Linux=redhat-2.1, UnitedLinux-1.0

この行を次のように変更します。

Linux=

3. 『Oracle Collaboration Suite インストール・ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』で説明されている残りのインストール前のタスクを実行します。
4. ディスク 1 からインストーラを起動するには、次のコマンドを使用します。
`parameterfile` は `oraparam.ini` ファイルの場所
(`/home/oracle/oraparam.ini` など) です。
`disk1_mount_point/runinstaller -paramFile parameterfile`

注意： 環境の設定に使用した端末と同じ端末からインストーラを起動します。

表 1-9 に、再リンク・フェーズ中に発生する可能性があるエラーおよびその解決方法を示します。

1.2.4.4.3 Oracle Collaboration Suite Middle-Tier

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier を Red Hat Enterprise Linux 3 for AMD64/EM64T にインストールする際、次の手順を実行します。

1. パッチ 3335292 を使用して、JDK 131_10 インストール・ソフトウェアをダウンロードします。
2. ダウンロードしたインストール・ソフトウェアを一時領域に抽出します。
3. 一時領域内のディスク 1 のディレクトリからインストーラを起動します。
4. Oracle Collaboration Suite Middle-Tier の Oracle ホーム・ディレクトリの名前およびフルパスを宛先パス (`/opt/oracle/mtier` など) として入力します。

注意： ソース・パスは変更しないでください。

5. JDK 1.3.1_10 のインストールを実行します。
6. JDK 1.3.1_10 インストール・ソフトウェアをダウンロードしたディスク 1 のディレクトリからインストーラを再度起動します。
7. 宛先パスが、JDK 1.3.1_10 のインストール時に選択したディレクトリ (`/opt/oracle/mtier` など) と同じディレクトリであることを確認します。
8. ソース・パスとして `disk1_mount_point/stage/products.jar` を選択します。
9. 『Oracle Collaboration Suite インストール・ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』で説明されている残りのインストール・タスクを実行します。

表 1-9 に、再リンク・フェーズ中に発生する可能性があるエラーおよびその解決方法を示します。

表 1-9 Red Hat Enterprise Linux 3 for AMD64/EM64T での再リンク・エラー

エラー	解決方法
ins_sqlplus.mk 再リンク・エラー (Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite Middle-Tier)	1. 新しい端末ウィンドウを開きます。 2. ORACLE_HOME 環境変数を設定します。 3. \$ORACLE_HOME/bin が含まれるように PATH 環境変数を設定します。 4. パッチ 3159913 を適用します。 5. OUI のエラー・ウィンドウで「再試行」をクリックします。
ins_ctx.mk 再リンク・エラー	1. 新しい端末ウィンドウを開きます。 2. パッチ 2037255 (バージョン 9.0.1) を適用します。パッチ内の README.txt ファイルで説明されているとおり、make コマンドを実行すると失敗します。この失敗は無視します。 3. リンク行に \$(LINKLDLIBS) が含まれるように、\$ORACLE_HOME/ctx/lib/ins_ctx.mk ファイルを次のように編集します。 Line 14: \$(LINK)\$ (CTXHXOBJ) bug3027255.o \$(INSO_LINK) \$(LINKLDLIBS) 4. OUI のエラー・ウィンドウで「再試行」をクリックします。
ins_sqlplus.mk 再リンク・エラー (Oracle Collaboration Suite Information Storage)	1. 新しい端末ウィンドウを開きます。 2. ORACLE_HOME 環境変数を設定します。 3. 次の行が含まれるように PATH 環境変数を設定します。 \$ORACLE_HOME/bin /sbin 4. パッチ 3152145 を適用します。Red Hat Enterprise Linux 3 に固有の手順については、パッチ内の README.txt ファイルを参照してください。 5. OUI のエラー・ウィンドウで「再試行」をクリックします。
ins_oemagent.mk での oemagent 再リンク・エラー	1. 新しい端末ウィンドウを開きます。 2. ORACLE_HOME 環境変数を設定します。 3. \$ORACLE_HOME/bin が含まれるように PATH 環境変数を設定します。 4. パッチ 3119415 (バージョン 9.2.0.3) を適用します。 5. OUI のエラー・ウィンドウで「再試行」をクリックします。

1.2.4.5 Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) のインストール

Red Hat Enterprise Linux 3 for AMD64/EM64T 上の Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.0) に対して必須のインストール前のタスク、インストール・タスクおよび構成タスクを実行した後、次の手順に従って Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) を適用します。

1. 環境が [1.2.4.3 項](#) の手順に従って設定されていることを確認します。
2. オラクル社カスタマ・サポート・センターより、Bug#3564610 に関するパッチを取得してください。
3. 『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0)』の手順に従って、Oracle9iAS infrastructure、Oracle Collaboration Suite Information Storage および Oracle Collaboration Suite Middle-Tier の領域にパッチ・セットをインストールします。

1.2.4.6 ランタイム環境の設定

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.0) プロセスを実行する前に、次のタスクを実行してランタイム環境を設定します。

1. 次の環境変数を設定します。

C シェルの場合：

```
% setenv LDEMULATION elf_i386
% setenv LD_ASSUME_KERNEL 2.4.19
```

Bourne シェル、Bash シェルまたは Korn シェルの場合：

```
$ LDEMULATION=elf_i386; export LDEMULATION
$ LD_ASSUME_KERNEL=2.4.19; export LD_ASSUME_KERNEL
```

2. 動作中のシェルから Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.0) プロセスを実行する前に、linux32 エミュレータを使用します。次のコマンドを実行して linux32 エミュレータを起動します。

```
prompt> linux32 bash
```

1.2.5 Red Hat Enterprise Linux 4.0 Systems への Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) のインストール

Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) を Red Hat Enterprise Linux 4.0 にインストールするには、『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit) 』で説明されている手順の他に、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.0) をインストールするための次の手順を実行します。その後、Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) をインストールするための最後の手順を実行します。

1.2.5.1 ソフトウェア要件

Oracle Collaboration Suite (9.0.4.2) は、次の Red Hat Enterprise Linux 4.0 パッケージで動作保証されています。サポートされている Red Hat Enterprise Linux 4.0 固有のソフトウェア・パッケージ (カーネル・バージョン、rpm パッケージなど) の最新リストは、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

表 1-10 に、動作要件を示します。

表 1-10 オペレーティング・システム要件

コンポーネント	要件	コマンド
Linux のカーネル・バージョン	kernel-smp-2.6.9-5.EL	prompt> uname -a
必須オペレーティング・システム・パッケージ	gcc-3.4.3-9.EL4	prompt> rpm -qa
	gcc-c++-3.4.3-9.EL4	
	libgcc-3.4.3-9.EL4	
	glibc-2.3.4-2	
	compat-db-4.1.25-9	
	compat-libgcc-296-2.96-132.7.2	
	compat-libstdc++-296-2.96-132.7.2	
	compat-libgcc-296-2.96-132.7.2	
	compat-gcc-32-3.2.3-47.3	
	compat-gcc-32-c++-3.2.3-47.3	
	compat-oracle-rhel4-1.0-3	
この取得に関しては、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。		

表 1-10 オペレーティング・システム要件（続き）

コンポーネント	要件	コマンド
	compat-libcwait-2.0.1	
	この取得に関しては、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。	
	gnome-libs-1.4.1.2.90-44.1	
	pdksh-5.2.14-30	
	binutils-2.15.92.0.2-10.EL4	

1.2.5.2 環境の設定

インストールを開始する前に、次の追加タスクを実行して環境を設定します。

1. `hostname` コマンドが、次に示すように完全修飾されたホスト名を返すことを確認します。

```
$ hostname
hostname.domainname
```

2. Java パッケージがシステムにインストールされている場合は、`JAVA_HOME` などの Java 環境変数を設定解除します。
3. Oracle 関連のインストール環境変数がデフォルトで設定されている場合は設定解除します。たとえば、`/etc/profile.d` にある `.profile` や `.login` ファイルまたはスクリプトの `ORACLE_HOME`、`PATH`、`LD_LIBRARY_PATH` を設定解除します。環境変数を設定解除するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> unset VARIABLE_NAME
```

4. カーネル・バージョン 2.4.19 を指定するために `LD_ASSUME_KERNEL` 環境変数を設定します。

C シェルの場合：

```
% setenv LD_ASSUME_KERNEL 2.4.19
```

Bourne シェル、Bash シェルまたは Korn シェルの場合：

```
$ LD_ASSUME_KERNEL=2.4.19; export LD_ASSUME_KERNEL
```

1.2.5.3 追加のインストール手順

次の項では、Oracle9iAS Infrastructure、Oracle Collaboration Suite Information Storage および Oracle Collaboration Suite Middle-Tier を Red Hat Enterprise Linux 4.0 にインストールする場合に実行する必要がある追加のインストール手順について説明します。

1.2.5.3.1 Oracle9iAS Infrastructure

Oracle9iAS Infrastructure を Red Hat Enterprise Linux 4.0 にインストールする際、次の手順を実行します。

1. 前述の説明に従って環境設定を行います。
2. 次の手順を実行して、JDK 1.3.1_10 をダウンロードします。
 - a. パッチ 3335292 を使用して、JDK 131_10 インストール・ソフトウェアをダウンロードします。
 - b. ダウンロードした shiphome のディスク 1 のディレクトリから **Installer** を起動します。
 - c. Oracle9iAS Infrastructure の Oracle ホーム・ディレクトリの名前およびフルパスを宛先パス（/opt/oracle/infra など）として入力します。
 - d. ソース・パスは変更しないでください。
 - e. JDK のインストールを続行して、完了します。
3. ダウンロードした JDK 131_10 shiphome のディスク 1 のディレクトリから **Installer** を再度起動します。
4. 宛先パス（/opt/oracle/infra など）が、JDK のインストール時に指定したパスと同じであることを確認します。
5. ソース・パスを変更して、*Infrastructure_CD/Disk1/stage/products.jar* を選択します。
6. 『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』で説明されている手順に従って、インストールを続行します。
7. **Installer** によって、メモリー不足を報告するエラーが返されます。この問題を解決するには、次の手順を実行します。
 - a. **Installer** のエラー・ウィンドウを選択します。これは閉じないでください。
 - b. Bug#3656396 のパッチを適用します。
 - c. インストールを続行します。

8. インストールを続行して、完了します。
9. 表 1-9 に、再リンク・フェーズ中に発生する可能性があるエラーおよびその解決方法を示します。

1.2.5.3.2 Oracle Collaboration Suite Information Storage

Oracle Collaboration Suite Information Storage をインストールする際、次の手順を実行します。

1. 前述の説明に従って環境設定を行います。
2. パッチ 3335292 を使用して、JDK 131_10 インストール・ソフトウェアをダウンロードします。
3. ダウンロードした JDK 1.3.1_10 の shiphome のディスク 1 のディレクトリから Installer を起動します。
4. ソース・パスを変更して、
`Information_Storage_CD/Disk1/stage/products.jar` を選択します。
5. 『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』で説明されている手順に従って、インストールを続行します。
6. Installer によって、メモリー不足を報告するエラーが返されます。このエラーを解決するには、次の手順を実行します。
 - a. Installer のエラー・ウィンドウをクリックします。このウィンドウは閉じないでください。
 - b. Bug#3656396 のパッチを適用します。
 - c. インストールを続行します。
7. 『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』で説明されている残りのタスクを実行します。
8. 表 1-9 に、再リンク・フェーズ中に発生する可能性があるエラーおよびその解決方法を示します。
9. インストールを続行して、完了します。

1.2.5.3.3 Oracle Collaboration Suite Middle-Tier

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier を Red Hat Enterprise Linux 4.0 にインストールする際、次の手順を実行します。

1. 前述の説明に従って環境設定を行います。

2. 次の手順を実行して、JDK 1.3.1_10 をダウンロードします。
 - a. Bug#3335292 を使用して、JDK 131_10 shiphome をダウンロードします。
 - b. ダウンロードした shiphome のディスク 1 のディレクトリから **Installer** を起動します。
 - c. Oracle Collaboration Suite Middle-Tier の Oracle ホーム・ディレクトリの名前およびフルパスを宛先パス（/opt/oracle/mtier など）として入力します。
 - d. ソース・パスは変更しないでください。
 - e. JDK 131_10 のインストールを続行して、完了します。
3. JDK 1.3.1_10 インストール・ソフトウェアをダウンロードしたディスク 1 のディレクトリからインストーラを再度起動します。
4. 宛先パスが、JDK 1.3.1_10 のインストール時に選択したディレクトリ（/opt/oracle/mtier など）と同じディレクトリであることを確認します。
5. ソース・パスを変更して、*Middletier_CD/Disk1/stage/products.jar* を選択します。
6. 『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』で説明されている残りのインストール・タスクを実行します。
7. **Installer** によって、メモリー不足を報告するエラーが返されます。このエラーを解決するには、次の手順を実行します。
 - a. **Installer** のエラー・ウィンドウをクリックします。このウィンドウは閉じないでください。
 - b. Bug#3656396 のパッチを適用します。
 - c. インストールを続行します。

表 1-9 に、再リンク・フェーズ中に発生する可能性があるエラーおよびその解決方法を示します。

1.2.5.4 既知の問題

次のいずれかを行うと、端末ウィンドウに「Incorrectly built binary which accesses errno or h_errno directly. Needs to be fixed」というエラーが表示されます。

- `webcachectl start` コマンドを使用した Web Cache の起動
- `unistart` および `unistop` を使用した Calendar Server の起動および停止

これらのエラーは無視しても問題ありません。

表 1-5 に示す問題は、Red Hat Enterprise Linux 4.0 にも該当します。

Wireless EMD Integration のインストール後の手順

OCS 9.0.4.1.0 を Red Hat Enterprise Linux 4.0 にインストールする際に、ワイヤレス・スキーマのユーザー名およびパスワードは targets.xml ファイルでインスタンス化されません。

これを修正するには、次の回避策を実行します。

1. \$ORACLE_HOME/sysman/emd/targets.xml ファイルのバックアップを作成します。
2. \$ORACLE_HOME/sysman/emd/targets.xml ファイルを開き、oracle_wireless target xml セグメントの次の行を、ここに示すように変更します。

```
<Property NAME="UserName" VALUE="wireless" ENCRYPTED="FALSE"/>
<Property NAME="password" VALUE="WIRELESS_SCHEMA_PASSWORD" ENCRYPTED="FALSE"/>
<Property NAME="ConfigDBUserName" VALUE="wireless" ENCRYPTED="FALSE"/>
<Property NAME="ConfigDBpassword" VALUE="WIRELESS_SCHEMA_PASSWORD"
ENCRYPTED="FALSE"/>
```

ここで、WIRELESS_SCHEMA_PASSWORD は、ワイヤレス・スキーマのパスワードです。

3. targets.xml ファイルを保存して、EMD サーバーを再起動します。

1.2.6 SuSE SLES8 for AMD64 への Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) のインストール

Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) を Suse SLES8 for AMD64 にインストールするには、『Oracle Collaboration Suite インストールガイドおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』で説明されている手順の他に、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.0) をインストールするための次の手順を実行します。その後、Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) をインストールするための最後の手順を実行します。

1.2.6.1 ソフトウェア要件

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.0) をインストールする前に、次の追加手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. SLES8 が Service Pack 3 以上に更新されていることを確認します。たとえば、/etc/UnitedLinux-release ファイルに次の行が含まれているかどうかを確認します。

```
PATCH_LEVEL = 3
```

含まれていない場合は、SLES8 を Service Pack 3 に更新します。Service Pack 3 には Service Pack 2 の一部のパッケージが含まれていません。Service Pack 3 をインストールする前に、Service Pack 2 をインストールする必要があります。

3. 次のパッケージを削除します。パッケージがインストールされているかどうかを確認するには、次のコマンドを使用します。

```
prompt> rpm -qa
```

- gcc
- gcc-c++
- evlog
- kernel-source
- binutils
- qt3-devel
- arts-devel
- kdelibs3-devel
- kdenetwork3-devel
- kdbase3-devel

4. Oracle データベースのバイナリおよびライブラリの再リンクに必要な次の 32 ビットのバイナリをインストールします。Service Pack 2 ディストリビューションからパッケージをインストールしてください。一部のパッケージは、すでにインストールされている場合があります。

- UnitedLinux/i586/glibc-32bit-8.1-10.i586.rpm
- UnitedLinux/i586/baselibs-32bit-8.1-10.i586.rpm
- UnitedLinux/i586/devel_libs-32bit-8.1-10.i586.rpm
- UnitedLinux/i586/glibc-devel-32bit-8.1-10.i586.rpm

5. --nodeps オプションを指定して、次のパッケージをインストールします。たとえば、次のようになります。

```
prompt> rpm -i gcc_old-2.95.3-78.i586.rpm --nodeps
```

- orarun-1.8-29.i586.rpm

注意： oracle ユーザーを手動で構成する場合、orarun パッケージはインストールする必要がありません。

- gcc_old-2.95.3-78.i586.rpm
- binutils-2.12.90.0.15-75.i586.rpm

6. サポートされている最小のカーネル・バージョンと **glibc** バージョンおよび必須のソフトウェア・パッケージがインストールされていることを確認します。

表 1-8 に、SuSE SLES8 for AMD64 のオペレーティング・システム要件および各コンポーネントのバージョンを確認するコマンドを示します。サポートされている SuSE SLES8 for AMD64 固有のソフトウェア・パッケージ (JDK バージョンなど) の最新リストは、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

パッケージがインストールされているかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> rpm -q package_name
```

パッケージがインストールされていない場合は、次のコマンドを使用して、パッケージをダウンロードしてインストールします。

```
prompt> rpm -i package_name
```

表 1-11 オペレーティング・システム要件

コンポーネント	要件	コマンド
Linux のカーネル・バージョン	2.4.21	prompt> uname -a
glibc バージョン	glibc2.2.5-213	prompt> rpm -q glibc
必須オペレーティング・システム・パッチ	pdksh-5.2.14	prompt> rpm -qa
	sysstat-4.0.3	
	libstdc++-3.2.2-38	
	glibc-32bit-8.1-10	
	baselibs-32bit-8.1-10	
	devel_libs-32bit-8.1-10	
	glibc-devel-32bit-8.1-10	
	orarun-1.8-29	
	gcc_old-2.95.3-78	
	binutils-2.12.90.0.15-75	

1.2.6.2 環境の設定

インストールを開始する前に、次の追加タスクを実行して環境を設定します。

1. perl 実行可能ファイルに対して次のシンボリック・リンクが存在するかどうかを確認します。

```
prompt> ls -l /usr/local/bin/perl
```

perl 実行可能ファイルに対して次のシンボリック・リンクが存在しない場合は作成します。

```
prompt> ln -sf /usr/bin/perl /usr/local/bin/perl
```

2. fuser 実行可能ファイルに対して次のシンボリック・リンクが存在するかどうかを確認します。

```
prompt> ls -l /sbin/fuser
```

fuser 実行可能ファイルに対して次のシンボリック・リンクが存在しない場合は作成します。

```
prompt> ln -sf /bin/fuser /sbin/fuser
```

3. コンパイラ環境に対して次のシンボリック・リンクが存在することを確認します。

```
gcc -> /opt/gcc295/bin/gcc
```

```
cc -> /opt/gcc295/bin/gcc
```

シンボリック・リンクが存在するかどうかを確認するには、次のコマンドを使用します。

```
prompt> cd /usr/bin
```

```
prompt> ls -l gcc cc
```

シンボリック・リンクが存在しない場合は作成する必要があります。root ユーザーとして、次のタスクを実行します。

- a. 次のコマンドを使用して、既存ファイルのバックアップを作成します。

```
prompt> mv /usr/bin/gcc /usr/bin/gcc.backup
```

```
prompt> mv /usr/bin/cc /usr/bin/cc.backup
```

- b. 次のコマンドを使用して、コンパイラ環境に対するシンボリック・リンクを作成します。

```
prompt> ln -s /opt/gcc295/bin/gcc /usr/bin/gcc
```

```
prompt> ln -s /opt/gcc295/bin/cc /usr/bin/cc
```

必要に応じて、元のファイルをリストアできます。ただし、Oracle Collaboration Suite インストールを適切に再リンクするには、この手順で説明しているとおりにリンクを再作成する必要があります。

4. 次のシンボリック・リンクが存在するかどうかを確認します。

```
prompt> ls -l /lib/libgcc.a
```

次のシンボリック・リンクが存在しない場合は作成します。

```
prompt> ln -s /opt/gcc295/lib/gcc-lib/i486-suse-linux/2.95.3/libgcc.a  
/lib/libgcc.a
```

注意： Linux ディストリビューションによっては、前述のコマンドの最初のパスに `suse` 以外の文字列が含まれている場合があります。

5. `oracrun` パッケージがインストールされている場合は、`oracle` ユーザーとして次の手順を実行して、環境を再設定します。

- a. 次のコマンドを入力します。

```
prompt> cd /etc/profile.d  
prompt> mv oracle.csh oracle.csh.bak  
prompt> mv oracle.sh oracle.sh.bak  
prompt> mv alljava.sh alljava.sh.bak  
prompt> mv alljava.csh alljava.csh.bak
```

- b. テキスト・エディタを使用して、`$ORACLE_HOME/.profile` ファイルの次の行をコメント行にします。

```
. ~/.oracle
```

- c. `oracle` ユーザー・アカウントからログアウトします。

- d. `oracleoracle` ユーザー・アカウントにログインして、変更を有効にします。

6. `/etc/services` ファイルを調べて、次のポート範囲が使用可能であることを確認します。

- Oracle Internet Directory のポート 4031 ~ 4040
- Oracle Enterprise Manager のポート 1810
- Real-Time Collaboration の 2400 ~ 2700 の範囲内の 5 つ以上の空きポート

必要に応じて、`/etc/services` ファイルからエントリを削除し、システムを再起動します。前述のポートが使用できない場合は、関連付けられている Configuration Assistant がインストール時に正常に実行されません。

7. Network Information Service (NIS) を使用する場合は、次のタスクを実行します。

- a. 次の行が `/etc/yp.conf` ファイルに存在することを確認します。

```
hostname.domainname broadcast
```

- b. 次の行が `/etc/nsswitch.conf` ファイルに存在することを確認します。

```
hosts: files nis dns
```

8. Java パッケージがシステムにインストールされている場合は、Java 環境変数を設定解除します。たとえば、`JAVA_HOME` 環境変数を設定解除するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> unset JAVA_HOME
```

9. Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.0) をインストールする前、または動作中のシェルから Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.0) プロセスを実行する前に、`linux32` エミュレータを使用します。`linux32` エミュレータを起動するコマンドは次のとおりです。

```
prompt> linux32 bash
```

1.2.6.3 追加のインストール手順

次の項では、Oracle9iAS Infrastructure、Oracle Collaboration Suite Information Storage および Oracle Collaboration Suite Middle-Tier を SuSE SLES8 for AMD64 にインストールする場合に実行する必要がある追加のインストール手順について説明します。

1.2.6.3.1 Oracle9iAS Infrastructure

Oracle9iAS Infrastructure を SuSE SLES8 for AMD64 にインストールする際、次の手順を実行します。

1. パッチ 3335292 を使用して、JDK 131_10 インストール・ソフトウェアをダウンロードします。
2. ダウンロードしたインストール・ソフトウェアを一時領域に抽出します。
3. 一時領域内のディスク 1 のディレクトリからインストーラを起動します。
4. Oracle9iAS Infrastructure の Oracle ホーム・ディレクトリの名前およびフルパスを宛先パス (`/opt/oracle/infra` など) として入力します。

注意： ソース・パスは変更しないでください。

5. JDK 1.3.1_10 のインストールを実行します。
6. JDK 1.3.1_10 インストール・ソフトウェアをダウンロードしたディスク 1 のディレクトリからインストーラを再度起動します。
7. 宛先パスが、JDK 1.3.1_10 のインストール時に選択したディレクトリ (/opt/oracle/infra など) と同じであることを確認します。
8. ソース・パスとして *disk1_mount_point/stage/products.jar* を選択します。
9. 『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』で説明されている残りのインストール・タスクを実行します。

表 1-12 に、再リンク・フェーズ中に発生する可能性があるエラーおよびその解決方法を示します。

1.2.6.3.2 Oracle Collaboration Suite Information Storage インストール前の必須タスクの実行後、『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』の手順に従って、Oracle Collaboration Suite Information Storage を Suse SLES8 for AMD64 にインストールします。

1.2.6.3.3 Oracle Collaboration Suite Middle-Tier Oracle Collaboration Suite Middle-Tier を Suse SLES8 for AMD64 にインストールする際、次の手順を実行します。

1. パッチ 3335292 を使用して、JDK 131_10 インストール・ソフトウェアをダウンロードします。
2. ダウンロードしたインストール・ソフトウェアを一時領域に抽出します。
3. 一時領域内のディスク 1 のディレクトリからインストーラを起動します。
4. Oracle Collaboration Suite Middle-Tier の Oracle ホーム・ディレクトリの名前およびフルパスを宛先パス (/opt/oracle/mtier など) として入力します。

注意： ソース・パスは変更しないでください。

5. JDK 1.3.1_10 のインストールを実行します。
6. JDK 1.3.1_10 インストール・ソフトウェアをダウンロードしたディスク 1 のディレクトリからインストーラを再度起動します。
7. 宛先パスが、JDK 1.3.1_10 のインストール時に選択したディレクトリ (/opt/oracle/mtier など) と同じディレクトリであることを確認します。

- 8. ソース・パスとして `disk1_mount_point/stage/products.jar` を選択します。
- 9. 『Oracle Collaboration Suite インストール・ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』で説明されている残りのインストール・タスクを実行します。

表 1-12 に、再リンク・フェーズ中に発生する可能性があるエラーおよびその解決方法を示します。

表 1-12 SuSE SLES8 for AMD64 での再リンク・エラー

エラー	解決方法
<code>ins_sqlplus.mk</code> 再リンク・エラー (Oracle <i>9i</i> AS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite Middle-Tier)	1. 新しい端末ウィンドウを開きます。 2. ORACLE_HOME 環境変数を設定します。 3. \$ORACLE_HOME/bin が含まれるように PATH を設定します。 4. LD_SELF_CONTAINED が含まれている行をコメント行にして、\$ORACLE_HOME/bin/genclntsh を変更します。 5. \$ORACLE_HOME/bin/genclntsh を実行します。 6. OUI のエラー・ウィンドウで「再試行」をクリックします。

1.2.6.4 Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) のインストール

Suse SLES8 for AMD64 上の Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.0) に必須のインストール前のタスク、インストール・タスクおよび構成タスクを実行した後、次の手順に従って Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) を適用します。

- 1. 環境が 1.2.6.2 項の手順に従って設定されていることを確認します。
- 2. オラクル社カスタマ・サポート・センターより、Bug#3564610 に関するパッチを取得してください。
- 3. 『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0)』の手順に従って、Oracle*9i*AS infrastructure、Oracle Collaboration Suite Information Storage および Oracle Collaboration Suite Middle-Tier の領域にパッチ・セットをインストールします。

1.3 既知の制限および回避策

この項では、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) の既知の制限とそれらの回避策について説明します。

- シード済 Information Storage データベースで RAC を有効化できない
- Portal がインストールされていない場合に Oracle Collaboration Suite で発生するエラー
- Oracle Collaboration Suite Web Client
- Oracle Enterprise Manager for Oracle Email が起動しない
- Email のアップグレード中に発生する参照名エラー
- データベースが登録されていない
- Database Configuration Assistant のエラー
- シングル・サインオンの写真の登録
- Delegated Administration Services でのユーザー情報の作成または編集
- root.sh スクリプト実行時に発生するファイルが見つからないというエラー
- 「ようこそ」ページの iSupport リンク
- Upgrade Assistant を実行した際のポート番号の変更
- SSL を使用した Oracle Collaboration Suite コンポーネントの構成
- Linux のみ: Oracle Calendar のアップグレード
- Linux のみ: 問合せの確認を実行する Oracle Enterprise Manager プロセスのハング
- HP-UX のみ: \$ORACLE_HOME/oui/bin/runinstaller 使用時の 11.0 システムでの前提条件の失敗

1.3.1 シード済 Information Storage データベースで RAC を有効化できない

現在、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) のシード済 Information Storage データベースでは Oracle Real Application Clusters (RAC) を有効化できません。

回避策:

Oracle9i Database リリース 2 (9.2.0.1) の CD-ROM から、RAC が有効化されたリリース 2 (9.2.0.1) のカスタム・データベースをインストールし、リリース 2 (9.2.0.3) のパッチ・セットを適用します。

1.3.2 Portal がインストールされていない場合に Oracle Collaboration Suite で発生するエラー

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール時に、Oracle Universal Installer (OUI) で Portal の構成を行うかどうかをユーザーが決定できます。Portal は Oracle Collaboration Suite のオプション・コンポーネントですが、少なくとも 1 つの中間層で Portal の構成を行わないと、Web Client でリンクが破損します。たとえば、次の場合にエラーが発生します。

- デフォルトの「ようこそ」ページ (index.html) の「エンドユーザー・ログイン」セクションで、「Oracle Collaboration Suite にログオン」をクリックした場合。
- Oracle Email や Oracle Files などの Web アプリケーションで「Portal に戻る」グローバル・リンクをクリックした場合。

少なくとも 1 つの Oracle Collaboration Suite Middle-Tier で、Portal の構成を行うことをお勧めします。Portal は、Oracle Collaboration Suite の Web アプリケーションにアクセスするための便利なランチ・パッドとなります。

注意： Portal の構成は、Oracle Collaboration Suite Web Client を構成する場合の必須の前提条件です。

Portal の構成をインストールの一環として行わない場合は、Oracle Email、Oracle Files、Oracle Calendar などの各種 Web アプリケーションを直接起動するための URL を次のファイルで確認できます。

```
$ORACLE_HOME/webclient/classes/oracle/collabsuite/webclient/  
resources/webclient.properties
```

1.3.3 Oracle Collaboration Suite Web Client

この項では、Oracle Collaboration Suite Web Client の問題について説明します。

1.3.3.1 Web Client が韓国語ロケールで動作しない

韓国語の Windows 2000 で Internet Explorer を使用している場合、Web Client が動作しないことがあります。

1.3.3.2 アップグレード時に Web Client Configuration Assistant で障害が発生

回避策：次の手順に示すように、Web Client Configuration Assistant をコマンドラインから手動で起動します。

Web Client Configuration Assistant を起動する前に、Oracle9iAS Portal 中間層がインストールまたはアップグレードされ、構成されていることを手動で確認します。

Web Client のインストール時に、Oracle Universal Installer でアプリケーションのホスト名とポート番号を指定した場合は、「コンポーネントの URL の構成」をスキップします。

1.3.3.2.1 コンポーネントの URL の構成 この項では、Oracle Email、Oracle Files、Oracle Calendar などのコンポーネントの URL の構成方法について説明します。コンポーネントの URL は `webclient.properties` ファイルを変更して構成します。

`webclient.properties` ファイルには、Oracle Collaboration Suite のコンポーネントごとに次の 3 つの URL が含まれています。

- ヘルプ・ページの URL
 - アプリケーションの起動 URL
 - ポートレット・プロバイダの URL
1. `$ORACLE_HOME/webclient/classes/oracle/collabsuite/webclient/resources` ディレクトリに格納されている `webclient.properties` ファイルを開きます。
 2. `webclient.properties` ファイルで、構成済の各コンポーネントの起動 URL を設定します。
 3. 構成するコンポーネントごとに、3 つの URL すべてのホスト名とポート番号のトークンを置き換えます。

Oracle Calendar をリリース 2 (9.0.4.1) にアップグレードする場合、次の手順を実行して、Oracle Calendar リリース 1 (9.0.3) をポートレットとして使用可能にします。

- a. Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) 中間層の `$ORACLE_HOME/webclient/classes/oracle/collabsuite/webclient/resources` ディレクトリにある `webclient.properties` ファイルを開きます。

- b. 次の記述を探します。

```
calendar=http://%CALENDAR_HOST%:%CALENDAR_PORT%/ocas-bin/ocas.fcgi?sub=web
```

この記述を次のように変更します。

```
calendar=http://%CALENDAR_HOST%:%CALENDAR_PORT%/fcgi-bin/owc/lexacal.fcgi?go=login
```

- c. 次の記述を探します。

```
calendar.provider=http://%WEBCLIENT_HOST%:%WEBCLIENT_PORT%/webclient-calendar/servlet/soaprouter
```

この記述を次のように変更します。

```
calendar.provider= http://%WIRELESS_HOST%:%WIRELESS_PORT%/marconi/servlet/soaprouter
```

1.3.3.2.2 コマンドラインからの Web Client Configuration Assistant の実行 次のコマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/webclient/bin/webclient_installer.sh Oracle9iAS_Portal_user_name  
Oracle9iAS_Portal_user_password -complete
```

Oracle9iAS Portal のスキーマ名、パスワードおよび接続文字列の情報がわかっている場合は、Configuration Assistant を次のように起動できます。

```
$ORACLE_HOME/webclient/bin/webclient_installer.sh Oracle9iAS_Portal_user_name  
Oracle9iAS_Portal_user_password -complete -s  
schema -p password -c connect_string
```

次に各変数の意味を示します。

- schema: Oracle9iAS Portal の Oracle データベース・アカウント
- password: Oracle9iAS Portal のアカウント・パスワード
- connect_string: Oracle9iAS Portal のリポジトリがインストールされているデータベース・インスタンスへの接続文字列。host_name:port:SID の形式で指定します。

1.3.3.3 Files ポートレットの自動登録の失敗

デフォルトでは、Oracle Files 中間層のインストール後に Oracle Files ドメインは起動されません。このため、Web Client Configuration Assistant は Web Client の構成中に Files ポートレットと通信できず、Files ポートレットの自動登録は失敗する場合があります。

1.3.3.3.1 Oracle Files と Web Client が異なるホストで構成されている場合 Oracle Files と Web Client が異なるホストで構成されている場合、必ず Web Client を構成する前に Oracle Files ドメインを起動してください。

関連資料： 詳細は、『Oracle Collaboration Suite インストールおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』の第 12 章「Oracle Files の構成」の「すべての必要なプロセスの起動」を参照してください。

1.3.3.3.2 Oracle Files と Web Client が同一ホストで構成されている場合 Oracle Files と Web Client が同じインストールにおいて同一ホストで構成されている場合、Files ポートレットの自動登録は失敗します。

回避策：

1. Oracle Files ドメインを起動します。詳細は、『Oracle Collaboration Suite インストールおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』の第 12 章の「すべての必要なプロセスの起動」を参照してください。
2. Oracle Files の URL が、`$ORACLE_HOME/webclient/classes/oracle/collabsuite/webclient/resources/webclient.properties` ファイルで正しく設定されていることを確認します。
3. 次のコマンドラインから、Web Client Configuration Assistant を再実行します。

```
$ORACLE_HOME/webclient/bin/webclient_installer.sh
```

1.3.3.4 UNIX でのイメージ破損

Web Client では、Web ページの生成に Oracle UIX (ユーザー・インタフェース XML) テクノロジーを使用します。UIX は、UI 全体にわたって表示されるボタンやタブなどの多くのイメージを動的に生成します。バージョン 1.4 より前の Java 2 Standard Edition (J2SE) に制限があるため、UIX では、UNIX プラットフォームでの動的イメージの生成に X サーバー・プロセスが必要です。

X サーバーを見つけるために、UIX ランタイムは DISPLAY 環境変数の値に依存します。Web Client が UNIX ホストで実行されていて、一部の UI イメージが破損または矛盾して表示される場合、Web Client プロセスの DISPLAY 環境変数の値が正しく設定されていないことが問題と考えられます。

この問題に共通の状況は、UI ページが、丸いページのボタンではなく、ブラウザ固有のボタンを使用して描画されることです。

Web Client プロセスの DISPLAY 環境変数の値を確認するには、テキスト・エディタで `$ORACLE_HOME/opmn/conf/opmn.conf` ファイルを開き、OC4J_Portal というインスタンスのエントリを探します。

```
<oc4j maxRetry="3" instanceName="OC4J_Portal" gid="OC4J_Portal" numProcs="1">
  <environment>
    <prop name="DISPLAY" value="your-host-name:0.0"/>
  </environment>
</oc4j>
```

DISPLAY プロパティの値は、実行中の X サーバーを参照する必要があります。

注意： インストール時に、Oracle Universal Installer では、インストール・セッション中に検出した DISPLAY 環境変数の値を使用して、opmn.xml の DISPLAY プロパティに値を自動的に移入します。Oracle Universal Installer をリモートで実行している場合（たとえば、Hummingbird Exceed などの X エミュレーション・ソフトウェアを搭載したデスクトップ PC から）、自動検出されるこの値は、使用可能であるかどうかかわからないリモート X サーバーを参照するため、正しくありません。最も安全な方法は、中間層のホストで X サーバーを作成し、DISPLAY プロパティでそのサーバーを参照することです。UNIX プラットフォームで X サーバーを起動する方法は、ご使用の UNIX のドキュメントを参照してください。

1.3.3.5 Collaboration Suite の「ようこそ」ページでのリンクの破損

http://host:port/ にある Oracle Collaboration Suite の「ようこそ」ページでは、エンドユーザー・ログイン・ポートレットのリンクは Oracle Portal が構成されているホストでしか機能しません。他の中間層ホストでは、リンクは破損します。

1.3.4 Oracle9iAS Web Cache が起動しない

Oracle9iAS Web Cache を起動すると、次のエラーが表示される場合があります。

```
Error: No matching CACHE element found in webcache.xml for current hostname and
ORACLE_HOME. Cache Server failed to start
```

このエラーが表示された場合は、webcache.xml の一部のパラメータが実際のパスではなく、シンボリック・リンクを指している可能性があります。

webcache.xml パラメータがシンボリック・リンクを指しているかどうかを確認するには、次の手順を実行します。

1. \$ORACLE_HOME/webcache に移動し、webcache.xml を開きます。
2. ORACLE_HOME 環境変数に指定されているパスを確認します。
3. コマンドラインで `ls -l` コマンドを使用して、最上位レベルのディレクトリがシンボリック・リンクかどうかを確認します。たとえば、ORACLE_HOME の値が /home/test/csr2mt の場合は、次のコマンドを入力します。

```
ls -l /home
```

ディレクトリがシンボリック・リンクの場合は、次のような表記が表示されます。

```
test -> /private/test
```


4. webcache.xml パラメータがシンボリック・リンクを指している場合、シンボリック・リンクではなく実際のパスを使用するように、このファイルのすべてのパスを更新します。たとえば、/home/test/csr2mt のすべてのインスタンスを /private/test/csr2mt に変更します。

注意： ファイルを編集する前にバックアップを取ります。
webcache.xml の複数のパラメータでパスが使用されているため、すべてのパスが置換されていることを確認してください。

5. webcache.xml を保存します。
6. Oracle9iAS Web Cache を再起動します。

```
$ORACLE_HOME/webcache/bin/webcachectl stop  
$ORACLE_HOME/webcache/bin/webcachectl start
```
7. OPMN を再起動します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopall  
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startall
```

1.3.5 Oracle Enterprise Manager for Oracle Email が起動しない

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) Infrastructure のインストール中に、Oracle Enterprise Manager for Oracle Email が起動しません。

回避策：

Infrastructure と中間層で次の手順を実行します。

1. ORACLE_HOME 環境変数を設定します。
2. \$ORACLE_HOME/oes/bin/install_umemd.sh スクリプトを実行します。
3. Oracle Enterprise Manager を再起動します。

```
$ emctl start
```

1.3.6 Email のアップグレード中に発生する参照名エラー

メール・ストアのアップグレード中に、次のエラー・メッセージが表示されます。

```
ORA-29521: referenced name could not be found
```

回避策：

なし。\$ORACLE_HOME/oes/log/upgrad904.log ファイルのエラーは無視しても問題ありません。

1.3.7 データベースが登録されていない

Database Configuration Assistant (DBCA) をスタンドアロンで実行している場合、データベースは登録されていません。

回避策：

Oracle Directory Manager OracleDBCreators グループのメンバーであるユーザー DN または cn=orcladmin ユーザー DN を使用してデータベースを登録します。

1.3.8 Database Configuration Assistant のエラー

Database Configuration Assistant (DBCA) を Oracle Universal Installer またはコマンドラインから起動すると、次のエラーが発生します。

Open Wallet Failed

回避策：

なし。このエラー・メッセージは無視しても問題ありません。

1.3.9 シングル・サインオンの写真の登録

現行リリースでは、シングル・サインオン・ユーザーの写真はアップロードできません。

1.3.10 Delegated Administration Services でのユーザー情報の作成または編集

「ユーザーの作成」および「ユーザーの編集」画面の「リソース・アクセス情報」セクションで「作成」または「編集」をクリックすると、画面の他のフィールドで以前に入力したユーザー・データが失われます。

回避策：

リソース・アクセス情報を作成または編集した後、ユーザー・データを再入力します。

1.3.11 root.sh スクリプト実行時に発生するファイルが見つからないというエラー

root.sh スクリプトを実行すると、\$ORACLE_HOME/rdbms/filemap ファイルが見つからないというエラーが発生することがあります。これは、存在しないファイルを削除しようとしたために発生します。

回避策：

なし。このエラー・メッセージは無視しても問題ありません。

1.3.12 「ようこそ」ページの iSupport リンク

Web Client がインストールされている Infrastructure および中間層で、次の手順を実行します。

次の URL を置換して、\$ORACLE_HOME/Apache/Apache/htdocs/index.html ファイルを編集します。

```
http://gsi.oraclecorp.com/OA_HTML/ibulogin.jsp
```

この URL を次の URL に置換します。

```
http://support.oracle.co.jp/
```

1.3.13 Upgrade Assistant を実行した際のポート番号の変更

Upgrade Assistant を実行すると、次のアプリケーションのポート番号が変更されます。

- Oracle Calendar
- Oracle Email
- Oracle Files
- Oracle Web Conferencing
- Oracle9iAS Wireless and Voice

回避策：

コマンドラインから Web Client Installer を実行する前に、
\$ORACLE_HOME/webclient/classes/oracle/collabsuite/webclient/
resources/webclient.properties ファイルで各アプリケーションのポート番号を手動で再設定します。

webclient.properties ファイルで、次の各起動 URL に対応付けられた URL に適切なポート番号を入力します。

- mail.help.url
- files.help.url
- calendar.help.url
- imeeting.help.url
- search.help.url
- wireless.help.url
- mail

- calendar
- files
- search
- wireless
- portal
- imeeting
- mail.provider
- files.provider
- search.provider
- wireless.provider
- webclient.provider
- imeeting.provider
- calendar.provider

1.3.14 SSL を使用した Oracle Collaboration Suite コンポーネントの構成

SSL を使用した Oracle Collaboration Suite コンポーネントの構成の詳細は、次のドキュメントを参照してください。

- Oracle9iAS Portal Web サイト (URL は <http://portalstudio.oracle.com>) にあるセキュリティ Web プロバイダのドキュメント
- 『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』の第 6 章の「中間層での mod_osso を伴った HTTP の手動設定」
- 『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』の第 6 章「Oracle Collaboration Suite のインストール」
- 『Oracle Web Conferencing 管理者ガイド』の第 5 章「構成」の「ポートおよびネットワーク接続性を設定するプロパティ」と「SSL セキュリティを設定するプロパティ」および第 6 章「配置サンプル」

1.3.15 Linux のみ : Oracle Calendar のアップグレード

Upgrade Assistant を使用して Oracle Calendar を Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) からアップグレードする場合は、Upgrade Assistant を実行する前に、/users ディレクトリおよびこのディレクトリのすべてのサブディレクトリの権限を 755 に設定します。

1.3.16 Linux のみ : 問合せの確認を実行する Oracle Enterprise Manager プロセスのハング

リリース 1 (9.0.3) からリリース 2 (9.0.4) にアップグレードされた Infrastructure に Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 をインストールする際、Oracle Enterprise Manager (EM) プロセスを実行していると、問合せの確認を実行する EM プロセスがハングする場合があります。

回避策 :

Patch Set 1 をインストールする前に、Enterprise Manager プロセスを停止します。

1.3.17 HP-UX のみ : \$ORACLE_HOME/oui/bin/runinstaller 使用時の 11.0 システムでの前提条件の失敗

\$ORACLE_HOME/oui/bin ディレクトリから runInstaller プログラムを使用すると、インストーラは、次のメッセージを返して終了します。

```
Checking Operating System Version: must be B.11.11.      Actual B.11.00
Failed <<<<
```

このエラーを解決するには、B.11.11 が含まれている行に B.11.00 が含まれるように、\$ORACLE_HOME/oui/oraparam.ini ファイルを変更します。

1.4 ドキュメントの訂正

『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』の付録 F には、次のテキストが含まれています。

「HP プラットフォームでは、手順 4 の完了後にディスク 1 をアンマウントして取り出し、ディスク 5 をマウントします。」

これは間違いです。この部分は、次のように変更する必要があります。

「HP プラットフォームでは、手順 4 の完了後にディスク 1 をアンマウントして取り出し、ディスク 6 をマウントします。」

1.5 リリース 2 (9.0.4.1) での既知のバグ

次に、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) での Suite 全般の既知のバグを示します。

表 1-13 Suite 全般の既知のバグ

Bug#	説明
2499191	Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) の Oracle Email umbackend.tar ファイルは英語のみです。 回避策: オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡して、パッチを取得してください。Bug#3156779 を参照してください。
2499206	Oracle Email umconfig.sh スクリプトは英語のみです。
3050374	Internet Explorer のシングル・サインオン認証で HTTPS リンクのエラーが返されます。 回避策: 2つのホスト名を使用します。1つは Infrastructure 用、もう1つは中間層用です。 - DNS の同一の IP アドレスにマッピングされた2つ目のホスト名を取得します。 - Infrastructure で、すべてのホスト名のエントリを2つ目のホスト名に変更します。 - OHS 構成のすべてのホスト名を変更します。 - 中間層の mod_osso パートナ・アプリケーションを再登録し、変更された Single Sign-On Server の名前を取得します。
3116499	断続的なインストールの問題によって、dcmctl updateconfig ファイルでメモリー不足エラーが発生します。 回避策: JVM のメモリーを増加します。

表 1-13 Suite 全般の既知のバグ (続き)

Bug#	説明
3118140	次のエラーは、パスワード・フィールドのみを変更してユーザー・エントリを編集した場合に発生します。 「属性の番号のフォーマットが無効です。: 社員番号」 回避策: アルファベット順になるように従業員番号フィールドを構成するには、次の手順を実行します。 1. DAS 構成権限 (orcladmin など) を持つユーザーとして DAS にログインします。 2. 「構成」タブをクリックします。 3. 「ユーザー・エントリ」タブをクリックします。 4. 右下隅の「次へ」ボタンをクリックします。 5. 属性の構成表で、属性の従業員番号列を選択します。 6. UI タイプ列のドロップダウン・リストから「単一行テキスト」を選択します。 7. 後続のすべてのウィンドウで「次へ」をクリックし、「完了」をクリックします。
3129911	WK_CRW パッケージ本体のコンパイル・エラー 回避策: 1. sys としてデータベースにログインします。 2. 次の SQL コマンドを入力します。 <pre>SQL> grant select on SYS.DBMS_LOCK_ALLOCATED to WKSYS; SQL> alter package wksys.wk_crw compile body; SQL> alter package wksys.wk_snapshot compile body;</pre>
3151836	Oracle Collaboration Suite を大量のメモリーを搭載したシステムにインストールすると、Oracle Universal Installer にエラー・メッセージが表示されます。 回避策: このエラー・メッセージを無視して、インストールを続行しても問題ありません。

表 1-13 Suite 全般の既知のバグ (続き)

Bug#	説明
3204943	マルチバイトのメッセージとフォルダをバックアップおよびリストアするには、NLS_LANG を AMERICAN_AMERICA.UTF8 に設定する必要があります。
3207537	Oracle Internet Directory の Delegated Administration Services エラーが簡体字中国語ロケールで発生します。 回避策: \$ORACLE_HOME\Apache\Apache\conf ディレクトリの httpd.conf ファイルから次の行をコメント解除します。 <pre>include "ORACLE_HOME\Apache\Apache\conf\mod_osso.conf"</pre> Oracle Enterprise Manager から HTTP Server を再起動します。
3214446	Linux のみの問題です。 Oracle Universal Installer またはコマンドラインから Files Configuration Assistant (\$ORACLE_HOME/ifs/files/bin/ifscsa) を実行すると、次のエラー・メッセージが表示されます。 <pre>exort: command not found</pre> 回避策: このエラー・メッセージを無視しても問題ありません。
3376394	Oracle Enterprise Manager で作成および記録されたトランザクション (たとえば、Calendar へのログインおよびログアウト) のステータスを参照すると、トランザクションのステータスが「停止」と示されます。次のエラー・メッセージが表示されます。 <pre>NullPointerException</pre> トランザクションを作成する前に次の回避策を実行すると、このエラーの発生を回避できます。ASCII ベースのキャラクタ・セットまたは UTF-8 を使用する Web アプリケーションで、エージェントの emd.properties ファイルの agentJavaDefines 変数にフラグ <pre>-DUrlTiming.CharacterConversion=0</pre> を追加します。
3816626	コンポーネントのインストール、またはコンポーネントのリリース 1 からリリース 2 へのアップグレードの際には、Windows Services (コントロール・パネルからアクセス) が閉じていることを確認してください。閉じていないと、構成エラーが発生することがあります。

1.6 リリース 2 (9.0.4.2) での既知のバグ

表 1-14 に、Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2) での Suite 全般の既知のバグを示します。

表 1-14 リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2) での既知のバグ

Bug#	説明
3376394	Oracle Enterprise Manager の Oracle Collaboration Suite の管理で説明されているとおり、Oracle Enterprise Manager Grid Control Console を使用して Oracle Collaboration Suite コンポーネントを監視できます。ただし、Grid Control Console で Web アプリケーションのターゲットを作成し、ビジネス・トランザクションを作成して Oracle Calendar アプリケーションの可用性を監視する場合、次の問題が発生する場合があります。トランザクション（たとえば、Oracle Calendar へのログインおよびログアウト）のステータスを参照すると、トランザクションのステータスには Web アプリケーションが停止していると示されます。このエラーが発生すると、次のエラー・メッセージが表示されます。 <pre>NullPointerException</pre> この問題は、ASCII ベースのキャラクタ・セットまたは UTF-8 を使用する Web アプリケーションで多く発生します。この問題を解決するには、次の手順を実行します。 1. テキスト・エディタを使用して、Oracle Calendar Web アプリケーションを監視している Management Agent のホーム・ディレクトリで次のファイルを開きます。 <pre>\$ORACLE_HOME/sysman/config/emd.properties</pre> 2. emd.properties ファイルで agentJavaDefines 変数を探します。 たとえば、次のようになります。 <pre>agentJavaDefines=-Doracle.dms.refresh.wait.time=1000 -DUrlTiming.UseJSSE=true</pre> 3. agentJavaDefines 変数に次のパラメータを追加します。 <pre>-DUrlTiming.CharacterConversion=0</pre> たとえば、次のようになります。 <pre>agentJavaDefines=-Doracle.dms.refresh.wait.time=1000 -DUrlTiming.UseJSSE=true -DUrlTiming.CharacterConversion=0</pre> 4. emd.properties ファイルを保存して、閉じます。 5. Management Agent を再起動します。
3816626	コンポーネントのインストール、またはコンポーネントのリリース 1 からリリース 2 へのアップグレードの際には、Windows Services（コントロール・パネルからアクセス）が閉じていることを確認してください。閉じていないと、構成エラーが発生することがあります。

グローバルゼーション

この章では、多言語サポート関連の問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)

2.1 新機能

Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) には、重要なバグ修正および新規の言語変換サポート（ハンガリー語、ロシア語、チェコ語およびルーマニア語）が含まれています。このパッチは、次の URL の Oracle Internet Support Center (OiSC) よりダウンロードできます。

<http://support.oracle.co.jp/>

このパッチに含まれる新規の言語サポートおよびバグ修正の詳細は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0)』を参照してください。

2.2 既知の制限および回避策

この項では、多言語サポート関連の既知の制限について説明します。

- [インストールおよびアップグレードの言語サポート](#)
- [アラビア語用の双方向サポート](#)
- [Web Conferencing Document Converter 用の言語サポート](#)
- [Infrastructure および Information Store データベースのキャラクタ・セット](#)
- [Web Conferencing における「Host Name」の翻訳のエラー](#)
- [インターナショナル・ユーザー ID](#)

2.2.1 インストールおよびアップグレードの言語サポート

インストール時には、製品言語選択リストによって、どの言語がインストールされるかが決まります。Infrastructure には中間層に選択する言語と同じ言語を選択することをお勧めします。言語はインストール後に追加または削除できないことに注意してください。

注意： インストール済の言語を再インストールすると、リポジトリが壊れます。たとえば、Single Sign-On Server ですでに日本語をサポートしている場合、日本語を再インストールしないでください。

2.2.2 アラビア語用の双方向サポート

Internet Explorer 5.5 以上のバージョンのみが、Oracle Collaboration Suite でのアラビア語の双方向のユーザー・インタフェースをサポートします。

2.2.3 Web Conferencing Document Converter 用の言語サポート

Web Conferencing Document Converter 用の言語サポートを有効にするには、対応する言語オプションを Microsoft Office で有効にする必要があります。次のメニューを選択すると、オプションを設定できます。

「スタート」→「プログラム」→「Microsoft Office ツール」→
「Microsoft Office 言語設定」

2.2.4 Infrastructure および Information Store データベースのキャラクタ・セット

Oracle Collaboration Suite の Infrastructure および Information Store 用のデータベース・キャラクタ・セットとしては、Unicode UTF8 の使用をお勧めします。Unicode の使用により、グローバルなコラボレーション環境で様々な言語やエンコーディングが適切に処理されることが保証されます。Unicode UTF8 は、デフォルトで Infrastructure データベースと Information Storage データベースにインストールされます。

既存の Infrastructure データベースと Information Storage データベースを Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) にアップグレードすると、その他のキャラクタ・セットがサポートされます。Information Store については、特定のキャラクタ・セットを使用するカスタム・データベースを作成するという方法もあります。

2.2.5 Web Conferencing における「Host Name」の翻訳のエラー

Oracle Web Conferencing 構成で、「Host Name」の翻訳が「開催者名」になっていますが、正しくは「ホスト・システム」です。

2.2.6 インターナショナル・ユーザー ID

Oracle Collaboration Suite では、一部の例外を除き、インターナショナル非 ASCII ユーザー ID をサポートしています。

- Oracle Workflow および Oracle Files WebDAV (Web Folders) のどちらも、インターナショナル・ユーザー ID はサポートしていません。
- メール管理 Web インタフェースを使用して、インターナショナル・ユーザー ID 用のメール・アカウントを作成することはできません。かわりに、コマンドライン・ツール oesucr を次のように使用します。

1. UTF-8 エンコーディングを使用して、ユーザー・レコード・ファイル nonascii.txt を用意します。

```
mail=testuser1@us.oracle.com
orclmailquota=4000000000
baseuserdn=cn=[non-ascii userid here],cn=users,o=oracle,dc=com
```

2. oesucr を実行します。

```
oesucr nonascii.txt -encoding=UTF-8
```

Oracle Calendar

この章では、Oracle Calendar の次のコンポーネントの新機能と既知の制限について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Server](#)
- [Oracle Calendar Administrator](#)
- [Oracle Calendar SDK](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システム](#)
- [Oracle Connector for Outlook](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client](#)
- [Oracle Calendar Sync クライアント](#)
- [クライアントの共存に関する動作](#)

3.1 Oracle Calendar Server

この項の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [リリース 2 \(9.0.4.1\) での既知の制限および回避策](#)
- [リリース 2 \(9.0.4.2\) での既知の制限および回避策](#)
- [新規および更新されたサーバー・パラメータ](#)
- [ドキュメントの訂正](#)

3.1.1 新機能

この項では、Oracle Calendar Server リリース 2 (9.0.4.1) の新機能について説明します。

パフォーマンスとスケーラビリティ

- 1 つのシステム上の複数のサーバー・インスタンス (UNIX)
- 複数の全社的サービス・デーモンまたはサービス
- 複数のロック・マネージャ・デーモンまたはサービス
- Solaris および HP のスレッド・バージョン
- 小さなトランザクションの最適化
- イベント・データベース外のストア追加

高可用性

- サーバー起動中に常時チェック・モードで `unidbfix` を実行
- 異なるノードで同時に `unidbfix` を実行
- サーバー実行中にノードを起動および停止
- 停止ノードで `unidbfix` 修復を実行
- バックアップ時のログインが可能

拡張管理機能

- 管理権限の委譲
- Web ベースの Calendar Administrator の大幅アップグレード
- 新しいロック・アンド・フィール
- ユーザー、リソース、イベント・カレンダー、グループ、ノードおよびサーバーの管理
- サーバー機能のリモート起動および停止
- より多くの属性を制御するためのユーティリティ：
 - uniuser (ユーザー・ディレクトリ属性、アラーム、ユーザー設定、非アクティブ・アカウント)
 - uniadminrights (管理権限)
 - uniaccessrights (指定権限を含むアクセス権限)
 - unigroup (グループ)
- シングルユーザー・リストア
- ユーザー削除時のイベント所有権の委譲
- インポートとエクスポートのための unicpin と unicpout にかわる uniical ユーティリティ

ディレクトリ・サポート

- 動的 LDAP グループ
- OpenLDAP
- GSSAPI や SASL などの非パスワードベースの認証に対する LDAP サポート
- ディレクトリに対して必要なアクセス回数の削減
- すべてのプラットフォームに対して SSL 対応の LDAP ライブラリ

他の拡張機能（クライアント・サポート必須）

- リモートの代理
- ノード間のグループのレプリケーション
- リソースごとの二重予約制御
- 予約されたリソースに対する自動確認応答（リソース承認）

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.2) には、さらに多くの新機能があります。これらの新機能の詳細は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0)』を参照してください。

3.1.2 リリース 2 (9.0.4.1) での既知の制限および回避策

この項では、Oracle Calendar Server リリース 2 (9.0.4.1) に関する既知の制限とそれらの回避策について説明します。

- **壊れた ini ファイル**: Oracle Calendar Server がマルチバイト言語でインストールされている場合、category.ini ファイルと categorytype.ini ファイルが壊れています。この問題を解決するには、category.ini.sbs を category.ini にコピーし、categorytype.ini.sbs を categorytype.ini にコピーします。この問題を追跡するために Bug#3016058 が割り当てられました。

この問題は、リリース 2 (9.0.4.2) で解決されました。

- **man ページの欠落**: unirestore、unioiconf および unistrconv ユーティリティの UNIX man ページが存在しません。ただし、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』の付録 F「Calendar Server のユーティリティ」に、これらのユーティリティの記述があります。この問題を追跡するために Bug#3052252 が割り当てられました。

この問題は、リリース 2 (9.0.4.2) で解決されました。

- **カレンダー・ノードの再起動**: Calendar Administrator を使用してカレンダー・ノードを停止した場合、そのノードを Calendar Administrator を使用して再起動することはできません。

回避策: unistart を使用して再起動します。この問題を追跡するために Bug#2892695 が割り当てられました。

この問題は、リリース 2 (9.0.4.2) で解決されました。

- **Solaris のみ**: C++ ランタイムのパッチ 108434-11 または 108435-11 により、Oracle Calendar Server バイナリがクラッシュすることがあります。この問題が発生した場合は、パッチ 108434-13 および 108435-13 以上をインストールすることをお勧めします。
- **smsnotifyprogram の値**: リリース 1 (9.0.3) からリリース 2 (9.0.4) へのアップグレード中に、\$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini 内の次の値が古い値で上書きされ、元に戻す必要がある場合があります。

```
[CWS]
smsnotifyprogram = $ORACLE_HOME/ocal/sbin/sendalert
```

が次の内容に置き換わります。

```
[CWS]
smsnotifyprogram = /users/unison/bin/sendalert
```

これを次の内容に戻します。

```
[CWS]
smsnotifyprogram = $ORACLE_HOME/ocal/sbin/sendalert
```

- **Oracle Calendar Server のホスト名** : Calendar Server のホスト名（ドメイン名を除く）は、24 文字以下にする必要があります。この問題を追跡するために Bug#3004315 が割り当てられました。
回避策 : ホスト名かわりに IP アドレスを使用します。
- **Mozilla での表示問題** : Solaris では Mozilla 1.2.1 でページ全体を表示できません。
- **Oracle Single Sign-On (SSO) の有効化** : リリース 1 (9.0.3) からリリース 2 (9.0.4) へのアップグレード後、中間層で SSO が無効になります。SSO を有効にするには、次の作業を行います。
 1. `$ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/mod_osso.conf` で次の行をコメント行にします。

```
# LoadModule osso_module libexec/mod_osso.so
```
 2. 中間層で Oracle HTTP Server を再起動します。

```
dcmctl stop -ct ohs
dcmctl start -ct ohs
```

中間層で `mod_osso` を使用して HTTPS の設定を行うには、『Oracle Collaboration Suite インストールおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』の「中間層での `mod_osso` を伴った HTTP の手動設定」に記載された手順に従います。
- **カレンダー・データベースの変換** : `unil2bendian` および `unib2lendian` ユーティリティを使用してカレンダー・データベースの変換を試行すると、添付ファイルにアクセスできなくなります。この問題を追跡するために Bug#3520530 が割り当てられました。
 この問題は、リリース 2 (9.0.4.2) で解決されました。

関連資料 : [3.1.5 項「ドキュメントの訂正」](#)

3.1.3 リリース 2 (9.0.4.2) での既知の制限および回避策

この項では、Oracle Calendar Server リリース 2 (9.0.4.2) に関する既知の制限とそれらの回避策について説明します。

- **コマンドラインでのパスワード** : Oracle Calendar Server に付属のコマンドライン・ユーティリティではパスワード・オプション使用しないことをお勧めします。これは、コマンドラインでパスワードを入力することは、安全ではないと考えられるためです。この問題を追跡するために Bug#3372778 が割り当てられました。

コマンドライン・ユーティリティを実行するには、次のいずれかの方法をお薦めします。

- パスワード・オプションを使用しないで、コマンドラインからユーティリティを起動し、その後でパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されてからパスワードを入力する。
- スクリプト内からユーティリティを実行し、ファイル・リダイレクションを使用してパスワードを指定する。

- **Web Conferencing の参加 URL:** `unison.ini` パラメータ `[CONFERENCING]url` を変更すると、以前に作成した Web 会議の「参加」ボタンが、正しい Web Conferencing Server を示さなくなります。

回避策:

`unison.ini` パラメータ `[CONFERENCING]baseurl_join` の値を正しいサーバーのベース URL に設定します。

- **リソース構成が無効なリソース予約を発生させる:** 「First Come, First Serve (先に予約したものが先に受け取る)」で構成されたリソースでは、リソースの表示権限を持たないユーザーからの予約リクエスト (要請) を自動的に受け入れます。これによって、このようなユーザーがすでに予約状態にあるリソースを予約すると、リソースの二重予約が発生します。

二重予約が発生するのは、リソース構成が矛盾しているためです。ユーザーがリソースの表示権限を持たない場合、サーバーはリソースの「First Come, First Serve」の設定を適切に実行できません。サーバーは、要請を受け入れてリソースを二重予約するか、要請を拒否して (競合を許可しない) リソースの可用性を表示することができます。現在、Oracle Calendar Server はセキュリティを重視しているため、表示権限を持たないユーザーにリソースの可用性を表示しないように、二重予約を許可しています。この問題を追跡するために Bug#2964522 が割り当てられました。

回避策:

「First Come, First Serve」で構成されたリソースの要請権限を持つすべてのユーザーに、時間表示以上に設定されたリソースの表示権限を付与します。

- **メモリー要件の増加:** `[DB]db_pages` パラメータのデフォルトの値は、パフォーマンスを向上させるために、8 から 24 に増加されました。その結果、Oracle Calendar Server リリース 2 (9.0.4) と比較すると、1つのクライアント・セッション当たり 128KB のメモリー要件が増加します。

仮想メモリーのページングは非常に多いが、CPU およびデータベースの I/O 容量が十分には利用されていないような状態の Calendar Server では、`db_pages` パラメータを低い値 (8、16 など) に設定することが効果的な場合があります。

- **middleName 属性の索引付け**：一部の環境では、Oracle Connector for Outlook は特定の接続を解決するために、Oracle Internet Directory Server を問い合わせる必要があります。接続エントリが middleName 属性を保持している場合、この操作は失敗します。これは、この属性が索引付けされていないため、検索操作で使用できないことが原因です。この問題を追跡するために Bug#3400279 が割り当てられました。

この問題を解決するには、middleName 属性を索引付けする必要があります。ただし、最初に middleName 属性が索引付けされているかどうかを確認する必要があります。

1. ORACLE_HOME 環境変数が設定されていない場合は設定します。

2. 次のコマンドを実行します。

```
% $ORACLE_HOME/bin/ldapsearch -h <host> -p <port> -D
cn=orcladmin -w <password> -b "cn=catalogs" -s base
"objectclass=*" | grep -i "middleName"
```

「orclindexedattribute: middleName」という行が表示された場合、属性はすでに索引付けされています。次の手順を実行する必要はありません。

middleName 属性を索引付けするには、次の手順を実行します。

1. テキスト・エディタを開き、次の行を入力します。

```
dn: cn=catalogs
changetype: modify
add: orclindexedattribute
orclindexedattribute: middleName
```

2. このファイルを index.ldif で保存します。

3. ldapmodify コマンドを次のように実行します。

```
;%$ORACLE_HOME/bin/ldapmodify -h <host> -p <port> -D
cn=orcladmin -w <password> -f index.ldif
```

「タイプまたは値が存在しています。」というエラー・メッセージは、無視しても問題ありません。

- **リリース 2 (9.0.4.2) とリリース 2 (9.0.4.1) のサーバーの共存**：リリース 2 (9.0.4.1) のサーバーと共存するリリース 2 (9.0.4.2) のサーバーの場合、リリース 2 (9.0.4.2) のサーバーからユーザーを削除すると、問題が発生する場合があります。次の場合を例に考えてみます。

リリース 2 (9.0.4.2) のサーバー α に、ユーザー A が存在します。リリース 2 (9.0.4.1) のサーバー β に、ユーザー B および C が存在します。ユーザー A が、添付ファイルのある会議を作成し、ユーザー B および C を招待します。その後で、ユーザー A がサーバー α から削除されても、サーバー β のユーザーには、サーバー α のユーザーとしてリストされているユーザー A が見えます。

これは、リリース 2 (9.0.4.1) の既知の問題 (Bug#3104747) が原因です。この不具合では、ユーザーは、接続ノードに存在するレプリケートされたユーザーが所有するリリース 2 (9.0.4.1) のサーバー・リストから正常に削除されません。ユーザーが削除された場合でも、他のノードからは、この削除されたユーザーがリモート・ユーザーであるかのように見えます。この問題は、リリース 2 (9.0.4.2) では解決されましたが、リリース 2 (9.0.4.1) では依然存在しているため、このような特殊な共存例では、問題が発生します。

- **リリース 1 (9.0.3) およびリリース 2 (9.0.4) のサーバーの共存**: Calendar Server リリース 1 (9.0.3) がリリース 2 (9.0.4) と共存している環境では、リリース 1 (9.0.3) のユーザーは、リリース 2 (9.0.4) のリソースを表示できません。この問題を追跡するために Bug#3061350 が割り当てられました。

この問題を解決するには、次のパラメータをリリース 1 (9.0.3) のサーバーの unison.ini ファイルに追加します。

```
ENG
dac_itemselect = FALSE
dac_itemenum = FALSE
```

3.1.4 新規および更新されたサーバー・パラメータ

この項では、Oracle Calendar Server の新規および更新されたパラメータについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [unison.ini ファイルの新規パラメータ](#)
- [unison.ini ファイルの更新されたパラメータ](#)
- [更新された UNIX 環境変数](#)

3.1.4.1 unison.ini ファイルの新規パラメータ

[表 3-1](#) に、unison.ini ファイルに追加された新規パラメータを示します。

表 3-1 unison.ini ファイルに追加された新規パラメータ

セクション	パラメータ	説明
[CLIENT]	oc_minsendreceiverate	Oracle Connector for Outlook のリフレッシュ率の制御
	searchorder_user	クライアント・アプリケーションの検索方法の指定
[CONFERENCING]	baseurl_join	Web Conferencing URL のリダイレクト
	disablenotification	Web Conferencing の通知の無効化

表 3-1 unison.ini ファイルに追加された新規パラメータ（続き）

セクション	パラメータ	説明
[DAS]	dir_connectmodel	ディレクトリ・サーバーの接続モデルの指定
[ENG]	dir_enableldappersonsearch	LDAP ディレクトリへのアクセスの有効化
	maxattendeess	会議の出席者数の制限
	ocas_sessionexpiry	Oracle Calendar アプリケーション・システム・セッションの時間制限の設定
[LDAP]	attr_alias	別名の LDAP 属性の指定
	attr_assistant	アシスタント名の LDAP 属性の指定
	attr_assistantphone	アシスタントの電話番号の LDAP 属性の指定
	attr_department	部門の LDAP 属性の指定
	attr_displayname	表示名の LDAP 属性の指定
	attr_homephone2	自宅の代替電話番号の LDAP 属性の指定
	attr_managerdn	マネージャの LDAP 属性の指定
	attr_notes	注意の LDAP 属性の指定
	attr_officeaddress	勤務先住所（番地）の LDAP 属性の指定
	attr_officecity	勤務先住所（市）の LDAP 属性の指定
	attr_officename	勤務先住所（ビル名）の LDAP 属性の指定
	attr_officepostalcode	勤務先住所（郵便番号）の LDAP 属性の指定
	attr_officestate	勤務先住所（都道府県）の LDAP 属性の指定
	attr_pager	ポケットベルの LDAP 属性の指定
	attr_phone2	勤務先の代替電話番号の LDAP 属性の指定

Oracle Connector for Outlook のリフレッシュ率の制御

パラメータ: `oc_minsendreceiverate`

セクション: [CLIENT]

説明: 新しい予定表のエントリを確認するために、次にサーバーを自動コールするまでの最小時間 (分単位) を指定します。これは、Oracle Connector for Outlook でのみ使用されます。

許容値: 正の整数

デフォルト値: 15

クライアント・アプリケーションの検索方法の指定

パラメータ: `searchorder_user`

セクション: [CLIENT]

説明: クライアントに対して、使用する検索方法およびカレンダー・ユーザー・アカウントの検索を試行する際の順序を指定します。

許容値: 中カッコで囲んだ、検索方法のカンマ区切りのリスト。現在、認められている検索方法は、X400、USERID および EMAIL です。

デフォルト値: インストール時に電子メールがユーザー ID にマップされている場合、デフォルト値は {USERID, X400} に設定されています。その他の場合、デフォルトの設定はありません。

Web Conferencing URL のリダイレクト

パラメータ: `baseurl_join`

セクション: [CONFERENCING]

説明: 会議の作成時に Web Conferencing によって提供される参加 URL のベース URL を置換するために使用するベース URL を指定します。

関連資料: 『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』の
[CONFERENCING]url を参照してください。

許容値: 次の形式のベース URL:

プロトコル: HTTP または HTTPS

ホスト名: <hostname value> (デフォルトは localhost)

ポート: <port value> (HTTP のデフォルトは 80、HTTPS のデフォルトは 443)

パスが指定されている場合、そのパスは無視されます。

例:

HTTP://localhost:80/
HTTPS://myhost.com:7815/

デフォルト値: なし

Web Conferencing の通知の無効化

パラメータ: `disablenotification`

セクション: [CONFERENCING]

説明: Web Conferencing が Calendar のクライアント・アプリケーションによる会議の変更に関する電子メール通知を送信するかどうかを指定します。このパラメータは、Oracle Connector for Outlook にのみ適用されます。

許容値:

TRUE (通知を無効化)

FALSE (通知を有効化)

デフォルト値: FALSE

ディレクトリ・サーバーの接続モデルの指定

パラメータ: `dir_connectmodel`

セクション: [DAS]

説明: ディレクトリ・サーバーの接続モデルを指定します。永続的な接続モデルの場合、ディレクトリ・サーバー接続は、起動時に確立され、停止時に終了されます。オンデマンド型の接続モデルの場合、ディレクトリ・サーバー接続は、ディレクトリへのアクセスが必要なトランザクションがあると確立され、そのトランザクションの終了時に切断されます。

許容値:

`persistent`

`ondemand`

デフォルト値: `persistent`

LDAP ディレクトリへのアクセスの有効化

パラメータ: `dir_enableldappersonsearch`

セクション: [ENG]

説明:LDAP ディレクトリに格納される非カレンダー・ユーザーへのアクセスを有効化または無効化します。すべての LDAP ユーザーが Oracle Calendar に対してプロビジョニングされている環境で、LDAP ディレクトリ・サーバーのヒット数を最小限にするには、このパラメータを FALSE に設定します。

許容値:

TRUE (LDAP ディレクトリへのアクセスの有効化)

FALSE (LDAP ディレクトリへのアクセスの無効化)

デフォルト値:TRUE

会議の出席者数の制限

パラメータ:maxattendees

セクション:[ENG]

説明:1つのイベントへの参加者の最大数を指定します。このパラメータは、休日、unimvuser ユーティリティまたはレプリケーションには適用されません。

値に0を指定すると、サーバーによる制限は実施されません。

許容値:正の整数または0

デフォルト値:5000

Oracle Calendar アプリケーション・システム・セッションの時間制限の設定

パラメータ:ocas_sessionexpiry

セクション:[ENG]

説明:Oracle Calendar アプリケーション・システムと Oracle Calendar Server 間の接続が終了するまでの時間(分単位)を指定します。実際の終了時間は、この値の±30%以内に設定されます。つまり、デフォルトの設定である2160分(36時間)を使用すると、実際の終了時間は、接続が確立されてから1〜2日の範囲になります。値に0を指定すると、サーバーによる制限は実施されません。

注意: クライアント・アプリケーションは、この接続の失効による影響を受けません。

許容値:正の整数または0

デフォルト値:2160 (36 時間)

アシスタントの電話番号の LDAP 属性の指定

パラメータ: attr_assistantphone

セクション: [LDAP]

説明: LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される ASSISTANT-PHONE 属性の属性名を指定します。

許容値: LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「'''」が使用された場合、この属性には読取りも書き込みも行われません。

デフォルト値: なし

別名の LDAP 属性の指定

パラメータ: attr_alias

セクション: [LDAP]

説明: LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される ALIAS 属性の属性名を指定します。

許容値: LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「'''」が使用された場合、この属性には読取りも書き込みも行われません。

デフォルト値: uid

アシスタント名の LDAP 属性の指定

パラメータ: attr_assistant

セクション: [LDAP]

説明: LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される ASSISTANT 属性の属性名を指定します。

関連資料: 「[アシスタントの電話番号の LDAP 属性の指定](#)」の
[LDAP] attr_assistantphone

許容値: LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「'''」が使用された場合、この属性には読取りも書き込みも行われません。

デフォルト値: なし

部門の LDAP 属性の指定

パラメータ: attr_department

セクション: [LDAP]

説明:LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される DEPARTMENT 属性の属性名を指定します。

許容値:LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「'''」が使用された場合、この属性には読取りも書込みも行われません。

デフォルト値:departmentnumber

表示名の LDAP 属性の指定

パラメータ:attr_displayname

セクション:[LDAP]

説明:LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される DISPLAYNAME 属性の属性名を指定します。

許容値:LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「'''」が使用された場合、この属性には読取りも書込みも行われません。

デフォルト値:

displayname (Oracle Internet Directory の場合)

''' (LDAP ディレクトリ・サーバーの場合)

自宅の代替電話番号の LDAP 属性の指定

パラメータ:attr_homephone2

セクション:[LDAP]

説明:LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される HOMEPHONE2 属性の属性名を指定します。

許容値:LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「'''」が使用された場合、この属性には読取りも書込みも行われません。

デフォルト値:なし

マネージャの LDAP 属性の指定

パラメータ:attr_managerdn

セクション:[LDAP]

説明:LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用されるユーザーの managerdn 属性の属性名を指定します。

許容値:LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「'''」が使用された場合、この属性には読取りも書込みも行われません。

デフォルト値:

manager (Oracle Internet Directory の場合)

"" (LDAP ディレクトリ・サーバーの場合)

注意の LDAP 属性の指定

パラメータ: attr_notes

セクション: [LDAP]

説明: LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される notes 属性の属性名を指定します。

許容値: LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「""」が使用された場合、この属性には読取りも書き込みも行われません。

デフォルト値: なし

勤務先住所（番地）の LDAP 属性の指定

パラメータ: attr_officeaddress

セクション: [LDAP]

説明: LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される OFFICE-ADDRESS 属性の属性名を指定します。

関連資料:

「勤務先住所（市）の LDAP 属性の指定」の

[LDAP] attr_officecity

「勤務先住所（郵便番号）の LDAP 属性の指定」の

[LDAP] attr_officepostalcode

「勤務先住所（都道府県）の LDAP 属性の指定」の

[LDAP] attr_officestate

『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』の

[LDAP] attr_country

許容値: LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「""」が使用された場合、この属性には読取りも書き込みも行われません。

デフォルト値: street

勤務先住所（市）の LDAP 属性の指定

パラメータ: attr_officecity

セクション: [LDAP]

説明: LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される OFFICE-CITY 属性の属性名を指定します。

許容値: LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「'''」が使用された場合、この属性には読取りも書込みも行われません。

デフォルト値: 1 (小文字の L)

勤務先住所（ビル名）の LDAP 属性の指定

パラメータ: attr_officename

セクション: [LDAP]

説明: LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される OFFICE-BUILDING 属性の属性名を指定します。

許容値: LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「'''」が使用された場合、この属性には読取りも書込みも行われません。

デフォルト値: physicalDeliveryOfficeName

勤務先住所（郵便番号）の LDAP 属性の指定

パラメータ: attr_officepostalcode

セクション: [LDAP]

説明: LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される OFFICE-POSTALCODE 属性の属性名を指定します。

許容値: LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「'''」が使用された場合、この属性には読取りも書込みも行われません。

デフォルト値: postalcode

勤務先住所（都道府県）の LDAP 属性の指定

パラメータ: attr_officestate

セクション: [LDAP]

説明: LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される OFFICE-STATE 属性の属性名を指定します。

許容値:LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「'''」が使用された場合、この属性には読取りも書込みも行われません。

デフォルト値:st

ポケットベルの LDAP 属性の指定

パラメータ:attr_pager

セクション:[LDAP]

説明:LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される PAGER 属性の属性名を指定します。

許容値:LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「'''」が使用された場合、この属性には読取りも書込みも行われません。

デフォルト値:pager

勤務先の代替電話番号の LDAP 属性の指定

パラメータ:attr_phone2

セクション:[LDAP]

説明:LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される勤務先の 2 番目の電話番号 PHONE2 属性の属性名を指定します。

許容値:LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「'''」が使用された場合、この属性には読取りも書込みも行われません。

デフォルト値:なし

3.1.4.2 unison.ini ファイルの更新されたパラメータ

この項では、更新されたパラメータとその説明の一覧を示します。

表 3-2 リリース 2 (9.0.4.2) で更新されたパラメータ

セクション	パラメータ	説明	変更点
[CWS]	mailhdrtoname	電子メール・ヘッダーの名前表示の有効化	説明が変更されました。
	noreqsleep	CWS 待機時間の設定	説明が変更されました。
	noreqsleep_replication	レプリケーション・リクエストの CWS 待機時間の設定	説明が変更されました。
	smsnotifymsgfile	なし	このパラメータは廃止されました。
[DAS]	dir_connection	なし	このパラメータは廃止されました。
[DB]	db_pages	データベース・キャッシュのページ数の指定	デフォルト値が 8 から 24 に変更されました。
[ENCRYPTION]	デフォルト	デフォルトの暗号化法の指定	デフォルト値が none から cs-light に変更されました。
[ENG]	allowresourceconflict	リソース競合の許可	説明が変更されました。
	gal_refreshinterval	グローバル・アドレス・リストのリフレッシュ	デフォルト値が 7200 から 21600 に変更されました。
	itemextinfo maxsize	Web Client の作業環境の格納	このパラメータはこのリリースで公開されました。
	sss_cachesize	サーバー側のセキュリティ・レコード・キャッシュのサイズ指定	デフォルト値が 101 から maxsession × 100 に変更されました。
	sss_cacheexpiredelay	なし	このパラメータの名前は sss_expiredelay に変更されました。
[LDAP]	sss_expiredelay	サーバー側のセキュリティ・レコード・キャッシュの猶予期限の指定	このパラメータの名前は sss_cacheexpiredelay から変更されました。
	attr_address	ユーザー・アドレスの LDAP 属性の指定	説明が変更されました。
	attr_employeeid	従業員 ID の LDAP 属性の指定	デフォルト値はありませんでしたが、+++ になりました。
	attr_fax	FAX 番号の LDAP 属性の指定	このパラメータはこのリリースで公開されました。
	attr_homephone	自宅の電話番号の LDAP 属性の指定	このパラメータはこのリリースで公開されました。

表 3-2 リリース 2 (9.0.4.2) で更新されたパラメータ (続き)

セクション	パラメータ	説明	変更点
	attr_initials	ユーザー・イニシャルの LDAP 属性の指定	デフォルト値が initials から middlename に変更されました。
	attr_jobtitle	役職の LDAP 属性の指定	このパラメータはこのリリースで公開されました。
	attr_orgunit1	組織単位の LDAP 属性の指定	このパラメータはこのリリースで公開されました。
	attr_phone	勤務先の電話番号の LDAP 属性の指定	このパラメータはこのリリースで公開されました。
	attr_timezone	タイムゾーンの LDAP 属性の指定	このパラメータはこのリリースで公開されました。
	usealtexclusionfilter	なし	このパラメータは廃止されました。
LIMITS	autocontrol	予定表の新規エントリを確認する最小間隔の指定	このパラメータの説明に誤りがありました。
	resourceconflicts	リソースの二重予約の許可	説明が変更されました。
	userlist_login	ログイン時の参照の有効化	デフォルト値が TRUE から FALSE に変更されました。
UTL	ca_maxsearchresult	検索結果数の制限	デフォルト値が 100 から 200 に変更されました。

電子メール・ヘッダーの名前表示の有効化

パラメータ: mailhdrtoname

セクション: [CWS]

説明: 電子メール・ヘッダーの電子メール・アドレス・フィールド (「送信者:」、「宛先:」および「返信先」) に、アドレスの他に名前を表示させるかどうかを決定します。アドレスが ASCII 文字を使用して構成され、これによって電子メール・リーダーの表示問題が発生していない場合、名前には ASCII 文字以外の文字を含めることができます。電子メール・リーダーが ASCII 文字以外の文字を適切に表示できない場合は、アドレス・フィールドから名前を完全に削除します。

許容値:

TRUE (名前を表示する)

FALSE (名前を表示しない)

デフォルト値: TRUE

CWS 待機時間の設定

パラメータ: `noreqsleep`

セクション: [CWS]

説明: 全社的サービス・デーモンまたはサービスが動作する必要がない場合に、待機（スリープ）する時間（秒単位）を指定します。この設定は、特定の操作（サーバー側のアラーム、レプリケーションなど）の実行頻度に影響します。値を低くすると `uniengd` は遅くなりますが、処理中のアラームおよび Web Conferencing のレプリケーション・リクエストの遅延を減少できます。

レプリケーション・リクエストが CWS レプリケーション・キューにない場合、新しいレプリケーション・リクエストを確認するまでの時間（秒単位）は、`noreqsleep` および `noreqsleep_replication` の大きい方の値になります。

許容値: 正の整数

デフォルト値: 15

レプリケーション・リクエストの CWS 待機時間の設定

パラメータ: `noreqsleep_replication`

セクション: [CWS]

説明: キューにレプリケーション・リクエストがない場合に、全社的サービス・デーモンまたはサービスが待機（スリープ）する時間（秒単位）を指定します。この設定は、特定の操作（リモート・ユーザーのレプリケーションなど）の実行頻度に影響します。値を低くすると `uniengd` は遅くなりますが、処理中のアラームおよび Web Conferencing のレプリケーション・リクエストの遅延を減少できます。

レプリケーション・リクエストが CWS レプリケーション・キューにない場合、新しいレプリケーション・リクエストを確認するまでの時間（秒単位）は、`noreqsleep` および `noreqsleep_replication` の大きい方の値になります。

許容値: 正の整数

デフォルト値: 15

データベース・キャッシュのページ数の指定

パラメータ: `db_pages`

セクション: [DB]

説明: データベース・キャッシュのページ数を指定します。値を大きくすると、使用するメモリー容量が大きくなり、パフォーマンスが向上します。値を大きくしていくと、ある時点から、得られるパフォーマンスの向上率が減少します。

許容値: 正の整数

デフォルト値: 24

デフォルトの暗号化法の指定

パラメータ: default

セクション: [ENCRYPTION]

説明: Calendar Server がクライアントに対して使用するデフォルトの暗号化法を指定します。

許容値: [ENCRYPTION] supported パラメータによって指定されているリスト内の任意の方法。

デフォルト値: cs-light

リソース競合の許可

パラメータ: allowresourceconflict

セクション: [ENG]

説明: サーバーがリソースの二重予約を許可するかどうかを指定します。通常、このパラメータは、[LIMITS] resourceconflicts パラメータと同じ値に設定する必要があります。

このパラメータが FALSE に設定されると、各リソースの競合の許可または禁止は、そのリソースの ALLOW-CONFLICT 属性に基づいて判断されます。ALLOW-CONFLICT 属性が FALSE に設定されると、競合は許可されません。

このパラメータが TRUE に設定されると、サーバーはすべてのリソースの二重予約を許可します。この場合、ALLOW-CONFLICT リソース属性は無視されます。

関連資料: 「[リソースの二重予約の許可](#)」の [LIMITS] resourceconflicts

許容値:

TRUE (二重予約を許可する)

FALSE (二重予約を許可しない)

デフォルト値: FALSE

グローバル・アドレス・リストのリフレッシュ

パラメータ: gal_refreshinterval

セクション: [ENG]

説明: グローバル・アドレス・リスト (GAL) のリフレッシュ間隔 (秒単位) を指定します。GAL 内のエントリの検索は、パフォーマンスを低下させますが、頻繁に行われます。パフォーマンスを向上させるには、検索結果をキャッシュして、サーバーがそれを再利用するようにします。

キャッシュが確実に更新されるように、CWS は定期的（「[CWS] galsyncinterval」を参照）に結果セットを更新するリクエストを送信します。結果セットは、結果セットが無効になっている場合（たとえば、新規ノードがネットワークに追加されている場合）、または現在のバージョンがパラメータ gal_refreshinterval の値より前の場合にのみ、再構築されます。パラメータ [CWS] galsyncinterval は、リフレッシュ間隔を設定するために使用されます。

許容値: 正の整数

デフォルト値: 21600（6 時間）

Web Client の作業環境の格納

パラメータ: itemextinfo maxsize

セクション: [ENG]

説明: Calendar アカウントの作業環境を格納するために、Web Client が使用する itemextinfo 属性の最大長を指定します。

許容値: 1500 より大きい正の整数

デフォルト値: なし

サーバー側のセキュリティ・レコード・キャッシュのサイズ指定

パラメータ: sss_cachesize

セクション: [ENG]

説明: キャッシュ内の読取りアクセス・レコードのエントリ数を指定します。サーバーはこれらのレコードを使用して、他のユーザーが所有する Calendar データの読取り権限をユーザーが所有しているかどうかを判断します。このキャッシュを使用してサーバー側のセキュリティを処理すると、セキュリティ・アクセス・レコードの読取りが速くなります。1 つのユーザー・セッションには 1 つのキャッシュがあります。

関連資料: 「サーバー側のセキュリティ・レコード・キャッシュの猶予期限の指定」の [ENG] sss_expiredelay

許容値:

0（キャッシュを無効にする）

1000003 未満の正の整数

デフォルト値: maxsession × 100

サーバー側のセキュリティ・レコード・キャッシュの猶予期限の指定

パラメータ: `sss_expiredelay`

セクション: [ENG]

説明: エントリが期限切れになるまでキャッシュに格納される時間 (秒単位) を指定します。

関連資料: 「サーバー側のセキュリティ・レコード・キャッシュのサイズ指定」の [ENG] `sss_cachesize`

許容値: 正の整数

デフォルト値: 900

ユーザー・アドレスの LDAP 属性の指定

パラメータ: `attr_address`

セクション: [LDAP]

説明: LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される Calendar ユーザー・アドレス属性 LOC の属性名を指定します。

許容値: LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「'''」が使用された場合、この属性には読取りも書込みも行われません。

デフォルト値:

`postalAddress` (Oracle Calendar がスタンドアロンの場合)

`homePostalAddress` (Oracle Collaboration Suite の場合)

従業員 ID の LDAP 属性の指定

パラメータ: `attr_employeeid`

セクション: [LDAP]

説明: LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される EMPL-ID 属性の属性名を指定します。

許容値: LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「'''」が使用された場合、この属性には読取りも書込みも行われません。

デフォルト値: `employeenumber`

FAX 番号の LDAP 属性の指定

パラメータ: `attr_fax`

セクション: [LDAP]

説明:LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される FAX 属性の属性名を指定します。

許容値:LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「"」が使用された場合、この属性には読取りも書込みも行われません。

デフォルト値:facsimileTelephoneNumber

自宅の電話番号の LDAP 属性の指定

パラメータ:attr_homephone

セクション:[LDAP]

説明:LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される HOMEPHONE 属性の属性名を指定します。

許容値:LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「"」が使用された場合、この属性には読取りも書込みも行われません。

デフォルト値:なし

ユーザー・イニシャルの LDAP 属性の指定

パラメータ:attr_initials

セクション:[LDAP]

説明:LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用されるイニシャル I 属性の属性名を指定します。

許容値:LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「"」が使用された場合、この属性には読取りも書込みも行われません。

デフォルト値:middlename

役職の LDAP 属性の指定

パラメータ:attr_jobtitle

セクション:[LDAP]

説明:LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される役職 jt 属性の属性名を指定します。

許容値:LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「"」が使用された場合、この属性には読取りも書込みも行われません。

デフォルト値:なし

組織単位の LDAP 属性の指定

パラメータ: attr_organit1

セクション: [LDAP]

説明: LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される OU1 属性の属性名を指定します。

許容値: LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「'''」が使用された場合、この属性には読取りも書込みも行われません。

デフォルト値: ou

勤務先の電話番号の LDAP 属性の指定

パラメータ: attr_phone

セクション: [LDAP]

説明: LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用される勤務先の電話番号 PHONE 属性の属性名を指定します。

許容値: LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「'''」が使用された場合、この属性には読取りも書込みも行われません。

デフォルト値: phone

タイムゾーンの LDAP 属性の指定

パラメータ: attr_timezone

セクション: [LDAP]

説明: LDAP ディレクトリ・サーバーによって使用されるタイムゾーン属性の属性名を指定します。

許容値: LDAP ディレクトリ・サーバー・スキーマで定義される任意の属性名。「'''」が使用された場合、この属性には読取りも書込みも行われません。

デフォルト値: なし

予定表の新規エントリを確認する最小間隔の指定

パラメータ: autocontrol

セクション: [LIMITS]

説明: サーバーに対し予定表のリフレッシュをコールする間隔（つまり、予定表の新規エントリを確認する間隔）の最小時間（分単位）を指定します。

この値が [ENG]maxsessions/60 未満の場合、[ENG]maxsessions/60 の値が優先されます（ただし、最大値は 45）。たとえば、autocontrol = 15 で [ENG]maxsessions = 1200 の場合、20（1200 を 60 で除算した値）分経過するまで、リフレッシュは実行されません。

関連資料：『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』の
[ENG]maxsessions および [CLIENT]minrefreshrate

許容値：正の整数（最大値は $2^{16}-1$ ）

デフォルト値：15

リソースの二重予約の許可

パラメータ：resourceconflicts

セクション：[LIMITS]

説明：クライアントがユーザーによるリソースの二重予約を許可するかどうかを指定します。リソースの競合がサーバー全体の設定であるリリース 5.4 以下の場合、常に、このパラメータを [ENG] allowresourceconflict パラメータと同じ値に設定する必要があります。これは、Oracle Calendar Desktop Client および Oracle Calendar Web Client に適用されます。

リソースごとの競合オプションが必要で、以前のクライアントが使用されている場合は、このパラメータを TRUE に設定します。これは、リソースが競合を許可しない場合に、クライアントは二重予約を許可するが、サーバーが二重予約をブロックするようにするためです。これによって、リソースごとの構成が可能になりますが、以前のクライアントは、サーバーの規定により返されるエラーを処理しません。

関連資料：「リソース競合の許可」の [ENG]
allowresourceconflict

許容値：

TRUE （二重予約を許可する）

FALSE （二重予約を許可しない）

デフォルト値：TRUE

ログイン時の参照の有効化

パラメータ：userlist_login

セクション：[LIMITS]

説明：複数のユーザーが指定したログイン資格証明に一致した場合に、一致するユーザーのリストを表示するかどうかを指定します。

許容値:

TRUE (一致するユーザーのリストを表示する)

FALSE (リストを表示しない)

デフォルト値: FALSE

検索結果数の制限

パラメータ: `ca_maxsearchresult`

セッション: [UTL]

説明: 検索リクエストを実行した **Calendar Administrator** に LDAP ディレクトリが返すエントリ (ユーザー、リソースおよびイベント・カレンダー) の最大数を指定します。このパラメータは、**Calendar Administrator** のみに適用されます。

このパラメータは、[LIMITS] `maxsearchresult` パラメータより大きい値に設定できます。これは、ほとんどのユーザーが **Calendar Administrator** を使用しないためです。

関連資料: 『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』の [LIMITS] `maxsearchresult`

許容値: 正の整数 (最大値は $2^{32}-1$)

デフォルト値: 200 (一度に 200 エントリのみリストする)

3.1.4.3 更新された UNIX 環境変数

UNIX 環境変数 `CTSYS_IPC_PATH` の許容値が更新されました。この変数は、UNIX で生成される IPC のパスを指定します。この変数の許容値は、有効なパスで、最大長は 50 文字です。デフォルト値はありません。

3.1.5 ドキュメントの訂正

ドキュメントの訂正に関する情報は次のとおりです。

- **UNIX man ページ:** Calendar Server の UNIX man ページの生成後にアップデートがいくつか行われました。Calendar Server ユーティリティの最新情報は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』の付録 F「Calendar Server のユーティリティ」を参照してください。

この問題は、リリース 2 (9.0.4.2) で解決されました。

- **uniuser ユーティリティ**: uniuser ユーティリティの **-s** オプションの説明では、複数のセクションを指定できると記述されています。これは間違いです。 **-s** オプションは、単一のセクションのみを受け入れます。この問題を追跡するために **Bug#3406721** が割り当てられました。
- **パラメータの定義**: [LIMITS] autocontrol および [CLIENT] minrefreshrate パラメータの説明では、lck_users パラメータを参照しています。このパラメータは廃止され、[ENG] maxsessions パラメータに置き換えられました。この問題を追跡するために **Bug#3500967** が割り当てられました。
- **unib2lendian および unil2bendian ユーティリティ**: これらのユーティリティを使用して、システム間でノードを移行する手順が変更されました。変更後の手順は、次のとおりです。

1. 両方のシステムの **Calendar Server** を停止します。この手順の後半で指示があるまで、いずれのサーバーも再起動しないでください。
2. ビッグ・エンディアン・システムの **Calendar Server** からリトル・エンディアン・システムの **Calendar Server** にノードを移動する場合は、ターゲット・ノードで **unib2lendian** を実行します。

```
unib2lendian -n 45
```

変換済のノードのコピーは、`$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/<N#>/perm_conv` ディレクトリに格納されます。ここで、`<N#>` はターゲット・ノードに対応する `unison.ini` セクションの `name` パラメータの値です。

3. リトル・エンディアン・システムの **Calendar Server** からビッグ・エンディアン・システムの **Calendar Server** にノードを移動する場合は、ターゲット・ノードで **unil2bendian** を実行します。

```
unil2bendian -n 45
```

変換済のノードのコピーは、`$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/<N#>/perm_conv` ディレクトリに格納されます。ここで、`<N#>` はターゲット・ノードに対応する `unison.ini` セクションの `name` パラメータの値です。

4. 以前のホストの `$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini` ファイルのターゲット・ノードに対応するセクションを、新しいホストの `unison.ini` ファイルにコピーします。たとえば、次のようになります。

```
[45]
name = N1
version = A.02.50
```

以前のホストの `unison.ini` ファイルからこのセクションを削除します。

5. 以前のホストの `perm_conv` ディレクトリのすべての `.dat` ファイルを、新しいホストの `$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/<N#>/perm` ディレクトリにコピーします。
6. `$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/<N#>/streams` ディレクトリを以前のホストから新しいホストにコピーします。
7. `$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/nempty/perm/unison.dbd` および `$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/nempty/perm/vista.ctb` ファイルを、新しいホストの `$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/<N#>/perm` ディレクトリにコピーします。
8. ターゲット・ノードがノード・ネットワークの一部である場合は、Calendar Server を再起動する前にネットワーク情報を更新する必要があります。

注意： この手順の実行しないと、データ損失またはデータベース破損（あるいはその両方）の原因になります。

最初に、ノード・ネットワークのすべての Calendar Server を停止します。

`unidbfix` を使用して、`remotenode.dat` ファイル内の情報を各ノードのそれぞれの `remotenode.ini` ファイルにエクスポートします。たとえば、ネットワークがノード 30、35、40、45 および 50 で構成されていた場合は、次のように指定します。

```
% unidbfix -export -n 30
% unidbfix -export -n 35
% unidbfix -export -n 40
% unidbfix -export -n 45
% unidbfix -export -n 50
```

各ノードのローカル・ホストで `unidbfix` を実行します。

ネットワークの各ノードの `$ORACLE_HOME/ocal/db/nodes/<Nx>/perm/remotenode.ini` ファイルを編集して、ノード 45 に関連付けられているホスト名を変更します。

リトルエンディアン の UNIX ホストに移動する場合は、ノード 45 で `uniclean` を実行して、コピーされたファイルのファイル所有権および権限を正しく設定します。

ノード 45 で `unidbfix -k` を実行して、主要なファイルを作成します。

unidbfix -import を使用して、remotenode.dat ファイルを remotenode.ini ファイルの新規情報とともに更新します。

```
% unidbfix -import -n 30
% unidbfix -import -n 35
% unidbfix -import -n 40
% unidbfix -import -n 45
% unidbfix -import -n 50
```

また、これによって各ノードの主要なファイルが再構築されます。

\$ORACLE_HOME/ocal/misc/nodes.ini ファイルを更新して、ノード 45 のホスト名の変更を反映します。

9. すべての Calendar Server を再起動します。

- **Nodes.ini ファイル**：『Oracle Calendar 管理者ガイド』の第7章の「接続およびルール」には、次の情報を提供する注記が記載されていなければなりません。

「nodes.ini ファイルに絶対ルールと相対ルールを適用する場合、絶対ルールを相対ルールの前に指定しなければなりません。」(2811823)

- **UNIUSER ユーティリティ**：『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』の付録 F の「UNIUSER」には、uniuser ユーティリティに関して、-s オプションを付けて複数の引数を使用できるという記述がありますが、これは誤りです。-s オプションについての正しい説明は以下のとおりです。

-s オプションの後に単一のセクション名を指定します（たとえば「GEN」は GEN という名前のセクションを指定します）。一度に指定できるセクションは1つです。複数のセクションを適用するには、uniuser ユーティリティを複数回実行しなければなりません。(3406721)

- **[LIMITS] autocontrol パラメータ**：『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』の付録 C では、[LIMITS] autocontrol パラメータに関して、[LCK] lck_users パラメータに依存するという記述がありますが、これは誤りです。[LCK] lck_users パラメータは、Oracle Calendar 9.0.4 ではすでに有効ではなく、[ENG] maxsessions パラメータに置き換わっています。したがって、正しい記述は次のようになります。

「この値が [ENG]maxsessions/60 未満の場合、[ENG]maxsessions/60 の値が優先されます（ただし、最大値は 45）。たとえば、autocontrol = 15 で [ENG]maxsessions = 1200 の場合、20（つまり、1200 を 60 で除算した値）分経過するまで、リフレッシュは実行されません。」(3500967)

3.2 Oracle Calendar Administrator

この項の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)

3.2.1 新機能

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.2) の Calendar Administrator には、新機能があります。これらの新機能の詳細は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0)』を参照してください。

3.2.2 既知の制限および回避策

既知の制限および回避策は次のとおりです。

- **セキュリティ証明書の問題** : Oracle Calendar Administrator への安全な接続をオープンすると、証明書の真偽が検証できないという警告がブラウザに表示されます。これは、認識されていない認証局からのデフォルトの証明書が Oracle HTTP Server に含まれているためです。

次のいずれかを実行します。
 - Oracle HTTP Server のデフォルトの証明書を、認識されている認証局からの正式な証明書に置き換えます。
 - 警告を無視しても問題はありません。デフォルトの証明書は検証できませんが、この接続では強力な暗号が提供され続けます。
- **SYSOP アカウントの作業環境を変更しない** : Calendar Administrator の SYSOP アカウントの作業環境を変更すると、アカウントは動作を中止します。すでに作業環境を変更して、この問題が発生している場合は、SYSOP 作業環境をデフォルト値にリセットします。この問題を追跡するために Bug#3470302 が割り当てられました。

回避策 :

SYSOP アカウントの作業環境を変更しないでください。ただし、Calendar Administrator を異なる作業環境で使用する必要がある場合は、管理権限を持つユーザー・アカウントを使用します。

3.3 Oracle Calendar SDK

この項の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)

3.3.1 新機能

この項では、Oracle Calendar SDK リリース 2 (9.0.4.1) の新機能について説明します。

- タスク操作 (VTODO オブジェクト)
- 接続操作 (VCARD オブジェクト)
- JNI (Java 固有インタフェース) 対応 Java クラス
- リモート代理操作
- 接続プーリング

Java クラスが組み込まれたことにより、以前はサード・パーティによって実装されていた Java の実装が容易になります。

接続プーリング機能により、SDK で使用される接続モデルの構成オプションが追加されました。これにより、各種アプリケーション（特に Web ベースおよびマルチスレッド環境）の実装時に、リソースの利用と効率が大幅に向上し、既存の接続の再利用を促進します。

古い CAPI イベント関数が、新しい CSDK 関数と入れ替わりました。すでに CAPI 関数を使用しているユーザーは、次の iCalendar プロパティのいずれかに依存している場合、サーバー上でユーティリティ `unifhconv` を実行する必要があります。

- X-* (すべての X- プロパティ)
- SEQUENCE
- RESOURCES
- RELATED-TO
- CONTACT
- URL
- ATTENDEE (出席者がカレンダーのユーザーでない場合、たとえば電子メール・アドレスのみで招待されている場合など)

3.3.2 既知の制限および回避策

表 3-3 に、Oracle Calendar SDK の既知の制限と回避策を示します。

表 3-3 Oracle Calendar SDK の既知の問題

Bug#	説明	リリース
3235601	ホスト名でデフォルトのポート番号を明示的に指定すると（たとえば、 <code>host_name.com:5730</code> など）、接続プール機能が不要な接続コールを実行するため、パフォーマンス低下の原因になります。	9.0.4.2
3410145	イベントとは違い、UID を使用しないとタスクを作成できません。	9.0.4.2
3412387	SDK には、ユーザーからの不正な HTML 入力を検出するフィルタが含まれていません。SDK を使用して構築されたアプリケーションでは、データを Web ブラウザに表示する前に、そのアプリケーション固有のフィルタをそのデータに対して適用することをお勧めします。	9.0.4.2
3467299	CSDK_FLAG_FETCH_LOCALTIMES は、タスクのフェッチ時に無視されます。	9.0.4.2

3.4 Oracle Calendar アプリケーション・システム

この項では、次の製品に関する情報を提供します。

- [Oracle Calendar Web Client](#)
- [Oracle Calendar Web Services](#)
- [Oracle Sync Server](#)

3.4.1 Oracle Calendar Web Client

この項の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)
- [ドキュメントの訂正](#)

3.4.1.1 新機能

この項では、Oracle Calendar Web Client リリース 2 (9.0.4.1) の新機能について説明します。

- 新しいスケジューラでは、会議で複数のユーザーやリソースが使用可能な場合に、効率的な検索方法を提供します。つまり、リソース・スケジューリング・メカニズムにより、代理承認が必要なリソースの階層検索および自動ワークフローが可能になります。ユーザーは、人およびリソースの詳細も表示できます。

- 「空き時間として表示」機能により、ユーザーは、会議への招待を受ける一方で、他の会議への招待にも応じることができます。
- Oracle Web Conferencing のサポート。ユーザーは、Web 会議への参加や Web 会議の作成を Web Client から行うことができます。
- 新しい代理機能では、次のものがサポートされています。
 - リソースの代理
 - イベント・カレンダーの代理
 - リモートの代理
- 通知およびワイヤレスの作業環境への変更は、Calendar Desktop Client に適用されます。
- 「会議」、「メモ」、「終日イベント」にデフォルトのアラーム設定を指定できます。
- 24 時間の会議をサポートします。
- グローバル・ツールバーから Calendar Administrator へのリンク（サーバー管理権限を持つユーザーの場合）。
- ユーザーは日表示または週表示に表示される時間を設定できます。
- 追加言語として、デンマーク語、オランダ語、英語、フィンランド語、フランス語、ドイツ語、ギリシャ語、イタリア語、日本語、韓国語、ノルウェー語、ポルトガル語（ブラジル）、ポルトガル語、スウェーデン語、スペイン語、簡体字中国語、繁体字中国語およびトルコ語のサポート。

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.2) には、さらに多くの新機能があります。これらの新機能の詳細は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0)』を参照してください。

3.4.1.2 既知の制限および回避策

表 3-4 に、Oracle Calendar Web Client の既知の制限と回避策を示します。リリース 2 (9.0.4.1) のみに関連する問題は、リリース 2 (9.0.4.2) で解決されました。

表 3-4 Oracle Calendar Web Client の既知の問題

Bug#	説明	リリース
2861543、 2981030、 2847384	Netscape または Mozilla の問題： ■ Netscape 6.2: 予定表を正しく印刷するには、Web Client の「表示設定」で余白のサイズを 1 インチに設定する必要があります。 ■ Netscape 6.x: 一部のエラー・ページで「前に戻る」リンクが機能しません。これは Netscape の問題です。 ■ Mozilla 1.x: 表示の問題および不安定な動作が発生することがあります。	9.0.4.1、 9.0.4.2
2973763	サーバーに添付ファイルをアップロードした後で、ユーザーが「OK」をクリックせずにブラウザ・ウィンドウを閉じた場合、そのファイルはサーバーの一時ディレクトリに残ったままになります。	9.0.4.1、 9.0.4.2
2980094	ユーザーがアラームのリード・タイムを、サーバーの最大許容値より大きい値に設定しようとすると、リード・タイムが警告なしにサーバーの最大許容値に自動的にリセットされます。	9.0.4.1
2982922	Oracle Calendar Web Client をリダイレクトするには、 \$ORACLE_HOME/ocas/conf/ocal.conf ディレクトリの ocal.conf ファイルに次の文を追加します。 <pre><Location /calendar> Redirect permanent /calendar \ http://<host>:<port>/ocas-bin/ocas.fcgi?sub=web </Location></pre>	9.0.4.1、 9.0.4.2
2983094	完全な表示権限で予定表を表示し、会議への添付ファイルを開こうとすると、セキュリティ違反のエラー・メッセージが表示されます。	9.0.4.1
なし	マスター・ノード接続の確立: スレーブ・ノードが使用不可の場合、Oracle Calendar アプリケーション・システムからマスター・ノードへの接続が確立されないことがあります。 回避策: ocas.conf の [Connectionconfig] セクションに openallnodes = FALSE を設定します。	9.0.4.1、 9.0.4.2
なし	Oracle Calendar Web Client の複数インストール: Web Client の各インストールでは、共通の設定を持つ Calender Server ノードのみをサポートします。異なる設定の Calender Server ノードをサポートするには、Web Client の別のインスタンスをインストールする必要があります。	9.0.4.1、 9.0.4.2

表 3-4 Oracle Calendar Web Client の既知の問題（続き）

Bug#	説明	リリース
なし	アップグレードの問題：リリース 2（9.0.4）のインストールにおける <code>ocas.conf</code> および <code>ocwc.conf</code> の空白行は、Upgrade Assistant によって削除されます。これを防止するには、Upgrade Assistant を実行する前に、空白行を # に置き換えてください。	9.0.4.1、 9.0.4.2
3121374	ブルーのバックグラウンド：リリース 1（9.0.3）からリリース 2（9.0.4）へのアップグレード後、Oracle Calendar Web Client のバックグラウンドがブルーになります。 回避策： <code>ocwc.conf</code> の視覚属性パラメータから空白をすべて削除します。	9.0.4.1、 9.0.4.2
3124001、 3124416、 3130293、 3149970	Mac 用の Safari 1.0 を使用すると、予期しない動作が発生します。たとえば、次のようになります。 ■ イベントで「人」および「リソース」を表示すると、ページの上部バーがすべて表示されない場合があります。 ■ 特定の言語で Web 会議を作成すると、重複するフィールドがあります。 ■ ログアウト後に、Safari の「Back」ボタンを使用して、ページの表示および Web Client での操作を実行できます。このため、別のユーザーが Safari の新しいインスタンスを起動してログインし、前のユーザーの受信ボックスを表示することができます。これは、Oracle Collaboration Suite 環境で Safari を使用した場合にのみ発生します。 回避策： ログアウト後に「Reset」Safari メニュー・コマンドを選択します。	9.0.4.2
3124113	「名前」フィールドを使用してリソースを検索する場合、リソース名の最初の単語のみを使用できます。たとえば、リソース「Conference Room Saturn」は「Saturn」で検索すると検出されませんが、「Conference」で検索すると検出されます。	9.0.4.2
3130430	最初のインスタンスが休日である繰返しイベントを作成すると、その日付が「一般」タブの下に表示されても、最初のインスタンスが含まれない場合があります。イベントが休日に実行されるようにするには、「繰返し」タブの（必要に応じて）「休日」チェック・ボックスを選択します。	9.0.4.2
3166664	アクセス権を編集する際に、ユーザーの情報フィールドに最大文字数を使用しているユーザーの「情報」をクリックすると、一部のフィールドのデータが切り捨てられます。	9.0.4.2
3228340	グループから会議に追加されたリモート・ユーザーには、そのユーザー名の横にリモートの宛先を示す「(R)」が表示されません。	9.0.4.2
3264669	ユーザーは、実行するとシステムに障害を発生させることができる不正コードが HTML 添付ファイルに含まれている可能性があることを認識する必要があります。現在、そのような HTML 添付ファイルを開くと、ユーザーに対する警告がないまま、コードが実行されます。	9.0.4.2

表 3-4 Oracle Calendar Web Client の既知の問題（続き）

Bug#	説明	リリース
3309327	異なるノードに存在するユーザーの予定表からエントリを開き、そのエントリに添付ファイルがある場合、その添付ファイルのダウンロードが自動的に開始されます。	9.0.4.2
3319437	複数のサーバーが存在するスタンドアロン環境で、ユーザーが各サーバーで同じ名前を使用している場合、ログインできるのはリストされている最初のサーバーのみです。	9.0.4.2
3327839	スタンドアロン環境で、ocwc.conf を編集してバナーを削除すると、スケジューラの「リソース」タブで一部のフィールドが重複します。	9.0.4.2
3380822	Oracle Collaboration Suite インストールでは、スタンドアロン固有のパラメータ (MAX_LOGIN_ATTEMPTS) で、ログ・ファイルに書き込まれるエラー・メッセージが発生していました。このパラメータは、新しい Oracle Collaboration Suite インストールには含まれていません。ただし、以前のバージョンの Collaboration Suite からアップグレードすると、このパラメータは ocwc.conf ファイルに存在したままとなるため、次のようにコメント行にする必要があります。 <pre>[admin] # Default: max_login_attempts = 5</pre>	9.0.4.2
3394379	一部の言語では、スケジューラの一番上の行に表示される時間書式（12 時間または 24 時間）は、ユーザーの作業環境と一致せず、表示されるツールチップと異なります。	9.0.4.2
3418803	「週表示」では、デート・ピッカーを使用して日付を変更した場合、週番号が適切に更新されない場合があります。	9.0.4.2
3422539	Web Client で Mozilla 0.99 または Netscape 6 を使用すると、予期しない動作が発生します。たとえば、「詳細」ページで、イベントに対して添付ファイルを追加および削除した場合、不要なスクロール・バーが表示され、その後もそのまま残ります。	9.0.4.2
3425668	非常に長い名前を持つ添付ファイルはダウンロードできません。また、その名前は切り捨てられます。	9.0.4.2
	回避策： デスクトップ・クライアントを使用して添付ファイルをダウンロードするか、長い添付ファイル名を使用しないようにします。	
3434130, 3440396	一部の添付ファイル形式 (doc、xls ファイルなど) は、HTTPS 接続の Internet Explorer を使用してダウンロードできません。これは、Web Cache の問題です。Oracle Calendar のスタンドアロン環境では発生しません。	9.0.4.2

表 3-4 Oracle Calendar Web Client の既知の問題（続き）

Bug#	説明	リリース
3443491	新しいイベントを作成する際の電子メール・アドレスを使用したリソースの検索は、その検索がリソースではなくユーザーに対して適用されるように指定した場合にのみ動作します。たとえば、「新規会議」ページで、「人およびリソース」タブをクリックし、リソースの電子メール・アドレスを入力して、ドロップダウン・リストから「ユーザー」（「リソース」ではなく）を選択して、「検索」をクリックします。リソースが表示されます。	9.0.4.2
3464654	標準モードで「日表示（カレンダー）」ビューを使用している場合に、アクセス可能モードに切り替えてから、また標準モードに戻すと、「日表示（リスト）」ビューが表示されます。このため、現在使用しているモードの識別が困難になります。確認するには、Calendar のツールバーでアクセス可能な予定表のアイコンまたは標準の予定表のアイコンを確認するだけです。たとえば、標準モードで動作している場合は、アクセス可能モードへの切替えに使用するアクセス可能な予定表のアイコンが表示されます。	9.0.4.2

3.4.1.3 ドキュメントの訂正

この項では、Oracle Calendar Web Client のオンライン・ヘルプの既知の問題について説明します。

- **スタンドアロンでのデバイス設定** : Web Client をスタンドアロン・モードで使用している場合、次のデバイス設定の作業環境を編集できますが、ヘルプには記述されていません。
 - テキスト形式、または携帯電話のカレンダー表示におけるメモでのエントリの通知。
 - モバイル機器のアラーム
 - 優先サービス・センター番号

3.4.2 Oracle Calendar Web Services

この項の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)

3.4.2.1 新機能

これは Oracle Calendar Web Services の最初のリリースで、Oracle Calendar の最新コンポーネントです。Oracle Calendar Web Services では、一般的な XML 問合せにより、任意のポータル、クライアント・アプリケーションまたはバックエンド・サーバーで表示するカレンダー・データをアプリケーションで取り出すことができます。開発者は、Oracle Calendar に組み込まれている Oracle Calendar Web Services ツールキットを使用して、Web サービス・アプリケーションを開発し、SOAP 問合せを作成することができます。

Oracle Calendar Web Services の新機能は、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.2) に含まれています。これらの新機能の詳細は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0)』を参照してください。

3.4.2.2 既知の制限および回避策

Oracle Calendar Web Services リリース 2 (9.0.4.2) の既知の問題は次のとおりです。

- アラームに対するユーザーのデフォルト設定は、イベントの作成時に適用されません。この問題を追跡するために Bug#3210841 が割り当てられました。

3.4.3 Oracle Sync Server

この項の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)
- [デバイス関連の問題](#)

3.4.3.1 新機能

Oracle Sync Server は Oracle Calendar の新しいコンポーネントで、標準の HTTP 接続を使用して、どの SyncML 準拠デバイスともデータを同期させることができます。Sync Server では、Open Mobile Alliance が支援する同期のオープン・スタンダードである SyncML を使用します。SyncML 準拠のデバイスと Oracle Sync Server により、カレンダー・データ、実行することのリスト、連絡先情報、およびその他関連データを、複数のネットワーク、プラットフォーム、デバイス間で同期させることができます。

Oracle Sync Server の新機能は、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.2) に含まれています。これらの新機能の詳細は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0)』を参照してください。

3.4.3.2 既知の制限および回避策

次の表に、Oracle Sync Server の一般的な問題とそれらの回避策を示します。

表 3-5 Oracle Sync Server の既知の問題

Bug#	説明	リリース
2990309	あるデバイスで繰返しイベントの複数のインスタンスを変更してから同期させた場合、最初に変更したインスタンスはサーバーと同期されますが、残りのインスタンスは変更されないままになります。	9.0.4.2
3003919	アドレス帳のエントリからは、いずれのフィールドも削除できません。	9.0.4.2

3.4.3.3 デバイス関連の問題

この項では、次のデバイスで使用する Sync-ML クライアント・ソフトウェアの動作が原因となって Oracle Sync Server で発生する問題について説明します。

注意： この項で説明する問題は、Oracle Sync Server リリース 2 (9.0.4.1) およびリリース 2 (9.0.4.2) に適用されます。ただし、一部のデバイスに対するサポートは、リリース 2 (9.0.4.2) のみに追加されました。新しくサポートされたデバイスの一覧は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0)』を参照してください。

- **Nokia 3650:**
 - Sync-ML クライアントは必ずタスクの期限を割り当てます。サーバー上の期限のないタスクがデバイスと同期させられると、タスクには当日の日付が期限として割り当てられます。この問題を追跡するために Bug#2870062 が割り当てられました。
 - タスクの優先度は、デバイスとサーバーの間で次のようにマップされます。

デバイス	サーバー
高	1
標準	2
低	3 ～ 9、A ～ Z

この問題を追跡するために Bug#2842037 が割り当てられました。

- Oracle Calendar Desktop Client を使用して作成したタスクは、デバイスと同期させることができません。同じ電話データベースを使用してタスクとイベントを同期させるデバイスでは、./Calendar をサーバー URI として使用する必要があります。ただし、タスクとイベントを別々に同期させるデバイスでは、デバイスのイベント・データベースとタスク・データベースの URI としてそれぞれ ./Calendar/Events と ./Calendar/Tasks を使用する必要があります。この問題を追跡するために Bug#2956318 が割り当てられました。
- **Nokia 3650 および 92xx:**
 - サーバー上のエントリのアクセス・レベルに対する変更は、デバイスと同期しません。ただし、新規エントリのアクセス・レベルは、最初はサーバーからデバイスへ正しく同期されます。この問題を追跡するために Bug#2839895 が割り当てられました。
 - 勤務先のアドレスと自宅のアドレスは、Oracle Calendar Desktop Client からデバイスに同期させることができません。この問題を追跡するために Bug#2839242 が割り当てられました。

- サーバーからデバイスに同期させた電子メール・アドレスは予約されます。つまり、電子メール・アドレス 1 は電子メール・アドレス 2 となり、逆も同様です。この問題を追跡するために Bug#2839795 が割り当てられました。
- **Nokia 3650, Nokia 7650, Nokia 92xx, Sony Ericsson T68i:** タスクの「完了」プロパティはサポートされません。サーバー上で完了のマークの付いたタスクは、デバイスでは完了としてマークが付けられません。この問題を追跡するために Bug#2909625 が割り当てられました。
- **Nokia 6820:**
 - 優先順位 4 以下のサーバーのタスクは、「低」ではなく、「標準」優先順位としてデバイスにマップされます。この問題を追跡するために Bug#3461199 が割り当てられました。
 - 「BDAY」を変更した後、同期させると、デバイス障害が発生します。この問題を追跡するために Bug#3461205 が割り当てられました。
- **すべての Nokia 製デバイス, Sony Ericsson P800 および P900:** これらのデバイスでは、タイムゾーンを変更できません。異なるタイムゾーンにわたって旅行している場合、戻るまで同期させないことをお勧めします。ただし、同期が必要な場合は、Oracle Calendar Server 上の自分のアカウントがデバイスと同じタイムゾーンに設定されたままの場合にのみ行ってください。
- **Nokia 92xx**
 - KeepAlive=ON (Collaboration Suite のインストールで設定されているデフォルト値) の場合、Nokia 9290 デバイスとは同期させることができません。この問題を追跡するために Bug#2862018 が割り当てられました。
 - アドレス帳を Nokia 9290 デバイスと同期させると、「会社名」および「部門名」フィールドに無効な文字が挿入されます。この問題を追跡するために Bug#3051312 が割り当てられました。
- **Sony Ericsson P900:** Oracle Sync Server でデバイスを使用する前に、Sony Ericsson P900 にファームウェア R4A06 をインストールする必要があります。
- **Ericsson R520m, T39, T68, Sony Ericsson T68i, T610, T616, Siemens M55, S55:** 出張時には、同期させる前に、デバイスを自分の Calendar アカウントと同じタイムゾーンに設定することをお勧めします。
- **Ericsson R520m, T39, T68, Sony Ericsson T68i, T610, T616:**
 - **リソース名の欠落:** サーバーの attendeesindetails パラメータが short に設定されている場合、イベント詳細のリソース名とステータスはデバイスと同期がとられません。これは、短縮されたリソース名がユーザーにとっては無意味だからです。リソースは、attendeesindetails が full に設定されている場合にのみイベント詳細に追加されます。この問題を追跡するために Bug#2922093 が割り当てられました。

- **電話番号のハイフンの欠落**: デバイスには書式化された電話番号が保存されません。#を除く数字以外の文字は、デバイスに電話番号が保存されるときにすべて削除されます。この問題を追跡するために Bug#2845256 が割り当てられました。
- **電子メール・アドレスの欠落または変更**: デバイスでは 1 つの連絡先に対して 1 つの電子メール・アドレスを保存できるのに対し、サーバーでは 2 つのアドレスを保存できます。連絡先の電子メール・アドレスがデバイス上で変更され、サーバーと同期させると、サーバー上の間違ったアドレスを更新してしまう可能性があります。これは、現時点では、サーバーでどのアドレスを更新する必要があるかを検出する方法がないためです。
- **組織名フィールドの欠落**: デバイスでは 1 つの連絡先に対して 1 つの組織名フィールドを保存できるのに対し、サーバーでは 2 つの組織名フィールドを保存できます。連絡先の組織名フィールドがデバイス上で変更され、サーバーと同期させると、デバイスから同期させたフィールドを優先して、両方のサーバー・フィールドにある情報は破棄されます。
- **連絡先のフルネームが姓になる**: デバイスに連絡先の名前を入力する正しい方法は、Lastname, Firstname です。カンマなしでデバイスに入力、または同期させた名前は、デバイスでは姓のみとして保存されます。この問題を追跡するために Bug#2844373 が割り当てられました。
- **Ericsson T39, T68, R520m**: タスクの同期はサポートされていません。この問題を追跡するために Bug#2909625 が割り当てられました。
- **Ericsson R520m**:
 - Ericsson R520m では、イベント詳細フィールドの文字数が 150 文字に制限されます。150 文字を超える出席者の情報は、詳細フィールドには追加されません。このデバイスには、デフォルトのサーバー・パラメータ AddAttendeesInDetails = short を使用することをお勧めします。この問題を追跡するために Bug#2862247 が割り当てられました。
 - このデバイスを使用して時間指定のないイベントを作成すると、夏時間調整の時間変更により、Oracle Calendar Desktop Client でこのイベントが所要時間 1 分の会議として表示される可能性があります。この問題を追跡するために Bug#2864097 が割り当てられました。
- **Ericsson T68i**:
 - 連絡先の電子メール・アドレスをデバイスで変更し、それに特殊文字が含まれている場合、Oracle Calendar Desktop Client ではアドレスが壊れて表示されます。これは、デバイスが EMAIL vcard プロパティを適切な書式で返さないためです。この問題を追跡するために Bug#2844777 が割り当てられました。

- **Siemens M55、S55:**
 - デバイスで作成されたメモは、サーバーではメモとして同期します。（他のデバイスでは、メモは終日イベントとして同期します。）この問題を追跡するために Bug#2962661 が割り当てられました。
 - デバイスで作成された年次イベントは、サーバーと同期しません。この問題を追跡するために Bug#3470799 が割り当てられました。
 - 連絡先カテゴリは同期しません。この問題を追跡するために Bug#3476387 が割り当てられました。
 - 自宅の FAX 番号は、自宅の電話番号としてデバイスと同期します。この問題を追跡するために Bug#3476497 が割り当てられました。
- **Consilient2 を搭載したすべての Blackberry デバイス:**
 - 定期的な会議のインスタンスがデスクトップ・クライアントまたは Web Client によって削除され、同期が実行された場合、そのインスタンスはデバイスから削除されません。この問題を追跡するために Bug#3434445 が割り当てられました。
 - 新しい会議がデバイスと同期している場合、「開催者:」および「承認済:」フィールドは参加者のデバイスのみに表示され、開催者のデバイスには表示されません。この問題を追跡するために Bug#3377935 が割り当てられました。
 - 件名は含まれているがメモが含まれていない新しい会議がデバイスと同期している場合、「件名」フィールドがデバイスの「メモ」フィールドで重複します。この問題を追跡するために Bug#3377928 が割り当てられました。
 - 終日イベントが、午前 3 時に開始され、24 時間続く定期的なイベントとして Blackberry 6710 デバイスと同期しています。この問題を追跡するために Bug#3377875 が割り当てられました。
 - アクセント付き文字は、デバイスとの同期時に削除されることがあります。この問題を追跡するために Bug#3376236 が割り当てられました。
- **Synthesis SyncML クライアントを使用するデバイス:**
 - カテゴリは、Palm デバイスとは同期しません。この問題を追跡するために Bug#3446621 が割り当てられました。
 - 連絡先は、サーバーから Palm デバイスには同期しますが、Palm デバイスからサーバーには同期しません。この問題を追跡するために Bug#3485688 が割り当てられました。
 - FAX 番号は、「その他」としてサーバーから Palm デバイスには同期しますが、Palm デバイスからサーバーには同期しません。この問題を追跡するために Bug#3485974 が割り当てられました。

- Palm デバイスおよび Oracle Sync Server でサポートされている一部の新しいフィールドは、Synthesis では未サポートのため、同期しません。具体的には、「自宅の住所」、「Web サイト」および「誕生日」が同期しません。この問題を追跡するために Bug#3410091 が割り当てられました。
- 月次イベントおよび年次イベントが同期しません。この問題を追跡するために Bug#3480022、3480037 および 3482934 が割り当てられました。
- PocketPC デバイスと同期している電子メール・アドレスおよび電話番号は、入れ替えることができます。たとえば、電子メール 1 は電子メール 2 に、電話番号 1 は電話番号 2 にでき、その逆も同様です。この問題を追跡するために Bug#3413363 が割り当てられました。

3.5 Oracle Connector for Outlook

この項の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)
- [構成パラメータ](#)

3.5.1 新機能

この項では、Oracle Connector for Outlook リリース 2 (9.0.4.2) の新機能について説明します。

- 不在時アシスタントおよびサーバー側電子メール・ルール。
- メール・サーバー・クォータ利用状況の表示。
- 新しい電子メール、ボイスメールおよびワイヤレスの作業環境。
- 指定期間に 1 つ以上のフォルダから削除された電子メールのリカバリ機能。
- Microsoft Outlook を介した Oracle Web 会議のスケジュールおよび参加。
- 強化された新しいリソース・スケジューリング機能。
- /Lang コマンドライン・スイッチを使用した旧リリースからアップグレードする際の言語選択プロンプト。
- リモート・ノード・ユーザーへの代理アクセスの割当て。

- Calendar Server のための (Calendar および非 Calendar の) ユーザー・ディレクトリ全体へのアクセス。
- Oracle Internet Directory 配信リストに照合して名前を解決する機能。
- 頻繁に実行される Microsoft Outlook 操作を実装するために発行される IMAP4 および Calendar API コマンド数の削減。
- Calendar Server アカウントを自動検出するマスター・ノード構成。
- オンライン作業中に IMAP4 電子メールのローカル・コピーを使用できるローカル・メールボックス・キャッシュ機能。
- フォルダ・カウント・リフレッシュの構成機能。
- メッセージ送信時に、代理名がフォルダ所有者のかわりとして表示されるかどうかを制御する機能。
- 代理がカレンダーに会議を追加したときに、そのカレンダーの所有者に対して自動的に通知する機能。
- 電子メール受信者、会議の開催者および参加者の検索時における、Outlook の高度な検索機能の最適化。
- 追加言語として、デンマーク語、オランダ語、英語、フィンランド語、フランス語、ドイツ語、ギリシャ語、イタリア語、日本語、韓国語、ノルウェー語、ポルトガル語 (ブラジル)、ポルトガル語、スウェーデン語、スペイン語、簡体字中国語、繁体字中国語およびトルコ語のサポート。
- 全員に返信する際に、送信者の電子メール・アドレスが含まれません。
- SMTP サーバーでの最大許容サイズより大きな電子メール・メッセージをユーザーが送信しようとする、警告が発せられ、送信できません。
- Outlook で、サイズの大きな電子メール・メッセージを送信しながら他のタスクを実行できます。
- 非配信レポートに、SMTP サーバーで障害が発生した理由が記録されます。
- Entrust/Express (6.0、6.1 および 6.1 SP 1) のデジタル証明が添付され、S/MIME で暗号化された電子メール・メッセージの送信および読取り機能。

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.2) には、さらに多くの新機能があります。これらの新機能の詳細は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0)』を参照してください。

3.5.2 既知の制限および回避策

この項では、Oracle Connector for Outlook の一般的な問題とそれらの回避策について説明します。

表 3-6 Oracle Connector for Outlook での既知の制限および回避策

Bug#	説明	リリース
3117194	「グループ化」オプションを使用するカスタム・フォルダ・ビューはサポートされません。この問題を回避するには、「グループ化」フィールドを「なし」に設定します。	9.0.4.1
3117097	Outlook クライアント側ルール・ウィザードを使用してユーザーを指定するには、そのユーザーから受信したメッセージに対してルールが起動するように、そのユーザーの表示名と電子メール・アドレスをセミコロンで区切って指定する必要があります。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
2932027	ActiveSync 3.5 を Outlook 2000 と併用して、Pocket Outlook 2002 Inbox を同期させると、項目が未解決になります。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
3505475	連絡先用のサブフォルダは、「Outlook Today - <i>user name</i> 」ツリーの下には作成できません。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
なし	Oracle Email Server など、Simple Authentication and Security Level (SASL) による認証をサポートしていない IMAP4 サーバーを使用する場合、パスワードをクリア・テキストで送信することを避けるために、IMAP4 サーバーへのすべての接続に SSL を強制することをお薦めします。詳細は、使用する電子メール・サーバーのドキュメントを参照してください。SSL による Oracle Connector for Outlook サーバー接続の設定の詳細は、Oracle Connector for Outlook のオンライン・ヘルプを参照してください。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
なし	Oracle Connector for Outlook によって Microsoft Outlook/Exchange のコア機能が変わることはありませんが、次に示す Outlook 機能などはこのリリースではサポートされていません。 - Oracle Connector for Outlook では、電子メール・メッセージの Transport Neutral Encapsulation Format (TNEF)、または Microsoft 電子メール・クライアントによって送信された winmail.dat 添付ファイルはサポートされません。この問題を追跡するために Bug#3117510 が割り当てられました。 - Microsoft POP3 サービス・プロバイダ: Oracle Connector for Outlook は、Microsoft の POP3 サービス・プロバイダと同じプロファイルにインストールできません。	9.0.4.1 および 9.0.4.2

表 3-6 Oracle Connector for Outlook での既知の制限および回避策（続き）

Bug#	説明	リリース
3829123	Oracle Connector for Outlook のオンライン・ヘルプには、ユーザーが会議、終日イベント、およびメモに対して「閲覧権限なし」を選択した場合に、予定表のどの項目が他のカレンダー・ユーザーから見えるかについての説明がありません。ユーザーがこの「アクセス権」オプションを選択すると、代理を除く他のユーザーは、ユーザーの予定表の会議、イベント、あるいはメモを見ることはできません。ユーザーの予定表の項目を見ることができない理由を知りたい場合は、ユーザーからどのアクセス権が付与されているかをチェックすることができます。 回避策： 別のユーザーから付与されたアクセス権をチェックするには、次の手順を実行します。 1. Outlook の「ファイル」メニューから、「開く」→「ほかのユーザーのフォルダ」を選択します。 2. 「共有フォルダ追加」ダイアログ・ボックスで、アクセス権を確認したいユーザーの名前を入力します。 3. 「フォルダ」リストから「カレンダー」を選択し、次に「OK」をクリックします。 4. ユーザーのカレンダー・ウィンドウの「ファイル」メニューから、「フォルダ」→「プロパティ」を選択します。 5. 「概要」タブを選択して、このユーザーによって付与された権限を確認します。	9.0.4.1

3.5.3 構成パラメータ

この項では、\$ORACLE_HOME/ocal/misc/unison.ini の [Outlook_Connector] セクションにある Oracle Connector for Outlook パラメータについて説明します。これらのパラメータは、サーバー側からの Oracle Connector for Outlook の制御に使用され、Calendar Server の管理者がメンテナンスする必要があります。

参加者の注釈の有効化

パラメータ : allow-attendee-annotations

説明 : 参加者が Calendar エントリに個人的な注釈を追加できるようにします。個人的な注釈は、これらの注釈を作成した参加者のみが表示できます。

デフォルト値 : TRUE

許容値 :

- TRUE = 参加者の注釈を有効にします。
- FALSE = 参加者の注釈を無効にします。

Calendar のアイドル・リフレッシュの有効化

パラメータ : **allow-idle-refresh-calendar**

説明 : 「Calendar」フォルダのアイドル・リフレッシュを有効にします。

デフォルト値 : TRUE

許容値 :

- TRUE = アイドル・リフレッシュを有効にします。
- FALSE = アイドル・リフレッシュを無効にします。

連絡先のアイドル・リフレッシュの有効化

パラメータ : **allow-idle-refresh-contacts**

説明 : 「連絡先」フォルダのアイドル・リフレッシュを有効にします。

デフォルト値 : TRUE

許容値 :

- TRUE = アイドル・リフレッシュを有効にします。
- FALSE = アイドル・リフレッシュを無効にします。

履歴のアイドル・リフレッシュの有効化

パラメータ : **allow-idle-refresh-journal**

説明 : 「履歴」フォルダのアイドル・リフレッシュを有効にします。

デフォルト値 : TRUE

許容値 :

- TRUE = アイドル・リフレッシュを有効にします。
- FALSE = アイドル・リフレッシュを無効にします。

メモのアイドル・リフレッシュの有効化

パラメータ : **allow-idle-refresh-notes**

説明 : 「メモ」フォルダのアイドル・リフレッシュを有効にします。

デフォルト値 : TRUE

許容値 :

- TRUE = アイドル・リフレッシュを有効にします。
- FALSE = アイドル・リフレッシュを無効にします。

タスクのアイドル・リフレッシュの有効化

パラメータ : **allow-idle-refresh-tasks**

説明 : 「タスク」フォルダのアイドル・リフレッシュを有効にします。

デフォルト値 : TRUE

許容値 :

- TRUE = アイドル・リフレッシュを有効にします。
- FALSE = アイドル・リフレッシュを無効にします。

バッチ検索の有効化

パラメータ : **batch-mailaddress-lookup**

説明 : 複数のリソースおよびユーザーの情報を、Oracle Connector for Outlook で一度にロードできるようにします。

注意 : このパラメータは、リリース 2 (9.0.4) より前の Oracle Calendar Server にのみ適用されます。

デフォルト値 : TRUE

許容値 :

- TRUE = 一度に複数の検索をできるようにします。
- FALSE = 一度に複数の検索をできないようにします。

代理「返信先」の動作の構成

パラメータ : **delegate-reply-to**

説明 : 代理によって作成されたカレンダー・エントリの参加者からの電子メールの応答を受信するユーザーを設定します。

デフォルト値 : 0

許容値 :

- 0 = 電子メールの応答がエントリの所有者に送信されます。
- 1 = 電子メールの応答が代理に送信されます。
- 2 = 電子メールの応答がエントリの所有者と代理の両方に送信されます。

ディレクトリ API 機能の無効化

パラメータ : **disable-newdirapi**

説明 : ディレクトリ API によって提供される機能 (GAL、グループ解決およびリソース・スケジューラ) を無効にします。

デフォルト値 : FALSE

許容値 :

- TRUE = ディレクトリ API 機能を無効にします。
- FALSE = ディレクトリ API 機能を有効にします。

グループ解決機能の無効化

パラメータ : **disable-groups**

説明 : グループ解決機能を無効にします。

デフォルト値 : FALSE

許容値 :

- TRUE = グループ解決機能を無効にします。
- FALSE = グループ解決機能を有効にします。

過去のカレンダー・データを取得するための時間範囲の設定

パラメータ : **eventselectbegin**

説明 : 過去の日数を設定して、カレンダーのイベント関連データについてサーバーに問い合わせます。

注意 : 「カレンダー」フォルダのオフライン同期が有効になっている場合、同期の時間範囲がこのパラメータの設定より優先されます。

デフォルト値 : 180

許容値 : 1 以上の任意の日数。

将来のカレンダー・データを取得するための時間範囲の設定

パラメータ : **eventselectend**

説明 : 将来の日数を設定して、カレンダーのイベント関連データについてサーバーに問い合わせます。

注意：「カレンダー」フォルダのオフライン同期が有効になっている場合、同期の時間範囲がこのパラメータの設定より優先されます。

デフォルト値：1825（約5年）

許容値：1以上の任意の日数。

過去のメモを取得するための時間範囲の設定

パラメータ：**noteselectbegin**

説明：過去の日数を設定して、メモについてサーバーに問い合わせます。

デフォルト値：0（過去のすべてのメモが取得される）

許容値：任意の日数。

将来のメモを取得するための時間範囲の設定

パラメータ：**noteselectend**

説明：将来の日数を設定して、メモについてサーバーに問い合わせます。

デフォルト値：0（将来のすべてのメモが取得される）

許容値：任意の日数。

過去の履歴項目を取得するための時間範囲の設定

パラメータ：**journalselectbegin**

説明：過去の日数を設定して、履歴項目についてサーバーに問い合わせます。

注意：「履歴」フォルダのオフライン同期が有効になっている場合、同期の時間範囲設定がこのパラメータの設定より優先されます。

デフォルト値：30

許容値：任意の日数。すべての履歴項目を取得するには、この値を0に設定します。

将来の履歴項目の取得のための時間範囲の設定

パラメータ：**journalselectend**

説明：将来の日数を設定して、履歴項目についてサーバーに問い合わせます。

注意：「履歴」フォルダのオフライン同期が有効になっている場合、同期の時間範囲設定がこのパラメータの設定より優先されます。

デフォルト値: 0 (将来のすべての履歴項目が取得される)

許容値: 任意の日数。

グローバル・アドレス・リストのロードの有効化

パラメータ: **load-gal**

説明: Oracle Connector for Outlook で Calendar Server から GAL を取得するかどうかを設定します。

デフォルト値: TRUE

許容値:

- TRUE = Oracle Connector for Outlook で GAL をロードします。
- FALSE = Oracle Connector for Outlook で GAL をロードしません。

グローバル・アドレス・リストのリフレッシュ

パラメータ: **gal-minimal-lifetime-days**

説明: Oracle Connector for Outlook によってグローバル・アドレス・リスト (GAL) がリフレッシュされる頻度を設定します。

デフォルト値: 7

許容値: 任意の日数。0 を指定すると、ユーザーがログオンするたびに GAL がリフレッシュされます。

履歴に対するサポートの有効化

パラメータ: **journaltracking**

説明: Oracle Connector for Outlook 内で Outlook の履歴機能に対するサポートを有効にします。

デフォルト値: TRUE

許容値:

- TRUE = 履歴機能を有効にします。
- FALSE = 履歴機能を無効にします。

複数の添付ファイルのファイル名の構成

パラメータ: **mime-attachment-filename**

説明: Oracle Connector for Outlook を使用して作成したエントリに複数の添付ファイルが含まれる場合に、Oracle Calendar Desktop Client に表示される添付ファイルの名前と拡張子を設定します。

デフォルト値: mime-encoded-attachment.eml

許容値: 任意のファイル名、任意の拡張子

複数日イベントの有効化

パラメータ: **multi-day-event**

説明: ユーザーが 24 時間を超える終日イベントを作成できるようにします。

デフォルト値: TRUE

許容値:

- TRUE = 複数日イベントを作成できます。
- FALSE = 24 時間を超えるイベントは作成できません。そのようなイベントを作成しようとすると、エラー・メッセージが表示されます。

複数日会議の有効化

パラメータ: **multi-day-meeting**

説明: ユーザーが 24 時間を超える会議を作成できるようにします。

デフォルト値: TRUE

許容値:

- TRUE = 複数日会議を作成できます。
- FALSE = 24 時間を超える会議は作成できません。そのような会議を作成しようとすると、エラー・メッセージが表示されます。

サーバーの名前形式の適用

パラメータ: **enforce-name-format**

説明: サーバーの名前形式を適用します。

デフォルト値: FALSE

許容値:

- TRUE = サーバーに設定されている名前形式に基づいて、Oracle Connector for Outlook に名前が表示されます。ユーザーが名前形式を変更することはできません。
- FALSE = ユーザーが名前形式を選択して設定できます。

名前形式の設定

パラメータ : **name-format**

説明 : Oracle Connector for Outlook で使用される名前形式を設定します。この値は、サーバーの名前形式が適用される場合にのみ設定します。

関連資料：[「サーバーの名前形式の適用」](#)

デフォルト値 : なし

許容値 :

- 1 = 名姓
- 2 = 姓、名
- 3 = 姓名

他のユーザーによる履歴項目の参照の有効化

パラメータ : **show-otheruserfolder-journal**

説明 : 他のユーザーの「履歴」フォルダを参照できるようにします。

デフォルト値 : FALSE

許容値 :

- TRUE = 「履歴」フォルダを他のユーザーのフォルダを開くドロップダウン・リストで選択できます。
- FALSE = 「履歴」フォルダを他のユーザーのフォルダを開くドロップダウン・リストで選択できません。

他のユーザーによるメモの参照の有効化

パラメータ : **show-otheruserfolder-sticky**

説明 : 他のユーザーの「メモ」フォルダを参照できるようにします。

デフォルト値 : FALSE

許容値 :

- TRUE = 「メモ」フォルダを他のユーザーのフォルダを開くドロップダウン・リストで選択できます。
- FALSE = 「メモ」フォルダを他のユーザーのフォルダを開くドロップダウン・リストで選択できません。

リッチ・テキスト形式のコメントの保存

パラメータ : **storertf**

説明 : 会議、履歴、メモ、連絡先およびタスクに関するリッチ・テキスト形式のコメントの保存を、Oracle Connector for Outlook でサポートするかどうかを設定します。

デフォルト値 : TRUE

許容値 :

- TRUE = リッチ・テキスト形式のコメントの保存を有効にします。
- FALSE = リッチ・テキスト形式のコメントの保存を無効にします。

3.6 Oracle Calendar Desktop Client

この項では、次の製品に関する情報を提供します。

- [Oracle Calendar Desktop Client for Windows](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Linux](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Solaris](#)

3.6.1 Oracle Calendar Desktop Client for Windows

この項の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)

3.6.1.1 新機能

この項では、Oracle Calendar Desktop Client for Windows リリース 2 (9.0.4.1) の新機能について説明します。

- リモート・リソースへの電子メールをサポートします。
- リモート・グループへのアクセス機能。
- 予定表検索用ユーザー・インタフェースが改選されました。
- 24 時間を超える会議をサポートします。
- リソースごとに競合チェックを実行します。*
- 機能が向上したアドレス帳 : 誕生日や記念日から繰返しのメモのエントリを作成する機能、アドレス帳のエントリの電子メール・アドレスから電子メール・アプリケーションを起動する機能、アドレス帳のエントリの URL からブラウザを起動する機能。

- 16 文字以上のパスワードをサポートします。*
 - リソース・スケジューリングが強化されました。*
 - 「空き時間として表示」機能により、ユーザーは、会議への招待を受ける一方で、他の会議への招待にも応じることができます。*
 - ドイツ語と日本語をサポートします。
- * Oracle Calendar Server リリース 2 (9.0.4) が必要です。

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.2) には、さらに多くの新機能があります。これらの新機能の詳細は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0)』を参照してください。

3.6.1.2 既知の制限および回避策

この項では、Oracle Calendar Desktop Client for Windows の既知の制限とそれらの回避策について説明します。

表 3-7 Oracle Calendar Desktop Client での既知の制限および回避策

Bug#	説明	リリース
なし	日本語版の Oracle Calendar Desktop Client for Windows では、アドレス帳機能がサポートされません。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
3360991	イベント・カレンダーのグループ・ビューを代理として開いた場合、エントリは作成できません。	9.0.4.2
3173797	会議の終了時間を「終了時間」フィールドに入力して変更できないことがあります。 回避策: 上下矢印を使用して終了時間を変更するか、会議の所要時間を変更します。	9.0.4.2
3443027	アドレス帳機能が無効で、オンラインとオフラインでパスワードが異なる場合は、既存のオフライン・ファイルへのダウンロードの試行時にエラーが発生します。 回避策: オンラインとオフラインでパスワードを同じに設定します。	9.0.4.2
2859449	iCalendar ファイルを、Microsoft Outlook などの外部カレンダー製品にインポートしようとする、ファイルの最初のエントリしか正しくインポートされません。この問題を回避するには、予定表のデータを vCalendar 形式でエクスポートまたはインポートします。	9.0.4.1
2836621	一部のプログラムから .vcs ファイルをインポートできないことがあります。	9.0.4.1

3.6.2 Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh

この項の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)

3.6.2.1 新機能

この項では、Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh リリース 2 (9.0.4.1) の新機能について説明します。

- GSSAPI Kerberos をサポートします。
- オフライン・データベースでの暗号化が改善されました。
- メモおよび終日イベントで、詳細および添付ファイルをサポートするようになりました。
- 会議をクリックし、「グループ・ビューを開く」を選択しながら [Ctrl] キーを押すことで、特定の会議に招待された人の予定表が含まれるグループ・ビューが開きます。
- 再設計されたイベント・エディタでは、1つのダイアログ・ボックス内でイベントの作成および編集が迅速にできます。この新しい機能により、会議への日付の追加が1回のクリックでできるようになりました。確認済および未確認の会議の出席者数を表示できます。「定期的な予定」ダイアログも再設計され、定期的な会議の作成プロセスが簡単になりました。
- すべてのユーザー作業環境が、新しい「作業環境」ダイアログにまとめられ、一元的に管理されるようになりました。このダイアログによりユーザーは、予定表の表示、受信トレイの表示、エントリのデフォルト、スケジューリングの選択肢、オフライン設定、アドレス帳の編成、および日付、タイムゾーン、起動の設定を含む一般作業環境の多数の設定に関し、設定可能なすべての作業環境のデフォルト値を変更できます。
- 新しいオンライン・アドレス帳により、1箇所からアドレス帳のすべてのエントリを管理し、連絡先の管理を以前より容易にするカテゴリを作成できます。
- 新しいインストーラにより、ユーザーは容易にアプリケーションをインストールできます。構成前のファイルが、サイレント・インストール用に提供されます。
- 再設計されたツールバー、更新されたデフォルトの配色、再編成されたメニューにより、Oracle Calendar に新しいルック・アンド・フィールが提供されます。
- 任意の配色で、デスクトップや作業環境に応じて、会議の色をカスタマイズします。
- ウィンドウの状態をいつでも保存できるため、Oracle Calendar は選択どおりの状態で開きます。
- イベントの電子メール通知には、件名フィールドにイベントのタイトルが含まれるようになりました。
- 定期的な会議のインスタンスを変更または削除するとき、メール・メッセージには影響を受けるインスタンスのみが表示されます。
- 定期的な会議のインスタンスを変更または削除するとき、デフォルトでは、影響を受けるインスタンスの出席者のみが電子メールで通知されます。
- アラームは、電子メールとワイヤレスを介して使用できるようになりました。
- 24 時間を超える会議をサポートします。

- リソースごとに競合チェックを実行します。*
- 機能が向上したアドレス帳：誕生日や記念日から繰返しのメモのエントリを作成する機能、アドレス帳のエントリの電子メール・アドレスから電子メール・アプリケーションを起動する機能、アドレス帳のエントリの URL からブラウザを起動する機能。
- 16 文字以上のパスワードをサポートします。*
- 「空き時間として表示」機能により、ユーザーは、会議への招待を受ける一方で、他の会議への招待にも応じることができます。*

* Oracle Calendar Server リリース 2 (9.0.4) が必要です。

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.2) には、さらに多くの新機能があります。これらの新機能の詳細は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0)』を参照してください。

3.6.2.2 既知の制限および回避策

この項では、Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh の一般的な問題と、それらの回避策について説明します。

表 3-8 Oracle Calendar Desktop Client での既知の制限および回避策

Bug#	説明	リリース
2864235	特定のユーザーのマスター・ノード・サーバーを構成した後、「ログイン」ダイアログに表示されるユーザー名は、指定したユーザーではなく、前にログインしたユーザーのものです。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
2871974	ユーロ文字を含む有効なパスワードでアプリケーションにログインを試みると失敗します。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
2872763	新規エントリに対するポップアップ通知が機能しません。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
2893976	Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh と他のアプリケーションの前面と背面の位置を入れ替えると、Oracle Calendar のウィンドウが前面に表示されますが、まだバックグラウンドにあるかのようにグレー表示のままです。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
2842273	システムでデフォルトのプリンタが設定されていない場合、「新規グループ」ダイアログの「印刷」をクリックすると、プリンタの設定を行うかどうかを確認するメッセージが表示されます。「キャンセル」をクリックすると、「モジュール:<CST_ManageGroupsDlog.cpp>, ラベル: 125, サービスエラー: 0x31002」という予期せぬエラーが返されます。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
2830426、2879849	アドレス帳のカテゴリが正しく機能しません。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
2874952、2892366	「Duplicate Meeting」機能を使用すると、予期せぬ動作が発生することがあります。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
2884158、2884186	イベント・エディタでは、「すべてに適用」機能がすべての選択に対して正常に機能しないことがあります。	9.0.4.1 および 9.0.4.2

表 3-8 Oracle Calendar Desktop Client での既知の制限および回避策（続き）

Bug#	説明	リリース
2922180	オフライン中に iCal ファイルをインポートできません。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
なし	Oracle Calendar Sync for Palm リリース 2 (9.0.4.2) は、Oracle Calendar desktop client for Macintosh リリース 2 (9.0.4.2) との同期時に使用する必要があります。	9.0.4.2
3406309	イベント・カレンダの代理は、完全にはサポートされていません。	9.0.4.2
3024063	アプリケーションをバックグラウンドで長時間実行すると、予期せぬ動作が発生することがあります。	9.0.4.2
3320119	自動スキャン機能を有効にしている Norton AntiVirus 8 の使用時にオフラインで作業を行うと、予期せぬ動作が発生することがあります。	9.0.4.2
3349358	「一般設定」タブの外部アプリケーション・オプションからメール・アプリケーションを選択する場合、実行可能ファイルは選択できません。	9.0.4.2
3410441	リソース番号は 10 文字に制限されています。	9.0.4.2
3364063	重複する会議の作成時に、競合が検出されたことを示すダイアログ・ボックスは表示されません。	9.0.4.2

3.6.3 Oracle Calendar Desktop Client for Linux

この項の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)

3.6.3.1 新機能

この項では、Oracle Calendar Desktop Client for Linux リリース 2 (9.0.4.1) の新機能について説明します。

- 会議を右クリックし、「グループ・ビューを開く」を選択することで、特定の会議に招待された人の予定表が含まれるグループ・ビューが開きます。
- 受信トレイをいつ表示するかを選択するには、起動の作業環境を使用します。
- 新しいオンライン・アドレス帳により、1 箇所からアドレス帳のすべてのエントリを管理し、連絡先の管理を以前より容易にするカテゴリを作成できるようになりました。
- 確認済および未確認の会議の出席者数を表示します。
- 新しいインストーラにより、ユーザーは容易にアプリケーションをインストールできます。構成前のファイルが、サイレント・インストール用に提供されます。
- 24 時間を超える会議をサポートします。

- リソースごとに競合チェックを実行します。*
- 機能が向上したアドレス帳:誕生日や記念日から繰返しのメモのエントリを作成する機能、アドレス帳のエントリの電子メール・アドレスから電子メール・アプリケーションを起動する機能、アドレス帳のエントリの URL からブラウザを起動する機能。
- 16 文字以上のパスワードをサポートします。*
- リソース・スケジューリングが強化されました。*
- 「空き時間として表示」機能により、ユーザーは、会議への招待を受ける一方で、他の会議への招待にも応じることができます。*

* Oracle Calendar Server リリース 2 (9.0.4) が必要です。

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.2) には、さらに多くの新機能があります。これらの新機能の詳細は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0)』を参照してください。

3.6.3.2 既知の制限および回避策

この項では、Oracle Calendar Desktop Client for Linux の一般的な問題とそれらの回避策について説明します。

表 3-9 Oracle Calendar Desktop Client での既知の制限および回避策

Bug#	説明	リリース
2836729	アドレス帳フォルダの作業環境に加えた変更は、現行セッションでのみ有効です。これらの変更は正しく保存されません。	9.0.4.1
31179497	調整、取消、ダウンロードについてのダイアログ・ボックスからダウンロードを選択すると、オフラインの予定表で加えた変更はすべて消去されます。オフライン中に加えた変更がすべて失われるという警告は表示されません。	9.0.4.1
2847503	iCalendar ファイルをオフラインで正しくインポートできないことがあります。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
なし	1 つの UNIX アカウントから Oracle Calendar の同時コピーを実行しないでください。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
3410449	リソース番号は 10 文字に制限されています。	9.0.4.2
3397537	参加者が許容最大数を超えるイベントを作成しようとすると、操作がサーバーによって拒否されたことを示すエラーが表示され、イベント・エディタが終了します。	9.0.4.2

3.6.4 Oracle Calendar Desktop Client for Solaris

- [新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)

3.6.4.1 新機能

この項では、Oracle Calendar Desktop Client for Solaris リリース 2 (9.0.4.1) の新機能について説明します。

- 会議を右クリックし、「グループ・ビューを開く」を選択することで、特定の会議に招待された人の予定表が含まれるグループ・ビューが開きます。
- 受信トレイをいつ表示するかを選択するには、起動の作業環境を使用します。
- 新しいオンライン・アドレス帳により、1 箇所からアドレス帳のすべてのエントリを管理し、連絡先の管理を以前より容易にするカテゴリを作成できるようになりました。
- 確認済および未確認の会議の出席者数を表示します。
- 新しいインストーラにより、ユーザーは容易にアプリケーションをインストールできます。構成前のファイルが、サイレント・インストール用に提供されます。
- 24 時間を超える会議をサポートします。
- リソースごとに競合チェックを実行します。*
- 機能が向上したアドレス帳：誕生日や記念日から繰返しのメモのエントリを作成する機能、アドレス帳のエントリの電子メール・アドレスから電子メール・アプリケーションを起動する機能、アドレス帳のエントリの URL からブラウザを起動する機能。
- 16 文字以上のパスワードをサポートします。*
- リソース・スケジューリングが強化されました。*
- 「空き時間として表示」機能により、ユーザーは、会議への招待を受ける一方で、他の会議への招待にも応じることができます。*

* Oracle Calendar Server リリース 2 (9.0.4) が必要です。

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.2) には、さらに多くの新機能があります。これらの新機能の詳細は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0)』を参照してください。

3.6.4.2 既知の制限および回避策

この項では、Oracle Calendar Desktop Client for Solaris の一般的な問題とそれらの回避策について説明します。

表 3-10 Oracle Calendar Desktop Client での既知の制限および回避策

Bug#	説明	リリース
2836729	アドレス帳フォルダの作業環境に加えた変更は、現行セッションでのみ有効です。これらの変更は正しく保存されません。	9.0.4.1
31179497	調整、取消、ダウンロードについてのダイアログ・ボックスからダウンロードを選択すると、オフラインの予定表で加えた変更はすべて消去されます。オフライン中に加えた変更がすべて失われるという警告は表示されません。	9.0.4.1
2847503	iCalendar ファイルをオフラインで正しくインポートできないことがあります。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
なし	1 つの UNIX アカウントから Oracle Calendar の同時コピーを実行しないでください。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
3410449	リソース番号は 10 文字に制限されています。	9.0.4.2
3397537	参加者が許容最大数を超えるイベントを作成しようとすると、操作がサーバーによって拒否されたことを示すエラーが表示され、イベント・エディタが終了します。	9.0.4.2

3.7 Oracle Calendar Sync クライアント

この項では、次の製品に関する情報を提供します。

- [Oracle Calendar Sync for Palm for Windows](#)
- [Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh](#)
- [Oracle Calendar Sync for Pocket PC](#)

3.7.1 Oracle Calendar Sync for Palm for Windows

この項の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)

3.7.1.1 新機能

この項では、Oracle Calendar Sync for Palm for Windows リリース 2（9.0.4.1）の新機能について説明します。

- イベントで Oracle Web Conferencing の詳細をサポートします。
- 拒否されたイベントを自分のデバイスと同期させるかどうかを選択できます。
- 連絡先カテゴリの同期またはフィルタリングをサポートします。
- 出席者およびそのステータスとデバイスとの同期をサポートします。
- デバイスから自分の出席ステータスを変更し、それをサーバーと同期させることができます。
- データ型に基づいて、変更による競合発生時に使用するルールを設定できます。
- 個人のイベントに対する定期的ルールのサポートが強化されました。
- ドイツ語と日本語をサポートします。

Oracle Collaboration Suite リリース 2（9.0.4.2）には、さらに多くの新機能があります。これらの新機能の詳細は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1（9.0.4.2.0）』を参照してください。

3.7.1.2 既知の制限および回避策

この項では、Oracle Calendar Sync for Palm for Windows の一般的な問題とそれらの回避策について説明します。

表 3-11 Oracle Calendar Sync for Palm for Windows での既知の制限および回避策

Bug#	説明	リリース
2851814	デスクトップ・クライアントと Palm デバイスで同じ連絡先を変更し、ルール設定がモバイル機器項目を Calendar Server 項目で置換するように設定されている場合、一部のフィールドが正しく同期しないことがあります。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
2842611	デバイスで変更されたメモ、アラームおよびアクセス・レベルは、サーバーと同期しないことがあります。Calendar Server リリース 5.4 を使用している場合、詳細も同期しないことがあります。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
3209769	繰返しエントリの削除されたインスタンスは、同期させることができません。	9.0.4.1 および 9.0.4.2

表 3-12 デバイス関連の問題

Bug#	説明	リリース
2872048	アップグレード時に、レジストリから空の値を読み取ると、InstallShield では、エラーを返さず、無作為の文字を返します。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
2842124	夏時間調整の時間変更にまたがる定期的な会議の場合、正しく同期しないことがあります。時間変更の前または後の一部のインスタンスで、誤った終了時間になることがあります。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
3065498	オペレーティング・システムの地域の設定は、Palm デバイスの言語と一致している必要があります。	9.0.4.1 および 9.0.4.2

3.7.2 Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh

この項の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)

3.7.2.1 新機能

この項では、Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh リリース 2 (9.0.4.1) の新機能について説明します。

- ACE のサポート
- Mac OS X のサポート

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.2) には、さらに多くの新機能があります。これらの新機能の詳細は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0)』を参照してください。

3.7.2.2 既知の制限および回避策

この項では、Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh の一般的な問題とそれらの回避策について説明します。

表 3-13 Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh での既知の制限および回避策

Bug#	説明	リリース
なし	Palm Organizer の繰返しエントリを同期させることはできません。ただし、Calendar Server の繰返しエントリは同期させることができます。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
なし	Hand-held overwrites Macintosh 機能は使用できません。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
なし	Palm Organizer で時間指定のイベントを時間指定のないイベントに変更する場合、あるいはその逆の場合、変更は Calendar アプリケーションには表示されません。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
なし	Oracle Calendar Sync for Palm のみが、英語の同期を完全にサポートします。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
なし	Oracle Calendar Sync for Palm では、重複する名前にある程度一致する名前のリストが表示されません。この問題を回避するには、できるかぎり一意となるユーザー情報（組織単位など）を入力します。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
なし	Palm Organizer では、異なるタイムゾーンがサポートされません。Palm Organizer のタイムゾーンが、Calendar アプリケーションのタイムゾーンと対応していることを確認してください。	9.0.4.1 および 9.0.4.2

3.7.3 Oracle Calendar Sync for Pocket PC

この項の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)

3.7.3.1 新機能

この項では、Oracle Calendar Sync for Pocket PC リリース 2（9.0.4.1）の新機能について説明します。

- イベントで Oracle Web Conferencing の詳細をサポートします。
- 拒否されたイベントを自分のデバイスと同期させるかどうかを選択できます。
- 連絡先カテゴリの同期またはフィルタリングをサポートします。
- 出席者およびそのステータスとデバイスとの同期をサポートします。

- デバイスから自分の出席ステータスを変更し、それをサーバーと同期させることができます。
- データ型に基づいて、変更による競合発生時に使用するルールを設定できます。
- 個人のイベントに対する定期的ルールのサポートが強化されました。
- ドイツ語と日本語をサポートします。

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.2) には、さらに多くの新機能があります。これらの新機能の詳細は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0)』を参照してください。

3.7.3.2 既知の制限および回避策

この項では、Oracle Calendar Sync for Pocket PC の一般的な問題とそれらの回避策について説明します。

表 3-14 Oracle Calendar Sync for Pocket PC での既知の制限および回避策

Bug#	説明	リリース
2851814	デスクトップ・クライアントと Palm デバイスで同じ連絡先を変更し、ルール設定がモバイル機器項目を Calendar Server 項目で置換するように設定されている場合、一部のフィールドが正しく同期しないことがあります。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
2842611	デバイスで変更されたメモ、アラームおよびアクセス・レベルは、サーバーと同期しないことがあります。Calendar Server リリース 5.4 を使用している場合、詳細も同期しないことがあります。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
3209769	繰返しエントリの削除されたインスタンスは、同期させることができません。	9.0.4.1 および 9.0.4.2

表 3-15 デバイス関連の問題

Bug#	説明	リリース
2872048	アップグレード時に、レジストリから空の値を読み取ると、InstallShield では、エラーを返さず、無作為の文字を返します。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
2842124	夏時間調整の時間変更にまたがる定期的な会議の場合、正しく同期しないことがあります。時間変更の前または後の一部のインスタンスで、誤った終了時間になることがあります。	9.0.4.1 および 9.0.4.2
3065498	オペレーティング・システムの地域の設定は、Palm デバイスの言語と一致している必要があります。	9.0.4.1 および 9.0.4.2

3.8 クライアントの共存に関する動作

この項では、Oracle Connector for Outlook と Oracle Calendar Desktop Client の共存の問題について説明します。

- Calendar Desktop Client を使用して、繰り返されているイベントにそのイベントを追加すると、そのイベントが Oracle Connector for Outlook 内で重複します。
- Oracle Connector for Outlook を使用して、取消しを送信せずにエントリを削除すると、そのエントリは拒否されたものとして Calendar Desktop Client に表示されます。

Oracle Email

この章では、Oracle Email 関連の問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [既知の問題](#)
- [既知のバグ](#)
- [ドキュメントの訂正](#)

4.1 新機能

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) の Email 製品は、Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2.3) および Oracle9i Database リリース 2 (9.2.0.3) の使用制限付きライセンスに同梱されています。このメール・ソリューションのすべてのコンポーネントが、パフォーマンスおよび機能向上のためにいくつかの点で強化されました。新機能は次のとおりです。

- 大規模ストアでウィルス感染が疑われるメッセージの隔離のための管理ツール、サード・パーティのアンチウィルス・ナレッジ・ベースによるメール・ストアの自動スキャン、受信および送信メールに対するウィルス・スキャン制御の改善など、ウィルス・スキャンおよび保護が改善されました。
- ユーザーごとのメール・ストアのバックアップおよびリカバリにより、個々のユーザーのメール・フォルダ、プライベート・アドレス帳のエントリ、サーバー側ルールのバックアップおよびリストアが可能になりました。
- ニュース・アーティクル用の Network News Transfer Protocol (NNTP) サーバー。インストール後すぐに利用可能となり、標準クライアントを通じてアクセスおよびポストできます。また、Oracle Email パブリック配信リストのアーカイブにも使用できます。
- 移行ツールは、Novell GroupWise バージョン 6.0、Samsung Contact バージョン 7.1（以前は HP OpenMail）をサポートします。
- Oracle Connector for Outlook のための追加機能は次とおりです。
 - ユーザーが一時的にメールの管理を他人に任せることができるメールの代理管理機能
 - 一般的な不在アシスタントなどのサーバー側の追加ルール
 - メッセージ注釈のサポート
 - 削除したメール・メッセージをすぐにリカバリできる、メールのフラッシュバック・リカバリ

4.2 既知の問題

この項では、Oracle Email の既知の問題について説明します。

4.2.1 Web Client 用の JDK 1.4.2

GB18030（簡体字中国語標準）エンコーディングをサポートするには、Oracle Webmail で JDK 1.4.1 以上を使用する必要があります。

4.2.2 Oracle Email Migration Tool 用の JDK 1.4.1

Oracle Email Migration Tool を使用して IMAP を移行する場合は、IMAP 用の JDK 1.4.1 を使用することをお勧めします。

4.2.3 NNTP サーバーの手動アップグレード

NNTP サーバーのアップグレードでは、手動の手順を実行する必要はありません。

4.2.4 TargetDN 属性

targetdn 属性は、手動でカタログに追加する必要があります。この属性がカタログに追加されていない場合、ユーザーの名前変更操作は失敗します。

回避策：

次のコマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/ldap/bin/catalog.sh -connect infrastructure_connectstr -add -attr  
targetdn
```

4.2.5 Oracle Text

電子メールの本文検索用のテキスト索引は、Oracle Text の BASIC_LEXER によって作成されます。空白で用語を区切る英語および大部分の西欧言語をサポートします。Oracle Text の BASIC_LEXER でサポートされていないその他の言語の場合、電子メールの本文検索は機能しません。

回避策：

1. 次の SQL プロンプトを入力します。

```
SQL> ALTER table es_imt_msgbody ADD (cset VARCHAR2(20) default 'JAAUTO');
```

2. 電子メールの索引付け用レクサーを選択します。

サポートされているレクサーは次のとおりです。

- CHINESE_VGRAM_LEXER
- CHINESE_LEXER
- JAPANESE_VGRAM_LEXER
- JAPANESE_LEXER、KOREAN_LEXER
- KOREAN_MORPH_LEXER

3. データベース・ユーザー es_mail として、既存の索引 es_ot_ix_search ファイルを削除します。これにより以前付けられた電子メールの索引を削除します。

4. 手順 2 で選択したレクサーを使用して、索引 es_ot_ix_search ファイルを再作成します。これにより、以前索引が付けられた電子メールは、すべて新しいレクサーにより索引が付けなおされます。
5. 表領域 esoratext が存在するかどうかを確認します。
6. 次の SQL コマンドをデータベース・ユーザー es_mail として実行し、索引を作成します。

```
@ execute
CTX_DDL.CREATE_PREFERENCE('my_lexer','LEXER_NAME');

Create charset filter preference
@ execute
CTX_DDL.CREATE_PREFERENCE('my_charset_preference','CHARSET_FILTER');
@ execute
CTX_DDL.SET_ATTRIBUTE('my_charset_preference','charset','chosen_charset');
    chosen_char_set : Globalization support name of source character set.

DROP INDEX es_ot_ix_search;

CREATE INDEX es_ot_ix_search ON es_imt_msgbody(text)
    indextype IS ctxsys.context
    parameters ('DATASTORE es_search_dsprep
FILTER          MY_CHARSET_PREFERENCE
SECTION GROUP  es_search_sec_group
STORAGE        oratextstore
LEXER          my_lexer
CHARSET COLUMN cset') ;
```

7. 次のエントリの置換を行います。
 - my_lexer には一意の名前
 - LEXER_NAME には選択したレクサーの名前
 - my_charset_preference には一意の名前
 - chosen_charset にはソース・キャラクタ・セットの名前
 次の制限があります。
 - 索引付けは 1 つのレクサーに制限されます。
 - 索引付けは 1 つのキャラクタ・セットに制限されます。

4.3 既知のバグ

この項では、Oracle Email の既知のバグについて説明します。

4.3.1 Oracle Email 管理

表 4-1 Oracle Email 管理の既知のバグ

Bug#	説明
3919476	ファイル名とタイプは、ATT0001.DAT 添付ファイルでは使用できません。 パラメータ client.mail.attachment.defaultname は、 oc4j.properties ファイルにインクルードされているので、ユーザーは新しいデフォルトのファイル名 UnnamedAttachment.txt を無効にすることができます。
3831808	Oracle Webmail の「フォルダの選択」ドロップダウン・リストに共有フォルダはリストされていません。 回避策： 管理者は、ログイン時、または共有フォルダ・ページにアクセスされた時点で共有フォルダをロードするように構成できます。 共有フォルダのロードを延期するには、次の手順を実行します。 1. <Common-Modules> の module class=RefreshSharedFoldersCache をコメント行にします。 2. 先行する <Transition-Entry name="_:gotosharedfolders"> の行を復帰させます。 3. <Transition-Entry name="folder_ list:gotosharedfolders"> の同じ行をコメント解除します。 ログイン時に共有フォルダのロードを復帰させるには、上記のコメント行についての処理を反対にして実行します。

表 4-1 Oracle Email 管理の既知のバグ（続き）

Bug#	説明
3823909	Oracle Webmail クライアントから電子メールが送信されると、ユーロ記号が疑問符で表示されます。 回避策： Oracle Collaboration Suite Webmail 9.0.4 では、電子メールはデフォルトで ISO-8859-1 キャラクタ・セットを使用して送信されます。このキャラクタ・セットにはユーロ記号が含まれていません。 中間層の \$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_UM/config/oc4j.properties ファイルに、client.message.charset.default プロパティを次のように設定します。 1. 中間層ホストで、\$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_UM/config/oc4j.properties ファイルを開きます。 2. client.message.charset.default プロパティを編集します。UTF-8 など、ユーロ記号を含むキャラクタ・セットを入力します。 3. oc4j.properties ファイルを保存します。 4. 次のように、OC4J_UM を再起動します。 <pre>\$ dcmctl stop -co OC4J_UM -v \$ dcmctl start -co OC4J_UM -v</pre>
3236819	「管理」タブの「ポリシー」ページにある Prevent Service Denial Attack パラメータのパラメータ値のラベルは間違っています。現在 connection(s) というラベルの付いているパラメータ値は、Spam Flood Interval を表します。現在 message(s) というラベルの付いているパラメータ値は、Spam Maximum Flood Count を表します。
3117825	OESCTL コマンドによりメッセージが表示されます。 <pre>oesctl show targets、oesctl startup、oesctl shutdown</pre> の各コマンドを実行すると、次のメッセージが表示されます。 Admin not using default pool このメッセージは無視しても問題ありません。
3029078	Administrator のオンライン・ヘルプがありません。

表 4-1 Oracle Email 管理の既知のバグ（続き）

Bug#	説明
2978639	最初のメール・ストアのメール・ストア構成に失敗した場合、電子メール用に orclguest ユーザーは設定されません。 回避策： 電子メールに orclguest アカウントを設定するには、次のスクリプトを起動します。 <pre>\$ORACLE_HOME/oes/bin/createEmailAccount.sh domain_name</pre> 変数の意味は次のとおりです。 ■ \$ORACLE_HOME は、中間層の Oracle ホームです。 ■ domain_name は、電子メールのドメインです。
2882795	メッセージ配信の最初の試みが失敗し、再試行された場合、メッセージ配信のシステム・ルールが、1 つのメッセージについて複数回起動されることがあります。
2349530	同一のシステムに複数の Email 中間層をインストールできません。
2883242	管理ページから配信リストの同期オプションを有効にすると、objectclass 定義が継承されていても、objectclass 名のリストには groupofuniquenames または groupofnames を明示的に含める必要があります。
4172626	5MB を超えるメール添付は失敗します。 回避策（Oracle Collaboration Suite 9.0.4.2 にのみ適用）： 1. 中間層ホストで、\$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_UM/config/oc4j.properties ファイルを開きます。 2. oracle.mail.client.prefs.maxattachmentsize プロパティを編集します。値をバイト単位で入力します。デフォルトは 5000000 です。 3. oc4j.properties ファイルを保存します。 4. 次のように、OC4J_UM を再起動します。 <pre>\$ dcmctl stop -co OC4J_UM -v \$ dcmctl start -co OC4J_UM -v</pre>

4.3.1.1 HP-UX のみ : Email コンポーネントの問題およびデータベース・リスナー

HP-UX では、外部プロシージャ・エージェントをコールアウトする場合に `extproc32` を使用するよう、データベース・リスナーを構成する必要があります。

この構成を行うには、次の手順を実行します。

1. Information Storage の `listener.ora` ファイルを次のように変更します。
 - a. 次のように、プログラム・パラメータを `extproc` ではなく、`extproc32` に設定します。

```
(program = extproc32)
```
 - b. 次の行を追加します。

```
(ENVS="EXTPROC_DLLS=<ORACLE_HOME>/lib32")
```
2. `SHLIB_PATH` 環境変数を次のように設定します。
 - `SHLIB_PATH` 環境変数を次のように設定します。

```
$ export SHLIB_PATH=$ORACLE_HOME/lib32
```
 - C シェルの場合は、次のように入力します。

```
setenv SHLIB_PATH $ORACLE_HOME/lib32
```
3. リスナーを再起動します。

4.3.2 Oracle Email Migration Tool

表 4-2 に、Oracle Email Migration Tool の既知のバグを示します。

表 4-2 Oracle Email Migration Tool の既知のバグ

Bug#	説明
2598308	索引はヘルプでは使用できません。ヘルプのキーワード検索は不可能です。ヘルプの目次は使用可能です。
2841542	移行ツールにより、ユーザーの移行中に <code>OutOfMemoryException</code> がスローされます。 回避策: 1. <code>migrate.cmd/migrate.sh</code> スクリプトを編集します。 2. <code>Minimum Heap(-Xms)</code> を使用可能な最大ヒープ・サイズに設定します。 3. <code>\$ORACLE_HOME/oes/migration/config</code> ディレクトリの <code>esmigration.config</code> ファイルを編集します。 4. <code>oracle.mail.migration.num_of_threads</code> を低い値に設定します。

表 4-3 Microsoft Exchange プラグインの既知のバグ

Bug#	説明
2775294	移行後、マルチパート・メッセージまたは署名付きメッセージの内容がテキスト形式の添付ファイルとして表示されます。
2775252	MIME タイプがマルチパートまたは混合で、マルチパートまたはダイジェストのメッセージ部分を含むメッセージは、移行されません。
2760551	移行後、マルチパート・メッセージと並列メッセージが破損しています。
2516725	共有フォルダに所有者がない場合、またはそのフォルダのデフォルト権限が定義されていない場合、Microsoft プラグインによって Microsoft Exchange サーバーからは共有フォルダが抽出されません。 回避策: フォルダを Oracle Email に移行する前に、すべてのフォルダに所有者があり、デフォルトの権限が定義されていることを確認します。
2558661	Microsoft プラグインでは、OLE オブジェクトが埋め込まれたメッセージを抽出できません。

表 4-4 Lotus Domino R5 プラグインの既知のバグ

Bug#	説明
2632809	NLS メッセージを伴う MBOX ベースの移行後、Netscape 4.x を使用して一部の添付ファイルを開くことができません。 回避策： Netscape 7.0 または Outlook Express を使用して表示します。
2558661 2827041	埋込みイメージと Notes のリッチ・テキスト形式は Lotus から移行されません（個人間メッセージの場合のみ）。
2775294 2760551	multipart/parallel または multipart/signed のメッセージ・タイプの形式情報が失われます。
2991346	元のキャラクタ・セットが UTF-8 である漢字のメッセージのいくつかは、正しく移行されません。
2926772	メールボックスの抽出中、「No Message File for Product=OES」のメッセージがログに記録されます。

表 4-5 Novell GroupWise プラグインの既知のバグ

Bug#	説明
2938463	通知メール項目がメールボックスから抽出されません。
8469032	受信日のかわりに作成日が抽出されます。
2950698	マルチバイトの添付ファイル名は、正しく移行されません（個人間メッセージ・タイプの場合）。
2801219	GroupWise プラグインでは、韓国語の添付ファイル名が正しく抽出されません。
2794199	HTML の本文部分は、個人間メッセージ・タイプの場合、正しく移行されません。

表 4-6 Samsung プラグインの既知のバグ

Bug#	説明
2950501	非標準のクライアントを使用して構成されたメッセージは、ヘッダーが壊れていることがあります。
2921831 2921810 2921793 2921793 2921763 2921608	移行されたメッセージのいくつかは、Netscape 4.7x では正しく表示されません。 回避策: Netscape 7.0 または Outlook Express を使用してメッセージを表示します。
2850889	移行後のサーバー間メッセージは、Outlook Express で追加の添付ファイルとして表示されます。 回避策: MBOX の生成前に、ソースの Samsung Contact サーバー上の /var/opt/openmail/sys にある general.cfg ファイルで INET_INLINE_FNAME_ALLOWED=FALSE を設定します。 FALSE である場合、すべてのインライン本文部分で、たとえファイル名が存在しても、Content-Disposition 行の filename= がなくなります。

4.3.3 サーバー

次の表に、サーバーの既知のバグの情報を示します。

表 4-7 IMAP サーバーの既知のバグ

Bug#	説明
2990674	IMAP ソート・コマンドが、ワイヤレス・プロファイル・フォルダで正しく機能しません。

表 4-8 リスト・サーバーの既知のバグ

Bug#	説明
2977691	ネストされた外部配信リストの親に送信されたメッセージは、子の外部リスト用には保存されません。
2675017	メールマージ・タグ用に PL/SQL ファンクションによって返されるデータは、そのデータが挿入される電子メールのキャラクタ・セットに変換されません。
2637279	メールリング・リストのメンバーに別名が作成され、そのようなリストにメールマージ・タグ付きの電子メールが送信されると、その別名の受信者に対するメールマージは不正確なものになります。他の通常のユーザーには影響はありません。

表 4-9 NNTP サーバーの既知のバグ

Bug#	説明
2992003	<code>es.nntp.in.clients.total</code> 統計は収集されません。 次の統計は、次の NNTP インバウンド・サーバーおよびアウトバウンド・サーバーでは収集されません。 NNTP_IN <pre>.es.nntp.in.clients.total = 0 .ES_SPS.ctab.usedall = 0 .ES_SPS.socket.currlload = 0 .um.admin.log.discard = 0</pre> NNTP_OUT <pre>.es.nntp.out.threads = 0 .es.nntp.out.traffic.errors = 0 .es.nntp.out.traffic.rejects = 0 .um.admin.log.discard = 0</pre>
3023652	アウトバウンド・サーバーは、NNTP ピアが最初の接続時に 200 応答コードで応答しない場合、コアダンプします。
3028400	ニュースグループやアーカイブ・メッセージのメッセージ自動削除が発生しません。
2988909	スパム対策パラメータ <code>Reject Connections from Host Domain(s)</code> は、NNTP インバウンド・サーバーによって認識されません。
2991982	拒否のために設定された <code>Distribution</code> ヘッダー値を含むアーティクルが受け入れられます。 <code>Distribution</code> ヘッダーを含むメッセージのみが影響を受けます。
2982508	<code>oespr</code> ユーティリティでは、1 つのグループに複数のアウトバウンド・ピアを設定できません。ピア名は、新規の値を付け加えるのではなく、新規の値に置き換えることで、1 つのニュースグループが 1 つのピアに対してのみ供給されます。

表 4-10 ウィルス・スクラバの既知のバグ

Bug#	説明
2990786	外部フィルタ名に空白を含めることはできません。
2988901	ウィルス・スクラバのウィルス・プリスキャン・フィルタは、Oracle Webmail クライアント管理ページを介して適用されると、非アクティブのままになります。 回避策: 1. Oracle Enterprise Manager の「Unified Messaging」ページに移動します。 2. 「Virus Scrubber」→「デフォルト設定」を選択します。 3. 「プリスキャン」パラメータを有効にします。

4.3.4 Oracle Webmail

表 4-11 に、Oracle Webmail の既知のバグを示します。

表 4-11 Oracle Webmail の既知のバグ

Bug#	説明
3032404	Oracle Webmail では、アラビア語のフォルダ名が正しく表示されません。
3118921 3064349 3039842 3034705 302786 3027902	Oracle Webmail では、一部の言語の読み取り中に英語が表示されます。
3118633 2435583	Oracle Webmail でのソートは、ASCII キャラクタ・セットに従って行われます。
3118765 2958984	Oracle Webmail では、特定のキャラクタ・セット・エンコーディング (KO18-U と HZ-GB-22312) の処理時に問題が発生することがあります。
2468357 2468378	Oracle Webmail では、UTF-7 でエンコードされたメッセージの処理時に問題が発生することがあります。
2478206	ユーザー ID にマルチバイト・キャラクタが含まれていると、その Oracle Email ユーザーは Oracle Webmail にログインできません。
2759549	ヨーロッパ言語の文字が正しく表示されません。

表 4-11 Oracle Webmail の既知のバグ（続き）

Bug#	説明
3119310	invite コマンドは、他のリスト・コマンドの後に実行すると機能しません。 回避策： Oracle Webmail にログインした後、他のリスト・コマンドを実行する前に invite コマンドを実行します。invite コマンドより前にリスト・コマンドを実行した場合は、Oracle Webmail からログアウトして、再度ログインします。
3041649	フランス語でランタイム・エラーが発生します。 回避策： - 次のファイルを編集します。 \$MIDTIER_HOME/j2ee/OC4J_UM/applications/UMClientApp/um_client/templates/messge_list.uix - 次の部分を <pre>function validateFolder () { if (gotofolderform.folder.value == "") { alert ('<rawText xmlns:data="http://xmlns.oracle.com/cabo/marlin" data:text="HaveListPrivsImage@mailNLS"/>'); return (false); } else { return (true); } }</pre> 次のように変更します。 <pre>function validateFolder () { if (gotofolderform.folder.value == "") { alert ("<rawText xmlns:data="http://xmlns.oracle.com/cabo/marlin" data:text="HaveListPrivsImage@mailNLS"/>"); return (false); } else { return (true); } }</pre> - OC4J_UM を再起動します。
3027912	中間層が ZH ロケール（簡体字中国語）でインストールされている場合、メッセージ・リスト・ビューにメッセージの日付が表示されません。
3093934	OJMA 暗号化が TRUE に設定されている場合、Oracle Email ポートレットで障害が発生します。
3101018	Linux のみの問題です。 メッセージ・リスト・ページのドロップダウン・リストからフォルダを選択できません。

表 4-11 Oracle Webmail の既知のバグ（続き）

Bug#	説明
3478904	メッセージ・リスト・ビューのアドレス行は短縮されます。 回避策: 製品の管理者は、インストール後、メッセージ・リスト・ビューのアドレスの短縮に対する文字数をカスタマイズできます。 短縮の前に表示される文字数をカスタマイズするには、 \$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_UM/applications/UMClientApp/ um_client/templates ディレクトリにある message_list.uix ページ の次の行を変更します。 <pre><defaulting> <dataObject select="personal:20" data:source="from" /> <dataObject select="address:20" data:source="from" /> </defaulting></pre> personal および address の後の数字は、短縮の前に表示する文字数を示します。前述の例では、最初の 20 文字が表示され、残りの文字は省略記号 (...) で示されます。この数字を編集することによって、表示される文字数を変更できます。 注意: このファイルの変更には、OC4J_UM インスタンスの再起動は必要ありません。

4.4 ドキュメントの訂正

この項では、次のドキュメントにおける問題について説明します。

- [4.4.1 項「Oracle Email 管理者ガイド」](#)
- [4.4.2 項「Oracle Email Migration Tool Guide」](#)
- [4.4.3 項「Oracle Email アプリケーション開発者ガイド」](#)
- [4.4.4 項「Oracle Email Java API Reference」](#)

4.4.1 Oracle Email 管理者ガイド

この項では、『Oracle Email 管理者ガイド』における問題について説明します。

4.4.1.1 デフォルトのスパム対策パラメータ Prevent Service Denial Attack

Prevent Service Denial Attack のパラメータ値は次のとおりです。

- Spam Maximum Flood Count: フラッディングしていると考えられる時間内にホストから送信される、電子メール・メッセージと接続リクエストの合計数（デフォルト値=10000）
- Spam Flood Interval: ホストがスパムを送信しているかどうかを判別するための時間（分単位）。Spam Maximum Flood Count と組み合わせて使用されます。（デフォルト値=10）

関連資料： [表 4-1 「Oracle Email 管理の既知のバグ」](#) の Bug#3236819

4.4.1.2 表 8-5: リスト・サーバーのパラメータ

PL/SQL Timeout のデフォルト値は 10 分です。

4.4.1.3 Webmail クライアントが IMAP で動作しない

9.0.4 版の『Oracle Email 管理者ガイド』では、Oracle Webmail クライアントは IMAP を介して動作するという記述がありますが、これは誤りで、実際は動作しません。（3667553）

4.4.2 Oracle Email Migration Tool Guide

この項では、『Oracle Email Migration Tool Guide』における問題について説明します。

4.4.2.1 第 2 章「Requirements Before Migration」

- Novell GroupWise の移行準備：
Novell Client バージョン 4.81 以上は、移行ツールがインストールされているシステムにインストールする必要があります。
- 移行オプションの選択：
Microsoft Exchange 5.0 および Microsoft Exchange 5.5 では、このリリースからのパブリック・エイリアスの移行はサポートされていません。
- Microsoft Exchange の移行準備
 1. プロファイルを作成します。
 2. Outlook Client が企業 / ワークグループのモードでインストールされているかどうかを確認します。

Outlook Client がインストールされているモードを確認するには、次のようにします。

- Microsoft Outlook を開きます。
- 「ヘルプ」の下「バージョン情報」をクリックします。
 - 企業 / ワークグループのモードである場合は、変更の必要はありません。
 - インターネットのみのモードの場合は、設定を企業 / ワークグループのモードに変更します。
- Microsoft Outlook のモードの設定をインターネットのみから企業 / ワークグループに変更するには、次のようにします。
 1. Microsoft Outlook メニュー・バーの「ツール」をクリックします。
 2. 「オプション」→「メールサービス」→「メールサポートの再設定」を選択します。
 3. ウィザードの指示に従い、「企業 / ワークグループ」を選択します。

注意： 障害がある場合は、Microsoft Outlook 2000 クライアントを明示的に企業モード・オプションでインストールします。

- インストール後：
 1. 「スタート」→「コントロールパネル」→「メール」をクリックします。
 2. 「プロファイル」をクリックします。
 3. 「追加」をクリックします。
 4. 適切な情報を入力します。
 5. 標準 Windows NT アカウント（プロファイル作成に使用）が、Exchange Server システムでサービス管理者または管理者ロールを持っているかどうかを確認します。ロールがない場合は、Microsoft Exchange Administrator プログラムを使用して、その NT ユーザーをサービス管理アカウント・リストに追加します。
 6. 与えた権限を有効にするには、Exchange サービスを停止し、再起動します。
 7. Exchange Administrator プログラムがシステムにインストールされているかどうかを確認します。

4.4.2.2 第3章「Migration Tasks」

- フォルダ名にスラッシュ (/) がある場合、Oracle Email Migration Tool ではこれをアンダースコア (_) に置換し、フォルダ名の前に Renamed_ を付けます。

たとえば、元のフォルダ名が Sales/March の場合、名前は Renamed_Sales_March となります。

- Oracle Email Migration Tool のインストール方法:

\$ORACLE_HOME は Oracle Email Migration Tool が実行されるシステムの任意のディレクトリに設定できます。Oracle がインストールされたディレクトリである必要はありません。

設定された ORACLE_HOME の下に oes/migration ディレクトリを作成します。

- 配信リストの移行

配信リストは、Oracle 上では SMTP 配信リストとしてのみ作成されます。これらの配信リストは、Oracle Webmail クライアント管理ページを使用して、リスト・サーバー・リストに変換できます。

関連資料: SMTP 配信リストおよびリスト・サーバー・リストの詳細は、『Oracle Email 管理者ガイド』を参照してください。

4.4.2.3 付録 C

パスワードが保護される IMAP ベースの移行のために、userlistgen によって users.xml ファイルが生成されます。このファイルは、ユーザーをロードするために移行ツールによって使用されます。

1. userlistgen.sh (Solaris の場合) および userlistgen.cmd (Windows の場合) を \$ORACLE_HOME/oes/migration/bin から実行します。

```
./userlistgen.sh
```

Oracle Email Migration Tool では、標準の入力から次のパラメータを読み取ります。終了するには、[Enter] を 2 回押します。

```
sourceimapuserid=test1 sourceimappasswd=welcome1 targetimapuserid=test1  
targetimapuserpasswd=welcome1 quota=50 sourceimapuserid=.....
```

これが完了すると、users.xml を、Oracle Email Migration Tool の読取り先となる必須ディレクトリにコピーします。

```
./userlistgen.sh file=<name>
```

Oracle Email Migration Tool はファイル (Oracle Email Migration Tool でサポートされた users.xml 形式) を読み取り、出力ファイルが同じディレクトリに、パスワード付きの保護された users.xml ファイル形式で生成されます。

入力ファイルの例は次のとおりです。

```
userlist
user sourceimapuserid="test1" sourceimappasswd="welcome1"
targetimapuserid="test1"
targetimappasswd="welcome1" quota="10" /
/userlist
```

4.4.3 Oracle Email アプリケーション開発者ガイド

この項では、『Oracle Email アプリケーション開発者ガイド』における問題について説明します。

4.4.3.1 第 2 章「Java API リファレンス」

次の項では、Java API リファレンス・ドキュメントについて説明します。

ディレクトリ管理 API: ディレクトリ・コンポーネント

コール元は、どのディレクトリ・コンポーネントにアクセスする前にも、`oracle.mail.OESContext` クラスを使用して、LDAP ディレクトリで認証される必要があります。認証時に、信頼できるセッションを表す `oracle.mail.OESContext` のインスタンスを、すべてのディレクトリ API に渡す必要があります。認証には、中間層の Oracle ホーム・ディレクトリにおける認証と、ユーザー資格証明を提供する認証の 2 つの方法があります。

中間層の Oracle ホームでの認証

この認証モデルでは、アプリケーションを中間層のホストに配置します。

`$ORACLE_HOME/oes/jazn/jazn-data.xml` ファイルを次のように変更する必要があります。ここで、`$ORACLE_HOME` は、中間層のホストの Oracle ホーム・パスです。

1. 元の `$ORACLE_HOME/oes/jazn/jazn-data.xml` ファイルのバックアップをとります。
2. `$ORACLE_HOME/oes/jazn/jazn-data.xml` を開きます。
3. ファイルの最後に移動します。
4. `</jazn-policy>` タグの前に、次の行を追加します。

```
<grant>
  <grantee>
    <codesource>
      <url>file:%JARFILE_NAME%</url>
    </codesource>
  </grantee>
  <permissions>
```

```

    <permission>
      <class>oracle.security.jazn.JAZNPermission</class>
      <name>login</name>
    </permission>
  </permissions>
</grant>

```

変数の意味は次のとおりです。

%JARFILE_NAME% は、アプリケーション .jar ファイルの絶対パスです。

次に、デバッグ・オプションをオフにし、アプリケーションとして認証する例を示します。

```

OESContext oesctx = new OESContext(DirectoryConstants.DS_CALLERTYPE_APP, false);
//Authenticate to the directory
oesctx.authenticate(null, oracle_home); //oracle_home is the oracle home path on
the middle tier host

```

スーパー・ユーザー資格証明を提供する認証

この認証モデルでは、アプリケーションは Oracle Internet Directory スーパー・ユーザー資格証明 (cn=orcladmin または cn=umadmin、cn=EmailServerContainer、cn=Products、cn=OracleContext の資格証明) を提供する必要があります。

次に、デバッグ・オプションをオフにし、スーパー・ユーザー資格証明を渡して、アプリケーションとして認証する例を示します。

```

OESContext oesctx = new OESContext(DirectoryConstants.DS_CALLERTYPE_APP, false);
//Authenticate to the directory
oesctx.authenticate(username, password, ldaphost, ldapport); //username - super
user dn, password - super
user password, ldaphost - OID host name, ldapport - OID port number

```

4.4.3.2 ディレクトリ管理コードの例

これらの例を実行するには、CLASSPATH 環境変数に次のものが含まれている必要があります。

```

jndi.jar, ldap.jar, providerutil.jar, classes12.zip, $ORACLE_
HOME/jlib/repository.jar, $ORACLE_HOME/jlib/esldap.jar, $ORACLE_
HOME/jlib/escommon.jar, $ORACLE_HOME/jlib/ojmisc.jar, $ORACLE_
HOME/j2ee/home/jazn.jar

```

\$ORACLE_HOME/oes/jazn ディレクトリにある jazn-data.xml ファイルを、前述のとおり編集する必要があります。

4.4.4 Oracle Email Java API Reference

この項では、『Oracle Email Java API Reference』における問題について説明します。

4.4.4.1 OracleFolder addACI メソッド

OracleFolder addACI メソッドは、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) で次の ACI をサポートします。

a - administer: 他のユーザーが所有しているフォルダでの ACI の設定と削除を可能にします。

4.4.4.2 単純なメッセージの追加

(3376353) - 『Oracle Email アプリケーション開発者ガイド』の第 2 章「Java API Reference」の「単純なメッセージの追加」にある、Java を使用してメッセージをフォルダに追加するサンプル・コードには誤りがあります。先行する folder.open() への呼び出しがないために、folder.appendMessages() の呼び出しは「Noselect」エラーにより失敗します。

以下のコードは誤りです。

```
// Get record Folder. Create if it does not exist.
Folder folder = store.getFolder("INBOX");
Message msg = new MimeMessage(session);
msg.setFrom(new InternetAddress("oracle@oracle.com"));
msg.setRecipients(Message.RecipientType.TO,
    InternetAddress.parse("testuser1@umdev.us.oracle.com",
false));
msg.setSubject("Welcome!!!");
// collect(in, msg);
msg.setText("Hello welcome\n");
msg.setSentDate(new Date());
```

```
System.out.println("Total Number of messages : " +
folder.getMessageCount());
```

```
Message[] msgs = new Message[1];
msgs[0] = msg;
folder.appendMessages(msgs);
```

次のコードに置き換えてください。

```
// Get record Folder. Create if it does not exist.
Folder folder = store.getFolder("INBOX");
System.out.println("Total Number of messages : " +

    folder.getMessageCount());
// Create a message
```

```

Message msg = new MimeMessage(session);
msg.setFrom(new InternetAddress("oracle@oracle.com"));
    msg.setRecipients(Message.RecipientType.TO,
        InternetAddress.parse("testuser1@umdev.us.oracle.com",
false));
msg.setSubject("Welcome!!!");
msg.setText("Hello welcome\n");
msg.setSentDate(new Date());
// Append the message to the folder
Message[] msgs = new Message[1];
msgs[0] = msg;
folder.open(Folder.READ_WRITE);
folder.appendMessages(msgs);

```

4.4.4.3 電子メールの自動終了 / 削除

(3824231) - この情報は、既存の Oracle Collaboration Suite Mail ドキュメントに対する補足です。一定期間を過ぎたフォルダ内の電子メールを自動的に終了 / 削除する方法が記載されています。

es_folder テーブルには、フォルダごとに days_kept 属性があり、それぞれ es_folder_api.set_folder_expiry() API で変更できます。es_instance ごとに、終了日は actual_date + days_kept の値に設定されます。ガベージ・コレクタは、この設定をチェックし、終了日を過ぎたメールを削除します。これは、ユーザーの作成したフォルダのみが対象になります。システム・フォルダ（ごみ箱など）の場合は、days_kept/expiry は無視されます。

es_folder_api は公開 API ではないため、ドキュメント化されていません。フォルダの終了日は、OCS 10.1.1 の公開 API である mail_folder に記述されます。

9.0.4.2.x で使用したい場合は、folder_id で呼び出し、終了期限をパラメータ（日数）で指定します。この呼び出しの後、このフォルダに入るメッセージにはすべて（メッセージがフォルダにコピーされた日時）+（呼び出し内で渡された終了期限）という形式の終了日が付きます。ハウスキーパー・インスタンスが終了タスクを実行するように設定され、実際に稼働している場合は、終了日が経過した後、メッセージはハウスキーパーによって永久に消去されます。

set_folder_expiry 呼び出しの以前から存在しているメッセージは影響を受けないことに注意してください。同様に、終了期限を変更しても、影響を受けるのは変更した後に着信したメッセージのみです。また、メッセージが別のフォルダに移動された場合、メッセージの終了プロパティは引き継がれません。

例：ユーザー John Doe の Wastebasket というフォルダの終了期限を 7 日に設定するには、次の手順を実行します。

フォルダの folder_id を確認します。たとえば次のようにします。

```
select folder_id from es_folder where folder_name like '%/john.doe/Wastebasket%';
```


次に、終了日を設定します。

```
es_folder_api.set_folder_expiry(<folder_id>, 7);
```

これを行うためには、9.0.4.2 のパッチセットを適用しなければなりません。

4.4.4.4 ログインとフェッチの例で使用されている不正な名前のサンプル

(4309166) - ログインとフェッチの例で消失した可能性のあるデータの例 (PL/SQL の章) で、サンプルの名前が不正です。

「ログインとフェッチ」の例には次のコードが含まれています。

```
mail_folder.set_msg_flags(sessionId, message_list,
                        bit_on(MAIL_MESSAGE.GC_SEEN_FLAG,
                              MAIL_MESSAGE.GC_DELETED_FLAG),
                        true);
--expunge INBOX to remove all the messages we have fetched
mail_folder.expunge_folder(sessionId);
```

このコードには危険性があります。それは、`expunge_folder()` メソッドが INBOX に対して呼び出されているからです。このコードは、「ログインとフェッチ」のサンプルとして扱わないでください。これらの行を削除するか、サンプルを実行する際には十分に注意してください。

Oracle Files

この章では、Oracle Files 関連の問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [認証とシステム要件](#)
- [廃止予定](#)
- [一般的な問題](#)
- [構成の問題](#)
- [Oracle Internet Directory の問題](#)
- [グローバリゼーション・サポートの問題](#)
- [既知のバグ](#)

5.1 新機能

Oracle Files リリース 2 の新機能は次のとおりです。

5.1.1 ワークフロー構成の拡張

Oracle Workflow の言語追加の構成プロセスが簡単になりました。

この機能は Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) で使用可能です。Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.0) をご使用の場合は、この機能を取得するために Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) をダウンロードし、適用します。

5.1.2 ロシア語で使用可能な Oracle Files Web UI と Oracle FileSync クライアント

Oracle Collaboration Suite リリース 2 でサポートされる 9 つの新しい言語に加え、Oracle Files Web ユーザー・インタフェースと Oracle FileSync ユーザー・インタフェースがロシア語に翻訳されています。

この機能は Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) で使用可能です。Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.0) をご使用の場合は、この機能を取得するために Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) をダウンロードし、適用します。

5.1.3 カスタム・ワークフローの作成

Oracle Files には、デフォルトのワークフロー・プロセスが付属しています。さらに、このリリースでは、Oracle Workflow でカスタム・ワークフロー・プロセスを定義し、Oracle Files に登録できるようになりました。カスタム・ワークフロー・プロセスはいくつでも設計し、登録できます。

また、このリリースでの新機能として、ワークフロー・プロセスが承認された際に実行されるアクション（特定の場所へのファイルの移動またはコピー、ファイルのバージョンニング、ファイルの削除など）を定義できます。

関連資料： Oracle Files で使用するためのカスタム・ワークフローの設計および登録方法については、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

5.1.4 Oracle Files User Interface へのブランド情報の追加

一部の組織では、特定の企業ロゴや配色を使用する規定など、ルック・アンド・フィールの基準があります。それらの基準に合うように、Oracle Files の Web インタフェースをカスタマイズできます。

システム管理者は、Oracle Files の Web インタフェースに次のカスタマイズを行うことができます。

- Oracle Files の Web インタフェースの色の変更
- Oracle Files の Web インタフェースのフォントの変更
- 特定の Oracle Files の Web インタフェースのイメージ (Oracle Files のロゴなど) の変更または置換
- Oracle Files の Web インタフェースのタイトル・バーの変更

関連資料： カスタムでのブランド情報の追加の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

5.1.5 システムに障害が発生した後のドメイン・コントローラの信頼性の向上

ドメイン・コントローラは、Oracle Files ドメインの重要コンポーネントです。

Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) では、ドメインは次のような状況では簡単に停止、起動、監視または構成ができませんでした (ただし、ドメインはそのまま実行)。

1. RAC 構成でプライマリ・データベース・リスナーに障害が発生した場合
2. ドメイン・コントローラが稼働しているシステムに障害が発生した場合

最初の問題は、ドメイン・コントローラでデータベース間の通信に派生 JDBC Thin ドライバを使用するドメイン・コントローラが原因でした。この問題の対処法として、registry.xml ファイルでデータベース URL を指定できるようになりました。これは JDBC Thick ドライバ URL の指定に使用でき、これが TAF をサポートします。

2 番目の問題の対処法として、ドメイン・コントローラを別の中間層ホストに移行できるようになりました。

関連資料： ドメイン・コントローラの移行の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

5.1.6 自動ユーザー・プロビジョニング

Oracle Files リリース 1 では、Oracle Internet Directory で作成されたユーザーは、24 時間ごとに Oracle Files で自動的に提供されました。この間隔を短縮するには、一連の手動の手順が必要でした。

現行リリースでは、この間隔が 15 分に短縮されました。さらに、Oracle Internet Directory で作成されたユーザーは、Oracle Files に Web インタフェース経由で初めてログインするときに、自動的に Oracle Files に提供されます。

5.1.7 Oracle Files の追加機能

Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) をダウンロードし、適用すると、次の Oracle Files の新機能が使用可能です。

- ユーザー検索の拡張
- ワークスペースの作成機能の有効化 / 無効化
- Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) のサポート
- OmniPortlet のサポート

これらの機能の詳細は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0)』を参照してください。

5.2 認証とシステム要件

Oracle Files では、次のいずれかのバージョンの Oracle データベースが必要です。

- リリース 2 (9.2.0.4) 以上の Patch Set を適用済の Oracle Collaboration Suite リリース 2 の Information Storage データベース
- Oracle データベース リリース 2 (9.2.0.4) 以上の外部バージョン

また、Oracle Files では、リリース 2 (9.0.2.3) の Oracle9iAS Infrastructure が必要です。

5.2.1 クライアントの認証

次のクライアント・ソフトウェアは、Oracle Files が提供する各種プロトコルのサーバーについてテスト済で、認証されています。これら以上のオペレーション・システムおよびアプリケーション・サービス・パックと、マイナー・リリース番号のリリースはサポートされません。

5.2.1.1 SMB

1. Microsoft Windows NT 4.0 Workstation Service Pack 6a と次のアプリケーション
Microsoft Office 2000 Service Pack 3
 - Microsoft Word 2000
 - Microsoft Excel 2000
 - Microsoft PowerPoint 2000
 - Microsoft FrontPage 2000
2. Microsoft Windows 2000 Professional Service Pack 3 と次のアプリケーション
 - Microsoft Office 2000 Service Pack 3
 - Microsoft Word 2000
 - Microsoft Excel 2000
 - Microsoft PowerPoint 2000
 - Microsoft FrontPage 2000
 - Microsoft Office XP Service Pack 2
 - Microsoft Word 2002
 - Microsoft Excel 2002
 - Microsoft PowerPoint 2002
 - Microsoft FrontPage 2002
 - Microsoft Visio 2000、2002
 - Microsoft Project 2000、2002
 - Adobe Acrobat 5.0
3. Microsoft Windows XP Professional Service Pack 1 と次のアプリケーション
 - Microsoft Office 2000 Service Release 1
 - Microsoft Word 2000
 - Microsoft Excel 2000
 - Microsoft PowerPoint 2000
 - Microsoft FrontPage 2000

- Microsoft Office XP Service Pack 2
 - Microsoft Word 2002
 - Microsoft Excel 2002
 - Microsoft PowerPoint 2002
 - Microsoft FrontPage 2002
- Microsoft Office 2003 Professional
 - Microsoft Word 2003
 - Microsoft Excel 2003
 - Microsoft PowerPoint 2003
 - Microsoft FrontPage 2003
- Microsoft Visio 2000、2002、2003
- Microsoft Project 2000、2002、2003
- Adobe Acrobat 5.0

5.2.1.2 Web ブラウザ（Web ユーザー・インタフェースおよび Enterprise Manager Web Site 用）

1. Microsoft Windows

- Netscape Communicator 7.x
- Microsoft Internet Explorer 5.5 Service Pack 2
- Microsoft Internet Explorer 6.02 Service Pack 1
- Mozilla 1.2.1、1.1

2. Macintosh

- Mac OS 9.1
 - Microsoft Internet Explorer 5.1（動作保証は英語のみ。文書化されている Microsoft Internet Explorer のバグにより、その他の言語では動作保証されていません。）
- Mac OS X version 10.3
 - Microsoft Internet Explorer 5.2（動作保証は英語のみ。文書化されている Microsoft Internet Explorer のバグにより、その他の言語では動作保証されていません。）
 - Netscape Communicator 7.1
 - Mozilla 1.6

3. Linux
 - Netscape Communicator 7.x
 - Mozilla 1.2.1、1.1
4. UNIX
 - Mozilla 1.2.1、1.1

5.2.1.3 FTP クライアント

1. Microsoft Windows
 - OnNet FTP 4.0
 - WS_FTP Pro 7.6
 - Cute FTP Pro 3.0
 - Hummingbird 7.0
2. UNIX
 - コマンドライン FTP の Solaris 2.8、2.9
3. Macintosh OS X.2
 - Transmit 2.5.1

5.2.1.4 AFP

Mac OS X.2 と Microsoft Office Mac X

- Microsoft Word for Mac OS X
- Microsoft Excel for Mac OS X
- Microsoft PowerPoint for Mac OS X

5.2.1.5 NFS クライアント・サポート

1. Microsoft Windows
 - Hummingbird NFS Maestro 6.0 (Windows NT)
 - Hummingbird NFS Maestro 7.0 (Windows NT/2000)
 - OnNet 7.0 (Windows 2000 のみ)

2. UNIX

- Solaris 2.8 および 2.9
- Linux Advanced Server 2.1、Kernel 2.4.9-e.16
- Linux Red Hat 8.0

5.2.1.6 WebDAV: Web フォルダ

1. Microsoft Windows XP Professional Service Pack 1

- Microsoft Office XP Service Pack 2 と、Microsoft Internet Explorer 6.02 Service Pack 1 および MSDAIPP.DLL バージョン 10.145.3914.17
 - Microsoft Word 2002
 - Microsoft Excel 2002
 - Microsoft PowerPoint 2002
 - Microsoft FrontPage 2002
 - Microsoft Visio 2002
 - Microsoft Project 2002
 - Adobe Acrobat 5.0
- Microsoft Office 2000 Service Release 1 と、Microsoft Internet Explorer 6.02 Service Pack 1 および MSDAIPP.DLL バージョン 8.103.5219.0
 - Microsoft Word 2002
 - Microsoft Excel 2002
 - Microsoft PowerPoint 2002
 - Microsoft Visio 2002
 - Microsoft Project 2002
 - Adobe Acrobat 5.0
- Microsoft Office 2003 Professional と、Microsoft Internet Explorer 6.02 Service Pack 1 および MSDAIPP.DLL バージョン 11.0.5510.0
 - Microsoft Word 2003
 - Microsoft Excel 2003
 - Microsoft PowerPoint 2003
 - Microsoft Visio 2003
 - Microsoft Project 2003

2. Microsoft Windows 2000 Professional Service Pack 3

- Microsoft Office XP Service Pack 2 と、Microsoft Internet Explorer 6.02 Service Pack 1 および MSDAIPP.DLL バージョン 10.145.3914.17
 - Microsoft Word 2002
 - Microsoft Excel 2002
 - Microsoft PowerPoint 2002
 - Microsoft FrontPage 2002
 - Microsoft Visio 2002
 - Microsoft Project 2002
 - Adobe Acrobat 5.0
- Microsoft Office 2000 Service Pack 3 と、Microsoft Internet Explorer 5.5 Service Pack 2 および MSDAIPP.DLL バージョン 8.103.3521.0
 - Microsoft Word 2002
 - Microsoft Excel 2002
 - Microsoft PowerPoint 2002
 - Microsoft Visio 2002
 - Microsoft Project 2002
 - Adobe Acrobat 5.0

3. Microsoft Windows NT 4.0 Workstation Service Pack 6a と次のアプリケーション

Microsoft Office 2000 Service Pack 3 と、Microsoft Internet Explorer 5.5 Service Pack 2 および MSDAIPP.DLL バージョン 8.103.3521.0

- Microsoft Word 2002
- Microsoft Excel 2002
- Microsoft PowerPoint 2002
- Microsoft FrontPage 2002

5.2.1.7 WebDAV: Oracle FileSync クライアント

1. Microsoft Windows XP Professional Service Pack 1
2. Microsoft Windows 2000 Professional Service Pack 3
3. Microsoft Windows NT Workstation Service Pack 6
4. Microsoft Windows 98

5.3 廃止予定

AppleTalk Filing Protocol (AFP) は、Oracle Files の将来のリリースでサポート対象外となる予定です。Macintosh ユーザーは、将来のリリースで SMB または WebDAV を使用できます。

5.4 一般的な問題

この項では、Oracle Files を使用する前に知っておく必要がある一般的な操作および管理上の問題について説明します。バグについては、5-16 ページの [5.8 項「既知のバグ」](#) でさらに詳しく説明しています。

5.4.1 ポータル・ページからログアウトしても、Oracle Files からログアウトしない

Oracle9iAS Single Sign-On を使用して、Oracle Files 以外のアプリケーションからログアウトしても、ユーザーは Oracle Files にログインしたままです。たとえば、Oracle Files の Web インタフェースで「[Portal へ戻る](#)」リンクをクリックすると、Oracle Collaboration Suite の Portal ページからはログアウトしますが、Oracle Files にはログインしたままです。

Oracle Files から確実にログアウトするには、Oracle Files の Web インタフェースで「[ログアウト](#)」をクリックします。Oracle Files の Web インタフェースからログアウトすると、Oracle Files およびその他の SSO 対応のアプリケーションの両方からログアウトします。

5.4.2 ワークスペースの作成で発生するエラー

有効な SMTP サーバーが Oracle Files の構成時に指定されていない、あるいはユーザーの電子メール・アドレスが NULL または無効である場合、ワークスペースの作成など、電子メール通知が必要な Oracle Files 操作はすべて失敗します。

サブスクライバ管理者のパスワードは電子メールでサブスクライバ管理者に送信されるため、構成時に有効な SMTP サーバーが指定されていない場合、サブスクライバ管理者は管理タスクをまったく実行できなくなります。たとえば、サブスクライバ管理者は、ユーザー、クォータまたはカテゴリの管理、サブスクライバ設定の指定、あるいはファイルのリストアを行うことができません。

この問題の詳細は、[Bug#2520112](#) を参照してください。

5.4.3 アーカイブのコンテンツの BFILE 記憶域への移動（デフォルト）

「ゴミ箱」から削除されたコンテンツは、アーカイブに移動します。その後、デフォルトで、Oracle Files はアーカイブからすべてのコンテンツを BFILE 記憶域に移動します。

管理者によって、アーカイブ計画を作成し、適切なディスク領域を構成する間、BFILE 記憶域を一時的に使用不可にする場合もあります。BFILE 記憶域を使用不可にするには、次の 2 つのエージェントがノードによって最初に起動されていないことを確認する必要があります。

- FilesArchiveFileToBFileAgentConfiguration
- FilesDelayedArchiveFileToBFileAgentConfiguration

これらのエージェントがノードで起動されないようにするには、Oracle Enterprise Manager Web Site を使用して、これらのエージェントを実行するノードで使用するノード構成を更新します。

関連資料： BFILE およびノード構成の編集の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

5.4.4 Windows XP での Web フォルダのマッピング

Windows XP で Web フォルダ・マッピングを作成するときには、ポート 80 を使用する場合でもポートを明示的に指定する必要があります。たとえば、次のようになります。

`http://foo.acme.com:80/files/content`

ポート番号を指定しない場合、Windows XP ではファイル・システム・リダイレクタが使用されますが、これは Oracle Files WebDAV サーバーでの使用はサポートされていません。

5.4.5 Internet Explorer を使用した HTML ファイルの保存

Internet Explorer を使用して Oracle Files Web UI から HTML ファイルを開き、「ファイル」→「名前を付けて保存」を選択して内容をダウンロードする場合、そのファイルはデフォルトで「Web ページ、完全」というファイルの種類で保存されます。このファイルの種類でファイルを保存すると、Internet Explorer のデフォルトの動作により、HTML ファイル内の相対リンクはすべて絶対リンクとして記述しなおされます。

この動作を望まない場合は、保存する前に「Web ページの保存」ダイアログ・ボックスで別のファイルの種類（「Web ページ、HTML のみ」など）を選択してください。または、「ファイルの参照」ページでファイルを右クリックして「対象をファイルに保存」を選択すれば、この動作は行われません。

5.4.6 ポップアップ・ブロックによって発生する可能性がある Oracle Files UI の問題

ご使用のブラウザにポップアップ・ブロック（Google ツールバーのポップアップ・ブロックなど）をインストールしている場合、Oracle Files の Web インタフェースの一部の機能が妨害される可能性があります。たとえば、「拡張検索」ページの条件を選択できる懐中電灯検索アイコンおよびカレンダー検索アイコンが機能しない場合があります。

このため、ポップアップ・ブロックを使用不可にする必要があります。たとえば、Google のポップアップ・ブロックを使用不可にするには、ツールバーの「Options」をクリックし、「Popup Blocker」の選択を解除して、「OK」をクリックします。

5.4.7 Outlook Express による、マルチバイト・キャラクタを含む Oracle Files の URL の破損

Outlook Express 5.5 または 6.0 を使用している場合、Oracle Files によって送信される電子メール通知に表示される URL にマルチバイト・キャラクタが含まれていると、既知の Microsoft のバグによりその URL は破損します。破損しないようにするには、別の電子メール・クライアントを使用します。

5.4.8 スタンバイ・データベースの制限

現在、ロジカル・スタンバイ・データベースはすべての Oracle データ型をサポートしていないため、Oracle Files はロジカル・スタンバイ・データベースをサポートしていません。障害時リカバリのためにスタンバイ・データベースを使用する必要がある場合は、フィジカル・スタンバイ・データベースを使用します。

5.5 構成の問題

この項では、Oracle Files の構成に関する問題について説明します。

5.5.1 ワークフローの問題

この項では、Oracle Workflow の構成の問題について説明します。

5.5.1.1 カスタム・ワークフローの作成

カスタム・ワークフローを作成するには、Windows NT、Windows 2000 または Windows XP システム上で Oracle Workflow Builder を使用する必要があります。Oracle Workflow Builder は Oracle Technology Network (OTN) からダウンロードできます。

関連資料：

- カスタム・ワークフローの作成方法は、『Oracle Workflow ガイド』を参照してください。
- Oracle Files 固有のカスタム・ワークフローの要件の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

カスタム・ワークフローは作成後、ワークフロー・スキーマにロードすることにより、Oracle Files で使用可能にする必要があります。使用可能にするには、カスタム・ワークフローを .wft ファイルとして保存し、ワークフロー・スキーマが常駐する中間層のシステムにこのファイルをコピーし、wfload を使用して .wft ファイルをロードします。

```
$ORACLE_HOME/bin/wfload -u workflow_schema_name/workflow_schema_password@database_  
URL workflow_file_location/workflow_file_name
```

たとえば、次のようになります。

```
$ORACLE_HOME/bin/wfload -u OWF_MGR/MY_PASSWORD@myhost.us.oracle.com/private  
/oracle/MyCustomWorkflow.wft
```

関連資料： カスタム・ワークフローの Oracle Files への登録の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

5.5.1.2 LDAP パッケージ

外部 Oracle リリース 2 (9.2.0.4) データベースを使用している場合、または Oracle Collaboration Suite の Information Storage データベースをアップグレードした場合、LDAP PL/SQL API のカタログがこのデータベースにロードされていることを確認する必要があります。

カタログの有無を確認するには、データベース層で SYS ユーザーとして、次の SQL*Plus コマンドを実行します。

```
DESC DBMS_LDAP
```

そのようなパッケージが存在しない場合には、データベース層に、\$ORACLE_HOME/rdbms/admin にある catldap.sql スクリプトを SYS ユーザーとして実行します。これにより、データベースにカタログが作成されます。

注意： catldap.sql はデータベースの Oracle ホーム・ディレクトリで実行してください。中間層または Infrastructure の Oracle ホーム・ディレクトリではスクリプトを実行しないでください。

5.5.1.3 複数のインスタンス

同じ Oracle Workflow スキーマを使用して、2 つの異なる Oracle Files ドメインをサポートすることはできません。同じデータベース・インスタンスによって使用されている複数の Oracle Files ドメインがある場合、異なる Oracle Workflow スキーマを（Oracle Files スキーマの場合と同様に）持つ必要があります。

構成中、既存の Oracle Workflow スキーマを再利用することのないように、OWF_MGR のデフォルト値とは異なる Oracle Workflow スキーマ名を選択することもできます。

5.5.1.4 Oracle Workflow へのユーザーの提供

Oracle Internet Directory で新しい Oracle Files ユーザーが作成されたら、次の SQL*Plus コマンドを実行して新規ユーザーを Oracle Workflow に提供します。

```
set serveroutput on size 1000000
declare
    ret_code boolean;
begin
    ret_code := wf_ldap.synch_changes();
    if (ret_code) then
        dbms_output.put_line('WF_LDAP.Synch_Changes successful');
    else
        dbms_output.put_line('WF_LDAP.Synch_Changes failed. Please try again!');
    end if;
exception
    when others then
        dbms_output.put_line('Exception encountered : ' || sqlerrm);
end;
/
```

注意： wf_ldap.synch_changes() を一定の間隔で自動的に実行する DBMS_JOB を作成することをお勧めします。

5.5.2 Oracle Text の問題

既存の Oracle Files ドメインをアップグレードした後、既存の IFS_TEXT 索引を手動で同期化する必要があります。

関連資料： 詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』の付録 A 「Oracle Text のリファレンス」を参照してください。

5.5.3 キャッシュの問題

セキュリティ上の理由から、/files/content の下にあるコンテンツのキャッシュに Oracle9iAS Web Cache は使用できません。

5.6 Oracle Internet Directory の問題

この項では、Oracle Files 固有の Oracle Internet Directory の問題について説明します。

5.6.1 ユーザー・プロビジョニング障害

Oracle Internet Directory で作成されたユーザーが Oracle Files に提供されない、または新規に提供されたユーザーを Oracle Files ワークスペースに追加できないことがあります。

これらの問題が発生した場合、Oracle Internet Directory で必要なユーザー属性を設定していないことが原因と考えられます。次の Oracle Internet Directory ユーザー属性は、すべてのユーザーについて NULL 以外の値を設定する必要があります。

- sn
- givenName
- mail
- username

username 属性は、サブスクライバの Oracle コンテキストで `orclCommonNicknameAttribute` によって指定されます。

関連資料： `orclCommonNicknameAttribute` の表示の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

5.7 グローバリゼーション・サポートの問題

以前は NLS として知られていた Oracle Files グローバリゼーション・サポート関連の問題がいくつかあります。

5.7.1 Internet Explorer でドキュメントにマルチバイトのファイル名を付けて保存する際のエラー

Internet Explorer の「名前を付けて保存」コマンドを使用し、ドキュメントにマルチバイトのファイル名を付けて保存する場合、「Web ページの保存」ダイアログに表示されるファイル名が文字化けします。

この問題を解決するには、Internet Explorer で「常に UTF-8 として URL を送信する」オプションを有効にします。

1. 「ツール」→「インターネット オプション」を選択します。
2. 「詳細設定」タブを選択します。
3. 「常に UTF-8 として URL を送信する」オプションをチェックします。
4. 「OK」をクリックします。

5.7.2 粗い太字フォントまたはイタリック・フォント

日本語、簡体字中国語、繁体字中国語、韓国語の環境で実行するとき、Configuration Assistant で太字とイタリック体のフォントが粗く見え、読みにくくなります。

この問題は JDK の 1.3.1_02b バージョンにおける問題が原因で、JDK 1.3.1_04 に移行することにより解決できます。この問題は Oracle Files の将来のリリースで修正されます。

詳細は、Bug#2377003 および基本的 Bug#2220343 を参照してください。

5.7.3 キャラクタ・セットの制限

Oracle Text では、AL32UTF-8 データベースの中国語、日本語、韓国語のレクサーをサポートしていないため、Oracle Files では、アジア言語用の AL32UTF-8 データベースがサポートされていません。このようなデータベースでは、中国語、日本語および韓国語のドキュメントは、索引が付けられず、検索できません。Unicode ベースのファイル・システムの推奨キャラクタ・セットは UTF-8 です。この問題を追跡するために Bug#2391425 が割り当てられました。

5.8 既知のバグ

次のバグは、このリリースの Oracle Files に存在することが知られているものです。存在する場合には、回避策が記述されています。既知のバグは、次のプロセスまたはコンポーネントごとに表にまとめられています。

- [表 5-1 「構成のバグ」](#)
- [表 5-2 「管理のバグ」](#)
- [表 5-3 「一般的な Oracle Files のバグ」](#)
- [表 5-4 「HTTP/WebDAV のバグ」](#)
- [表 5-5 「NFS のバグ」](#)
- [表 5-6 「AFP のバグ」](#)
- [表 5-7 「Windows/SMB/ 印刷サービスのバグ」](#)
- [表 5-8 「Oracle FileSync のバグ」](#)

表 5-1 構成のバグ

Bug#	説明	処置
2944440	Oracle Workflow では SSL 対応の Oracle Internet Directory が使用されません。 Oracle Files は SSL 対応の Oracle Internet Directory インスタンスで機能しますが、Oracle Workflow は非 SSL ポートでのみ機能します。	Oracle Files が SSL 対応の Oracle Internet Directory ポートで機能するように構成されているかどうかに関係なく、Oracle Workflow は非 SSL の Oracle Internet Directory ポートで機能するように構成する必要があります。
2961091	Oracle Workflow ではアラビア語は使用できません。 このリリースでは、Oracle Workflow にアラビア語が実装されていません。これは Oracle Workflow の制限です。	ありません。
2851941	Oracle Files Configuration Assistant は、ロード・バランシングが行われるマルチノード RAC データベースに対しては実行できません。 マルチノード RAC データベースとロード・バランシングが行われるポートを使用している場合は、Oracle Files Configuration Assistant が機能しません。	RAC 構成時に、ロード・バランシングが行われないデータベース・サーバー・ポートを設定します。次に Oracle Files Configuration Assistant をこのポートに対して実行します。
2960519	同じ中間層で構成および設定された Oracle Files スキーマを再利用すると、エージェントで問題が発生します。 Oracle Files Configuration Assistant を同じ Oracle ホーム・ディレクトリで同じ Oracle Files ドメインおよびスキーマに対して複数回実行すると、次の場合に、ローカル・ノードのエージェントが非アクティブになります。 ■ Oracle Files Configuration Assistant を 2 回目に実行する前に、すでに中間層にノードが存在し、すべてのエージェントがその中で稼働するように設定されている場合。 ■ Oracle Files Configuration Assistant の 2 回目の実行中にエージェントの実行チェックボックスを選択した場合。	アップグレード後プロセスで発生した障害のため Oracle Files Configuration Assistant を再度実行する必要がある場合に、この問題が発生することがあります。 Oracle Files Configuration Assistant の「ノード構成」画面でエージェントの実行チェックボックスを選択しなければ、この問題を回避できます。 Oracle Files Configuration Assistant をすでに複数回実行済でエージェントが非アクティブになってしまっている場合に、この問題を解決するには、Oracle Enterprise Manager Web Site で、対象となるノードのすべてのエージェントを「アクティブ」に設定します。各エージェントを個別にアクティブにする必要があります。

表 5-1 構成のバグ（続き）

Bug#	説明	処置
2520112	ユーザーの電子メール・アドレスに問題がある場合、ワークスペースの作成と同時にエラーが発生します。 有効な SMTP サーバーが指定されていない、またはユーザーの電子メール・アドレスが NULL または無効である場合、電子メール通知が必要な Oracle Files 操作はすべて失敗します。	1. FilesBaseServerConfiguration パラメータで、有効な SMTP サーバーが指定されていることを確認します。 IFS.SERVER.APPLICATION.UIX.SmtperServer 2. ユーザーが NULL でない有効な電子メール・アドレスを持っていることを確認します。
2391425	NLS: IFSCONFIG は、AL32UTF8 データベースの日本語環境では失敗します。 Oracle Text は AL32UTF8 データベースで日本語のレクサーをサポートしていません。したがって、Oracle Files はアジア言語の AL32UTF8 データベースをサポートしません。	AL32UTF8 ではなく UTF8 データベースを使用します。 または、データベースを Oracle Database 10g にアップグレードできます。Oracle Files での Oracle Database 10g のサポートを可能にするために、Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) をダウンロードおよび適用する必要があります。
3124801	Oracle Files リリース 2 のインストール時に、余分なドキュメント・ディレクトリが作成されます。 Oracle Files には次の古いディレクトリが付属しています。 \$ORACLE_HOME/ifs/files/doc/ このディレクトリ内の情報は古いものであり、その使用は想定されていません。	このディレクトリ内のドキュメントを参照しないでください。

表 5-1 構成のバグ（続き）

Bug#	説明	処置
3214142	正規ノードの Java コマンドを変更する必要があります。 Oracle Files の正規ノードの現行の Java コマンドには、次の引数が含まれます。 -XX:+OverrideDefaultLibthread この引数が問題を発生させている可能性があるため削除します。	新しいノード構成では、この引数がデフォルトで表示されないように、Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) をダウンロードおよび適用します。 既存のノード構成からこの引数を削除するには、次の手順を実行します。 1. 任意の中間層システムで Oracle Enterprise Manager Web Site にログインし、「ノード構成」ページに移動します。 2. 各正規ノード構成で、「Java コマンド」プロパティから -XX:+OverrideDefaultLibthread を削除し、「OK」をクリックします。 3. 各正規ノードを再起動します。 関連資料：ノード構成の変更および正規ノードの再起動については、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。
3114881	ヘルプがロシア語に翻訳されていません。 Oracle Files の Web インタフェースはロシア語に翻訳されていますが、翻訳済のヘルプが表示されません。	Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) をダウンロードして適用します。
3016906	Windows 64-bit の Oracle9i Database Server リリース 2 (9.2) に対する Oracle Files の構成が失敗します。 データベースには、スキーマで Oracle Text を有効にするために必要な ctxhx 実行可能ファイルがありません。	次の 2 つの解決方法があります。 1. Oracle Files の構成中に、Oracle Text の確認に失敗したことを示すエラー・メッセージが表示された場合、「OK」をクリックして、Oracle Text を有効にせずにスキーマを作成します。 2. 独自の ctxhx 実行可能ファイルを作成します。詳細に関しては、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

表 5-1 構成のバグ（続き）

Bug#	説明	処置
3313333	Oracle Workflow のヘルプがデフォルトで構成されません。 Oracle Workflow リリース 2.6.2 以下では、ヘルプを手動で構成する必要があります。	最初に、ヘルプ・ファイルを解凍します。 1. <code>\$ORACLE_HOME/wf</code> に移動します。 2. <code>\$ORACLE_HOME/wf</code> ディレクトリに <code>wfdoc262.zip</code> を解凍します。ヘルプ・ファイルが <code>/doc/us</code> ディレクトリに解凍されます。 次に、<code>OA_DOC</code> 仮想ディレクトリを構成します。 1. <code>\$ORACLE_HOME/apache/apache/conf</code> に移動します。 2. 編集するために <code>httpd.conf</code> を開きます。 3. <code>Alias</code> の部分に次の行を追加します。 <code>Alias /OA_DOC/ "\$ORACLE_HOME/wf/doc/"</code> 注意: <code>\$ORACLE_HOME</code> に絶対パスを代入します。 4. Oracle HTTP Server を再起動します。再起動方法については、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。
3130775	アップグレード後、Oracle Files ドメインをクリックすると、空白ページが表示されます。 アップグレードされた Oracle Files ドメイン名のリンクをクリックすると、空白ページが表示されます。	Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) をダウンロードして適用します。または、次の手順を実行することも可能です。 1. <code>\$ORACLE_HOME/ifs/files/lib</code> にある <code>files.jar</code> ファイルを次のディレクトリにコピーします。 <code>\$ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/WEB-INF/lib</code> 2. <code>\$ORACLE_HOME/jlib/</code> にある <code>jevt4.jar</code> ファイルを次のディレクトリにコピーします。 <code>\$ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/WEB-INF/lib/</code> 3. ファイル名を <code>jevt4.jar</code> から <code>jevt.jar</code> に変更します。

表 5-1 構成のバグ（続き）

Bug#	説明	処置
2960325、 2615650	Netscape または Mozilla で、http または https ポートではなく Oracle9iAS Web Cache のポートを使用するための回避策を設定します。 Netscape または Mozilla を使用して、Oracle Files のページにアクセスしようとする、次のエラーが表示される場合があります。 「Oracle SSO Warning - Unable to process request. Either the requested URL was not specified in terms of a fully-qualified host name or OHS single sign-on is incorrectly configured. Please notify your administrator.」 このエラーは、ブラウザでは Web Cache のポート番号を決定できないため発生します。Microsoft Internet Explorer を使用している場合、このエラーは表示されません。	この問題が発生した場合は、パートナ・アプリケーションのリストに Web Cache の URL を明示的に設定します。 1. Web ブラウザを使用して、次の URL に移動します。 <code>http://infra_host:port/pls/orasso/orasso.home</code> 2. orcladmin ユーザーとしてログインします。 3. 「SSO サーバー管理」をクリックします。 4. 「パートナ・アプリケーションの管理」をクリックします。 5. Oracle Files 中間層で鉛筆アイコンをクリックします。 6. 「ホーム URL」、「成功 URL」および「ログアウト URL」に次の URL を指定します。 ホーム URL: <code>http://mid_tier_host:web_cache_port</code> 成功 URL: <code>http://mid_tier_host:web_cache_port/osso_login_success</code> ログアウト URL: <code>http://mid_tier_host:web_cache_port/osso_logout_success</code> 注意: SSL を使用している場合は、Web Cache の SSL ポートを指定し、http に https を代入します。 7. 「適用」、次に「OK」をクリックし、変更を保存します。

表 5-2 管理のバグ

Bug#	説明	処置
2867479	Oracle Files へのアクセス時にユーザー認証が失敗することがあります。 このエラー・メッセージは、複数の Oracle Internet Directory サーバーに対してロード・バランサを使用する構成で発生します。Oracle Internet Directory サーバーに対する中間層で、一定の非アクティブ期間（ロード・バランサでの接続タイムアウト期間と同じ）の後、ユーザーがドメインにログインしようとするときに、エラーが発生します。この問題は、システム上にほとんどユーザーがいない場合に発生する傾向があります。アクティブ・ユーザーが多いほど、問題の発生は少なくなります。これは、中間層と Oracle Internet Directory 間の対話のレベルが自動的に増加し、その結果、中間層と Oracle Internet Directory 間の接続がタイムアウトになることがないためです。	ユーザーは操作を再試行でき、一般にはこれで解決します。または、Oracle Internet Directory サーバーへの接続に使用されるロード・バランサでの接続タイムアウト期間を長くします。
2408925	Oracle Enterprise Manager では、サービス名に無効な文字を入力できます。 名前にセミコロン (;) が入っているサービス構成オブジェクトは、問題の原因になります。	サービス名では ; を使用しないでください。
2746006	Oracle Files スキーマ・パスワードが変更された場合、Oracle Files ドメインを停止できません。 ドメインを起動または停止できるようにするには、Oracle Files のスキーマ・パスワードが必要です。	実行されている Oracle Files インスタンスのスキーマ・パスワードを変更しないでください。
2852809	デフォルト・サブスクライバが LDAP サーバーで変更されたときはいつでも、Oracle Files ドメインを再起動する必要があります。 Oracle Files ドメインの起動後に、Oracle Internet Directory でデフォルト・サブスクライバが変更された場合、新しいデフォルト・サブスクライバでは <code>username@subscribername</code> の書式のユーザー名でユーザーが作成されます。	ドメインを再起動し、Oracle Internet Directory でデフォルト・サブスクライバを変更した後で、古いデフォルト・サブスクライバを Oracle Files から削除します。
2629614	ユーザーの名が Oracle Internet Directory から Oracle Files に同期化されません。 ユーザーが自動プロビジョニングされた際、ユーザーの名が同期化されません。また、OID Synchronization Agent による同期化も行われません。	Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) をダウンロードして適用します。

表 5-3 一般的な Oracle Files のバグ

Bug#	説明	処置
2414889	検索で AFP リソース・フォークが除外されません。 Oracle Files の拡張検索では、AFP リソース・フォークを検索結果に含めることができます。これらのファイルで実行されるアクションは、すべてエラーになります。	検索結果ではこれらのファイルを無視します。
3200325	Oracle Collaboration Suite Search は、Oracle Files コンテンツのユーザー名との完全一致のみをサポートします。 Oracle Collaboration Suite Search for Oracle Files では、指定された値が有効な Oracle Files ユーザーと一致しない場合、「ユーザー名」フィールドのコンテンツは無視されます。	Oracle Files コンテンツを検索する場合は、Oracle Collaboration Suite Search の「ユーザー名」フィールドに正確な値を指定します。ワイルドカードは使用しないでください。
2518871	Oracle Files の Zip 機能で圧縮されたマルチバイト・ファイル名を持つファイルは、UTF8 をサポートするユーティリティを使用して解凍する必要があります。 Oracle Files Web ユーザー・インタフェースの Zip 機能を使用して、マルチバイト・ファイル名を持つファイルまたはファイル・セットを圧縮すると、そのファイルの解凍には WinZip を使用できません。これは、WinZip が UTF8 をサポートしていないためです。	Oracle Files Web ユーザー・インタフェースの Unzip 機能を使用してファイルを解凍するか、JAR ユーティリティを使用してファイルをローカルで解凍します。

表 5-3 一般的な Oracle Files のバグ (続き)

Bug#	説明	処置
3078486	ユーザーのパスワードに記号が含まれている場合、問題が発生する可能性があります。 Oracle Files ユーザーのパスワードに記号 (、%、# など) が含まれている場合、このユーザーは Oracle Files でプロトコル・アクセスを有効にできないことがあります。また、このユーザーは Oracle Files Web UI を使用して SSO パスワードを変更できないことがあります。	この問題を解決するには、次のいずれかの方法を選択します。 方法 1 1. 使用しているサービス構成で、サービス構成プロパティ <code>IFS.SERVICE.CaseSensitive Authentication</code> が <code>FALSE</code> に設定されていることを確認します。 関連資料: サービス構成パラメータの表示および設定の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。 2. 問題のユーザーのいずれかが Oracle Files のインストール前から Oracle Internet Directory に存在していた場合は、Oracle Internet Directory ツールを使用して、そのユーザーのパスワードをリセットします。パスワードは、同じ値にリセットすることも、別の値を選択することも可能です。 方法 2 大 / 小文字の区別のある認証を使用する場合、パスワードに記号を含めることをユーザーに許可しないでください。既存のユーザーのパスワードのうち、記号が含まれているものを Oracle Internet Directory ツールを使用して変更します。
2988862	ユーザー名が数値で始まるユーザーは、Oracle Files Web インタフェースの「マイ・パブリック・ファイル」タブをクリックするとエラーが発生します。 ユーザー名が数値で始まる場合 (123user など)、そのユーザーは Oracle Files Web インタフェースの「マイ・プライベート・ファイル」タブを使用してパブリック・ファイルにアクセスできません。	ユーザー名が数値で始まるユーザーは、別のプロトコル (WebDAV など) を使用して、または Oracle Files Web インタフェースの「すべてのパブリック・ファイル」タブからパブリック・フォルダに移動して、パブリック・ファイルにアクセスできます。 「すべてのパブリック・ファイル」タブを使用して、パブリック・ファイルにアクセスする手順は次のとおりです。 1. 「すべてのパブリック・ファイル」をクリックします。 2. 「ユーザー」をクリックします。 3. ユーザー名の最初の数値に対応するユーザー・フォルダ (たとえば、Users-1) をクリックします。 4. ユーザーのパブリック・フォルダ (たとえば、123user-Public) をクリックします。

表 5-4 HTTP/WebDAV のバグ

Bug#	説明	処置
2393968, 2386806, 2337719	「#」、「%」または「;」付きの URL は機能しません。 このような文字を含む URL は問題の原因になります。	URL では「#」、「%」または「;」を使用しないでください。
2955251	WebDAV cookie-less クライアントでは Oracle Files に接続できません。 複数の Oracle Files 中間層に、ロード・バランス・リクエストに対する Cookie に依存するロード・バランサが介している場合、Cookie を格納しない WebDAV クライアントでは、ロード・バランサを介してその Oracle Files インスタンスにアクセスすることはできません。	ロード・バランシングに Cookie ではなく IP アドレスを使用するように、ロード・バランサを構成します。
2614217	Netscape を介してドキュメントをアップロードすると、Oracle SSO 警告エラーが返されます。 Oracle Collaboration Suite 中間層は、構成時に Oracle HTTP Server ポートを使用して Single Sign-On Server に登録します。Oracle9iAS Web Cache を構成する場合、HTTP サーバー・ポートを登録するのは誤りです。	mod_osso を正しく機能させるには、この中間層の Single Sign-On 登録を手動で修正する必要があります。 関連資料 : Oracle9iAS に影響を与えるホスト名とポートの変更、および mod_osso と Oracle9iAS Single Sign-On Server が受ける影響の詳細は、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
2697262	WebDAV でドラッグアンドドロップ・ダウンロードを行うと、ファイルが 0 バイトになることがあります。 Oracle Files 上の Web フォルダからローカル PC のファイル・システムにファイルをドラッグする際に、Oracle Files 上の別のユーザーによってそのファイルがロックされている場合、0 バイト・ファイルになる可能性があります。これは、MSDAIPP.DLL バージョン 8.103.2402 が原因と考えられます。	Internet Explorer を最新の Service Pack にアップグレードします。 クライアント環境が「 クライアントの認証 」の「 WebDAV: Web フォルダ 」に示すサポートされる構成に準拠していることを確認します。

表 5-4 HTTP/WebDAV のバグ (続き)

Bug#	説明	処置
3006494	異なるユーザー資格証明を使用する Web フォルダ・マッピングを、同じクライアント・システムに複数作成することはできません。 Web フォルダの制限により、Oracle Files は同じ Windows クライアントの異なるユーザーとしての Web フォルダへのログインをサポートしていません。Web フォルダではユーザー資格証明がキャッシュされます。そのため、まず user1 として Web フォルダ・マッピングを作成し、user1 の接続が切断された後に user2 として 2 番目のマッピングを作成すると、user2 は user1 の内容にアクセスできてしまいます。	同じクライアント・システムの異なるユーザー・アカウントを使用する Web フォルダ・マッピングは作成しないでください。 または、Windows クライアントを再起動します。
3225450	Oracle Files が https を使用して実行するように設定されている場合、WebDAV を介して認証することはできません。 https を使用して実行するように Oracle Files を設定している場合は、認証の問題が原因で Web フォルダを使用できません。これは、デフォルトのセキュリティ・チェックが、Basic 認証を使用して認証する機能を無効にしまうためです。	Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) をダウンロードして適用します。 または、次の手順を実行することも可能です。 1. Oracle Enterprise Manager Web Site にログインして「サーバー構成」ページに移動します。 2. 次の DavServer Configuration プロパティを TRUE に設定します。 <code>IFS.SERVER.PROTOCOL.DAV.IfsServer.Auth.CearText.Accept</code> 3. OC4J_ifs_files を再起動してから、各中間層ホスト上の DAV サーバーを再ロードします。 関連資料：サーバー構成パラメータの設定、サーバーの再ロードおよび OC4J インスタンスの再起動の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。
3103878	Oracle Files Web インタフェースで、30 文字を超えるマルチバイト・ファイル名を右クリックし別名保存を選択すると、そのファイル名が壊れます。 これは Microsoft オペレーティング・システムでの既知の問題です。現在、この問題の解決策を検討中です。この問題の解決についての最新情報は、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。	短いファイル名を使用するか、正しいファイル名を手動で入力するか、または Web フォルダを使用します。

表 5-5 NFS のバグ

Bug#	説明	処置
1749601	Oracle Files の NFS で chgrp を実行できません。 chgrp はファイルのモードには何の影響もありません。	ありません。セキュリティ・モデルが異なり、これには影響がありません。
1749621	Oracle Files の NFS で chmod を実行できません。 chmod はファイルのモードには何の影響もありません。	ありません。セキュリティ・モデルが異なり、これには影響がありません。
1750049	モード属性を設定できません。 Oracle Files の NFS を介して、許可モード・ビットを変更できません。	ありません。セキュリティ・モデルが異なり、これには影響がありません。
1749778	Oracle Files の NFS を使用して、リンクを作成できません。 Oracle Files の NFS ではリンク（シンボリック、ソフトまたはハード）を作成できません。	ありません。セキュリティ・モデルが異なり、これには影響がありません。
2333774	非標準の ASCII 文字が名前の最初の文字になっているファイルやフォルダをコピーできません。 最初の文字が非標準の ASCII 文字になっているフォルダとファイルは、NFS Maestro を使用してコピーできません。	他の NFS クライアントを使用してください。この問題は Maestro の制限であると思われます。

表 5-6 AFP のバグ

Bug#	説明	処置
1990453	Oracle Files (AFP ボリュームとしてマウント) でファイルの暗号化に Mac OS Finder を使用すると、ファイル暗号化が失敗します。 Mac OS で「ファイル」→「Encrypt」ユーティリティを選択すると、名前に * を含む一時ファイルが作成されます。ただし、Oracle Files では、アスタリスクを含むファイル名は受け入れられません。	Mac からファイルの暗号化を行わないでください。かわりに、ファイルを Mac 上でローカルに暗号化してから、そのファイルを AFP により Oracle Files にコピーしてください。
2380571	Mac ファイルのサイズは、リソース・フォークのサイズを考慮に入れていません。 リソース・フォークはサイズ計算には含まれないため、ドキュメントのサイズが正確でない可能性があります。	ありません。

表 5-6 AFP のバグ（続き）

Bug#	説明	処置
2994830	Oracle Files Web インタフェースでファイルを非バージョンにすると、ファイルが消えてしまうことがあります。 Oracle Files アプリケーション内のドキュメントは、Web インタフェースを使用してバージョンングできます。Macintosh ユーザーが AFP を使用してログインし、バージョンングされたファイルを含むフォルダを表示した場合、ファイルは見えますが、読取り専用です。ユーザーが Web インタフェースにログインし、このファイルを変更して、ファイルがバージョンングされていないものになると（保存されている全バージョンの削除による）、AFP ユーザーによって表示されるファイルは、Macintosh クライアントのフォルダ・リストから消えることがあります。	Macintosh ユーザーがこの問題を回避するには、ログアウトして、再度 AFP にログインします。 これによりフォルダのリストがリフレッシュされます。
2719007	デフォルトのプロトコル・キャラクタ・セット・ロジックが、グローバルに適用されます。 AFP サーバー・プロトコル（または、コマンド）・エンコーディングは、そのサーバーにグローバルに適用される定数値です。AFP サーバーに接続するどのユーザー・セッションでも同じエンコーディングが使用され、ユーザーごとまたはセッションごとにこのエンコーディングを無効にする方法はありません。異なるエンコーディングを持つ AFP サーバーに接続する必要のある AFP クライアント（Macintosh クライアント）がある場合は、AFP サーバーのエンコーディングを適宜変更しないかぎり、クライアントは接続できません。	異なるエンコーディングを持つ複数のクライアントと一緒に AFP サーバーを使用できるようにするには、複数の AFP サーバーを実行します。これには、複数の中間層システムを使用し、各コンピュータで希望するエンコーディングの AFP サーバーを実行します。AFP サーバーのエンコーディングは、プロパティ <code>IFS.SERVER.PROTOCOL.AFP.Encoding</code> で指定します。
2994813	AllPublic/Users/... でドキュメントを開くこと、またはアップロードすることができません。 Oracle Files アプリケーション用の AFP サーバーでは、Macintosh クライアントをユーザーのホーム・ディレクトリまたは AllPublic ディレクトリに、ネットワーク・ボリュームとしてマウントできます。AllPublic ボリュームには、AllPublic ボリューム内の「ユーザー」フォルダの下ファイルを確実に開くことができず、新規ファイルを「ユーザー」フォルダにアップロードできないという制限があります。ただし、ファイルやフォルダはリストに表示され、ファイルをローカル・ディスクにコピーすることはできます。	ファイルを開くには、まずファイルをローカル・ディスクにコピーしてから開きます。ファイルをアップロードするには、AllPublic ボリュームではなく、ユーザーのホーム・ディレクトリのマウント・ポイント（ボリューム）を使用します。

表 5-6 AFP のバグ (続き)

Bug#	説明	処置
2995643	長い名前を持つ Microsoft PowerPoint ファイルは、直接保存できません。 31 文字を超える長い名前の PowerPoint ファイルは、AFP を使用して保存しようとすると、名前が短縮された形で表示されます。たとえば、次のようになります。 <code>long_long_long_long_lo?5A0B.ppt</code> ユーザーは、PowerPoint ファイルを開き、他のファイルと同様に、ローカル・ハード・ディスクにコピーできます。ただし、PowerPoint でファイルを開くと、ファイルを変更し、「保存」コマンドを発行した場合、「Error accessing file filename」というエラーが表示されます。変更は保存されず、開かれた元のファイルは削除されます（「ゴミ箱」に移動され、PowerPoint Temp 0 のような名前に変更されます）。	変更を保存し、ファイルを保持するには、メニューまたはツールバーから選択するか、ファイルを閉じるときに表示されるダイアログ・ボックスで「はい」をクリックして、「新規保存」コマンドを発行します。保存したファイルに異なる名前を選択します。このようにすると、新しいファイルは正しく保存されます。
2463376	ファインダによるフォルダのリストのリフレッシュが行われません。 ファイルを追加、削除または変更することで、フォルダの中身が更新された場合、AFP ファインダでは、そのフォルダのリストをリフレッシュしません。	この問題を回避するには、ログアウトしてから再びログインします。

表 5-7 Windows/SMB/ 印刷サービスのバグ

Bug#	説明	処置
1113581	SMB でバージョンングされたファイルの削除または名前変更ができません。 SMB でバージョンングされたファイルを削除または名前を変更しようとすると、そのファイルのすべてまたは一部がロックされている可能性があることを示すエラー・メッセージが表示されます。Microsoft Word および Microsoft Excel などの一部のアプリケーションでは、旧バージョンのドキュメントを削除することで作業を保存します。これによりデータ属性が失われ、Oracle Files のバージョンング機能が損なわれるため、Oracle Files SMB サーバーではバージョンングされたファイルの削除または名前変更ができません。	ファイルを削除するには、Web インタフェースを使用します。

表 5-7 Windows/SMB/ 印刷サービスのバグ（続き）

Bug#	説明	処置
2472522	Windows で複数のプリント・ジョブが生成されます。 Windows の一部のバージョンでは、ユーザーが 1 つのドキュメントの印刷を要求した場合に、Oracle Files で複数のプリント・ジョブが作成されます。これら余分なプリント・ジョブには中身がなく、実際に用紙に印刷されることはありません。ただし、しばらくの間キューの中に表示されます。それでも正しいドキュメントは印刷されます。	ありません。
2344972	ユーザー名とパスワードで制限されているプリンタには出力できません。 Windows NT/2000 からプリンタに接続したとき、ユーザーはユーザー名とパスワードの入力を要求されません。共有がユーザー名とパスワードによって制限されている場合、ユーザーは印刷できません。	次のいずれかの手順を実行します。 1. プリンタをマウントする前に、ネットワーク・ドライブを同じサーバー上のファイル共有にマップします。ユーザーがユーザー名とパスワードを要求されたら、その後プリンタへのアクセスに使用するユーザー名とパスワードを入力します。 2. プリンタをマウントする前に、DOS プロンプトを開き、次のように入力します。 <pre>> net use \\server_name\printer_name password /USER:user_name</pre>次に、プリンタ共有のために同じ名前を使用して、プリンタをマウントします。
2424896	印刷を有効にするためのサーバー・プロパティが、SMB サーバー構成に表示されません。 SMB を介した印刷を有効にするには、Oracle Files の管理者が、プリンタの共有を明確に有効にするプロパティを設定する必要があります。このプロパティは、SMP サーバー構成プロパティの 1 つとして自動的に表示されません。	Oracle Files の管理者は、手動で IFS.SERVER.PROTOCOL.SMB.EnablePrinting プロパティを追加し、その値を TRUE に設定する必要があります。

表 5-7 Windows/SMB/ 印刷サービスのバグ（続き）

Bug#	説明	処置
2890902	SMB を使用してフォルダ間でコピーすると、ファイルのメタデータが失われます。 Oracle Files SMB サーバーにマップされたネットワーク・ドライブを使用して、Windows からファイルをコピーすると、ファイルの中身のみがコピーされ、カテゴリなどの Oracle Files メタデータはコピーされません。これは Windows オペレーション・システムの制限です。Windows オペレーション・システムでは Oracle Files メタデータが処理されず、そのためファイルをコピーしたときにこのメタデータがコピーされません。 場合によっては、Windows エクスプローラでのファイルの切り取りおよび貼り付けで、ファイルがコピーではなく、移動されることがあります。Oracle Files のメタデータは、ファイルの移動が実行された場合は保持されます。	メタデータを持つファイルをコピーするには、Oracle Files の Web インタフェースを使用します。Oracle Files の Web インタフェースを使用してファイルをコピーすると、ファイルのメタデータが保持されます。
2995548	ユーザーは、印刷後に手動で空白のジョブを取り消す必要がある場合があります。 一部の Windows クライアントでは、ユーザーが Oracle Files 印刷サービスに印刷する場合、実際のプリント・ジョブの前に、空白のプリント・ジョブが追加されることがあります。これらのジョブは、キューにスタックされる可能性があります。	ドキュメントが印刷されない場合は、プリンタ・アイコンをダブルクリックし、手動で空白のプリント・ジョブを取り消します。
3020371	Hummingbird NFS クライアントでは、SMB マウント・ポイントをリストに表示できません。 Hummingbird NFS クライアントがインストールされたシステムでは、NFS と SMB の両方をサポートするサーバーへの接続を命令された場合、NFS の使用を試みます。ユーザーが「スタート」→「ファイル名を指定して実行」をクリックして、\\server_name を入力すると、Hummingbird NFS クライアントでは、開いたウィンドウに NFS マウント・ポイントが表示されます。SMB マウント・ポイントとプリンタは表示されません。	この問題にはいくつかの回避策が考えられます。 1. 「ネットワーク ドライブの割り当て」ダイアログまたはプリンタの追加ウィザードを使用して、SMP マウント・ポイントおよびプリンタを直接マウントします。 2. SMB サーバーを実行しているシステム上の NFS サーバーを無効にします。 3. サーバー上の SMB マウント・ポイントを表示する必要のあるシステムで、Hummingbird NFS クライアントを削除します。

表 5-7 Windows/SMB/ 印刷サービスのバグ（続き）

Bug#	説明	処置
3008391	ユーザーは、プリンタの追加ウィザードを介してプリンタを追加できないことがあります。 ユーザーが Windows クライアントからプリンタの追加ウィザードを介してプリンタを追加すると、「プリンタが見つかりませんでした」というエラーが表示されます。	プリンタの追加に、プリンタの追加ウィザードを使用しないでください。かわりに、「スタート」→「ファイル名を指定して実行」をクリックします。次に、\\server_name と入力して、[Enter] を押します。 表示されたウィンドウで、追加するプリンタをダブルクリックします。
3027080	DOS 8.3 ファイル名を使用するプログラムは、ロング・ファイル名では機能しません。 DOS 8.3 ファイル名を使用するプログラムは、SMB サーバーに対して機能しません。これは SMB サーバーで、ロング・ファイル名の DOS8.3 形式のショート・ファイル名への変換がサポートされていないためです。このようなプログラムの例としては、DOS 編集、Windows イメージ・アクセサリ、Windows ペイント・アクセサリがあります。これらのプログラムでは、DOS 8.3 形式でのファイル名が必要です。パス内の各ディレクトリ名も、8.3 形式であることが必要です。	ファイル名を DOS 8.3 形式の名前に変更します。必要な場合は、ファイルを別のディレクトリに移動し、パス内にロング・ファイル名のディレクトリが含まれないようにします。
3027564	PowerPoint ファイルの編集時に、変更された日付が Windows NT 上で更新されないことがあります。 Windows NT 上で Microsoft PowerPoint ファイルを編集する際、ファイルの変更された日付がファイルの保存時に更新されないことがあります。	現行の Windows NT Service Pack がインストールされていることを確認してください。問題が解消されない場合、ファイルをローカル・ドライブに保存し、SMB マップ・ドライブにコピーします。
3108043	完全な SMB ログ情報を参照するには、LogAllCommands サーバー構成パラメータを手動で追加し、TRUE に設定する必要があります。 SMB サーバーには、ログ・ファイルに追加情報を記録するための構成パラメータがあります。この情報（実行されている SMB サーバー・コマンド）を使用すると、SMB サーバーの問題をデバッグできます。	Oracle Enterprise Manager Web Site を使用して、IFS.SERVER.PROTOCOL.SMB.LogAllCommands パラメータを SmbServerConfiguration に追加します。ログ・ファイル内の SMB コマンドを参照するには、値を TRUE に設定します。 関連資料：サーバー構成パラメータの追加の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

表 5-8 Oracle FileSync のバグ

Bug#	説明	処置
2374879	名前にパーセント（%）文字があるサーバー側のフォルダは、同期しません。 名前に % の文字が入っているフォルダおよびファイルは、同期プロセス時に同期しません。	Oracle FileSync を使用してファイル同期を行う場合は、フォルダ名に % を使用しないでください。
3037418、 3436884	Oracle FileSync のインストール言語の一覧に、使用可能なアラビア語またはルーマニア語がありません。 Oracle FileSync は、アラビア語またはルーマニア語を使用するシステムにインストールでき、これらの言語を使用するシステムで動作します。ただし、インストール処理では、アラビア語またはルーマニア語は表示されません。	他の言語で Oracle FileSync をインストールした後で、ロケールをアラビア語またはルーマニア語に切り替えます。 注意： ルーマニア語は、Oracle Collaboration Suite リリース 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0) をダウンロードして適用するまで、Oracle FileSync では使用できません。

Oracle Ultra Search

この章では、Oracle Ultra Search 関連の問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [Ultra Search の「ようこそ」ページ](#)
- [デフォルトの Ultra Search インスタンス](#)
- [ドキュメント検索オプションの制限](#)
- [Complete Sample Query Application の翻訳](#)
- [動的ページ索引付けの制御](#)
- [Cookie のサポート](#)
- [クローラ・キャッシュ削除の制御](#)
- [INSO フィルタ使用環境の設定](#)
- [既知のバグ](#)

6.1 新機能

Oracle Ultra Search は、Oracle Collaboration Suite に付属する高水準の検索コンポーネントです。Oracle Ultra Search を使用すると、他の Oracle Collaboration Suite コンポーネント、企業の Web サーバー、データベース、メール・サーバー、ファイル・サーバーおよび Oracle9iAS Portal インスタンス全体を検索できます。Oracle Ultra Search では、ユーザーが提供する情報を使用して、企業内の情報の様々な異種リポジトリ内をクロールし、ユーザーが指定した検索条件に一致するドキュメントを検索します。Oracle Ultra Search は、150 を超える固有のドキュメント・タイプを検索します。

このリリースの Ultra Search には、次の機能があります。

- 日付範囲や LOV などの新しい属性タイプをサポート
- 改善された問合せ API と、JSP タグの新規サポート
- ポータル・インスタンスの固有クロール機能である Oracle9iAS Portal との統合
- Ultra Search クローラをデータ・ソースの索引付けおよび検索に適応させる Java API、クローラ拡張 API
- 検索結果のランク付けを調整する検索オプション
- Web 画面にデータベース・クロールの結果を表示する表示 URL サポート

関連資料：『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』

6.2 Ultra Search の「ようこそ」ページ

Ultra Search の「ようこそ」ページは、次の場所に変わりました。

`http://host:port/ultrasearch/welcome/`

以前のリリースでは、次の場所にありました。

`http://host:port/ultrasearch/`

6.3 デフォルトの Ultra Search インスタンス

Ultra Search インストーラにより、デフォルトの Ultra Search テスト・ユーザーに基づいてデフォルト Ultra Search インスタンスが作成されるため、ユーザーはインストール後にデフォルト・インスタンスに基づいて Ultra Search の機能をテストできます。

デフォルト・インスタンス名は WK_INST です。これはデータベース・ユーザー WK_TEST に基づいて作成されます。つまり、WK_TEST は、WK_INST のインスタンス管理者です。デフォルトのユーザー・パスワードは WK_TEST です。

セキュリティ上、WK_TEST はインストール後にロックされます。DBA ロールとしてデータベースにログインし、このユーザーのロックを解除してから、パスワードを変更する必要があります。(パスワードは、インストール後に失効します。) データベースでパスワードを変更した後、管理ツールの「**インスタンスの編集**」ページを使用して、キャッシュされたスキーマ・パスワードを必ず更新してください。

デフォルト・インスタンスは、Ultra Search のサンプル・アプリケーションでも使用されます。data-sources.xml ファイルを、『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』の「中間層コンポーネントの設定」で説明されているとおりに更新する必要があります。

6.4 ドキュメント検索オプションの制限

検索結果を無効にし、ドキュメントの検索オプションにより、問合せ結果リストでドキュメントをランク付けする順序に影響を与えることができます。これにより、重要なドキュメントをより高いスコアにし、それらを見つけやすくなります。

検索オプションには、次の制限があります。

ユーザーの問合せと検索オプションによる問合せの比較では、正確な文字列一致が使用されます。つまり、比較は大 / 小文字を区別し、空白の有無を認識します。したがって、「Ultra Search」に対して高いスコアの付いたドキュメントは、ユーザーが「ultrashow」と入力してもスコアは高くなりません。

検索オプションでは、問合せアプリケーションが、Query API getResult() メソッド・コールで検索用語を渡す必要があります。サンプル・アプリケーションは、基本の検索用語を追加用語として渡すように設計されています。検索属性に基づく拡張検索条件は無視されます。

6.5 Complete Sample Query Application の翻訳

Ultra Search Complete Sample Query Application は、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) でサポートされているのと同じ言語に翻訳されています。

関連資料： 言語の一覧は、『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』を参照してください。

6.6 動的ページ索引付けの制御

Web データ・ソースの場合、動的ページに索引を付けるか、付けないかを指定する新しいオプションがあります。デフォルト値は「はい」で、動的 URL がクロールされ、索引が付けられます。

このオプションですでにクロールされたデータ・ソースの場合、「動的ページの索引付け」を「いいえ」に設定し、データを再クロールすると、すべての動的 URL が索引から削除されます。

一部の動的ページは、同じページに対して複数の検索ヒットとして表示され、それらすべてに索引を付ける必要のない場合があります。また、それぞれが異なり、索引を付ける必要のある動的ページもあります。これら 2 種類の動的ページを区別する必要があります。一般に、コンテンツに影響を及ぼさずにメニューの展開のみが変わるページには、索引は不要です。次の 3 つの URL について考えてみます。

`http://itweb.oraclecorp.com/aboutit/network/npe/standards/naming_convention.html`

`http://itweb.oraclecorp.com/aboutit/network/npe/standards/
naming_convention.html?nsdnv=14z1`

`http://itweb.oraclecorp.com/aboutit/network/npe/standards/
naming_convention.html?nsdnv=14`

URL 内の疑問符 (?) は、残りの文字列が入力パラメータであることを示しています。重複するヒットは、基本的にサイド・メニューの展開が異なる同じページです。同じ問合せにはヒットが 1 件のみというのが理想的です。

`http://itweb.oraclecorp.com/aboutit/network/npe/standards/naming_convention.html`

動的ページ制御は、データ・ソース全体に適用されます。したがって、ある Web サイトに両方の種類の動的ページがある場合、索引付けを制御するために、これらの動的ページを 2 つのデータ・ソースとして別々に定義する必要があります。

6.7 Cookie のサポート

データ・ソースの認証情報を登録する場合、Ultra Search 管理ツールでは自動的に Cookie のサポートをオンにします。これを無効にして、Cookie のサポートをオフにすることもできます。

6.8 クローラ・キャッシュ削除の制御

クロールの実行中、ドキュメントはキャッシュ・ディレクトリに格納されます。事前に設定したサイズに到達するたびに、クロールが停止し、索引付けが始まります。旧リリースでは、キャッシュ・ファイルは、索引付けが終了すると必ず削除されました。新リリースでは、索引付けが完了しても、キャッシュ・ファイルを削除しないように指定できるようになりました。このオプションは、すべてのデータ・ソースに適用されます。デフォルトでは、索引付け後にキャッシュ・ファイルを削除します。

6.9 INSO フィルタ使用環境の設定

Ultra Search クローラでは、Oracle Text INSO フィルタ `ctxhx` を使用します。そのためには、共有ライブラリ・パス環境変数に `$ORACLE_HOME/ctx/lib/` パスが含まれている必要があります。含まれていない場合、バイナリ・ドキュメントのフィルタ処理が失敗します。

インストール時に、Oracle Universal Installer により `$ORACLE_HOME/ctx/lib/` が含まれるように変数が自動的に設定されます。ただし、インストール後にデータベースを再起動した場合、Oracle プロセスを開始する前に、共有ライブラリ・パス環境変数が `$ORACLE_HOME/ctx/lib/` を含むよう手動で設定する必要があります。フィルタ処理が機能するように新規の値を選択するために、データベースを再起動します。

たとえば、HP-UX システムでは、`SHLIB_PATH` 環境変数を `$ORACLE_HOME/ctx/lib` が含まれるように設定し、Linux システムでは、`LD_LIBRARY_PATH` 環境変数を `$ORACLE_HOME/ctx/lib` が含まれるように設定します。

6.10 既知のバグ

次の表に、このリリースの既知のバグに関する情報を示します。

Bug#	説明	処置
2881313	Web プロバイダ・エラー このエラーは、Ultra Search ポートレットの登録時に発生します。	このバグに関する最新情報は、オラクル社カスタマ・サポート・センターまでお問い合わせください。 <code>\$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/jpdk/jpdk/WEB-INF</code> にある <code>services.xml</code> ファイルを更新します。 <code>option key=FileProviderGroupMgr.dir</code> の値を変更し、 <code>ORACLE_HOME</code> 環境変数を使用せずに、ディレクトリのフルパスが指定されるようにします。
2598380	管理 GUI によって「 <code>java.lang.UnsatisfiedLinkError</code> 」エラーが返されます。 また、実行スケジュールは、「 <code>WKG-10013: 起動中のクローラ・プロセスを検出できません</code> 」エラーが発生し、失敗します。	Infrastructure インストールに対するこのバグのパッチをダウンロードして適用し、Infrastructure データベースを再起動します。 その後、失敗した操作を再試行します。

Bug#	説明	処置
3483945	HP-UX のみの問題です。 WKPROXY ユーザーがスーパー・ユーザー権限を所有していません。 インストール時に作成された WK_INST インスタンスを使用している場合、ジョブのスケジューリングおよび実行は正常に機能します。ただし、インスタンスが再作成された場合または新しいインスタンスが作成された場合、スケジューリングは機能しません。	インスタンスを正常に機能させるには、次の回避策を実行します。 次の手順を実行して、WKPROXY にスーパー・ユーザー権限を付与します。 1. 次の URL を使用して、orcladmin ユーザーとして Ultra Search の管理ページにログインします。<i>midtierhost</i> は中間層ホスト名、<i>port</i> はポート番号です。 <code>http://midtierhost:port/ultrasearch/admin_sso/index.jsp</code> 2. 「ユーザー」タブをクリックします。 3. 「スーパー・ユーザー」タブをクリックします。 4. 次の手順を実行して、WKPROXY にスーパー・ユーザー・ロールを付与します。 「ユーザー・タイプ」で、「データベース・ユーザー」を選択します。 「ユーザー名」に、WKPROXY と入力します。 WKSYS ユーザーとして Infrastructure データベースにログインし、次の SQL 文を実行します。<i>your_instance_name</i> は既存インスタンス名、<i>ji_id</i> は前の SELECT 文によって返されたジョブ ID です。 <pre>exec wk_adm.use_instance(your_instance_name) select ji_id from wk\$job_info where ji_type=1; exec wk_job.disable_job(ji_id) exec wk_job.enable_job(ji_id)</pre> 注意: インスタンスのすべてのジョブを無効または有効にする必要があります。 次の手順を実行して、スケジュールを削除します。 1. 「スケジュール」タブをクリックします。 2. ステータスが「失敗」のスケジュールをクリックします。 3. 「スケジュールの再開」をクリックします。

Oracle Voicemail & Fax

この章では、Oracle Voicemail & Fax 関連の問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)

7.1 新機能

オラクル社では、通信および共同作業の効率と生産性を向上させる機能により、Oracle Voicemail & Fax の機能強化を続けています。Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.0) では、Oracle Voicemail & Fax に次の機能が追加されました。

- 電話によるディレクトリ・アクセス
リリース 2 (9.0.4) のボイスメール・アプリケーションには、電話番号を知らなくても、ユーザー宛にメッセージを送信できる機能があります。Oracle 特有のこのディレクトリにより、コール元は、1 つのサイトのユーザーまたはグローバル・ボイスメール・ユーザーの全員を検索し、メッセージを送信できます。
- 再録され、簡素化されたメニュー・プロンプト
リリース 2 (9.0.4) では、メニューを完全に再録し、新しいボイスメール・メッセージへの迅速なアクセスと、電話メニュー全体での容易なナビゲートを実現するために簡素化されています。
- Outlook からのボイスメール作業環境へのアクセス
- Oracle Voicemail & Fax の作業環境は、Oracle Connector for Outlook に統合され、ユーザーはパスワードの変更、応答メッセージのアクティブ化、言語の選択を、標準の作業環境を離れることなく実行できます。
- サポートされる言語
 - アラビア語
 - 簡体字中国語
 - 繁体字中国語
 - デンマーク語
 - オランダ語
 - 米語
 - 英語
 - フィンランド語
 - フランス語
 - ドイツ語
 - ギリシャ語
 - イタリア語
 - 日本語
 - 韓国語

- ノルウェー語
- ポルトガル語
- ポルトガル語（ブラジル）
- スペイン語
- スウェーデン語
- トルコ語

Oracle Collaboration Suite リリース 2（9.0.4.2.0）では、Oracle Voicemail & Fax にデフォルトの再生制御および言語サポートが追加されました。これらの新機能の詳細は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1（9.0.4.2.0）』を参照してください。

7.2 既知の制限および回避策

この項では、Oracle Voicemail & Fax の既知のバグについて説明します。

表 7-1 Oracle Voicemail & Fax の既知のバグ

Bug#	説明
3554986	Oracle Voicemail & Fax プロセスを起動したことがない場合、Oracle Voicemail & Fax リリース 2 Patch Set 1（9.0.4.2.0）のインストール中に、rmid および rmiregistry の更新に対する Configuration Assistant が失敗します。たとえば、Oracle Voicemail & Fax リリース 2（9.0.4.1.0）をインストールした直後に Patch Set を適用した場合に、このエラーが発生します。 回避策： この更新の失敗は無視しても問題ありません。
3554963	rmid および rmiregistry に対する Configuration Assistant は、Oracle Voicemail & Fax リリース 2 Patch Set 1（9.0.4.2.0）のインストール中、Windows 2000 のアプリケーション・エラーをスローします。NetMerge ソフトウェアをインストールした後で Windows リソース・キットをインストールした場合に、このエラーが発生します。 回避策： PATH 環境変数を編集して、Windows リソース・キットへのパスを NetMerge のパスの前に指定します。

表 7-1 Oracle Voicemail & Fax の既知のバグ（続き）

Bug#	説明
3527787	新しいメール・ユーザーを作成すると、「メール・ユーザーの検索」および「メール・ユーザーの作成」ボタンを備えた確認ページが表示されます。これらのボタンは機能しません。 回避策： メール・ユーザーを検索するには、次の手順を実行します。 1. 「管理」タブをクリックしてから、「ユーザー」サブタブをクリックします。 2. 「ボイスメール /Fax ユーザーの管理」の下下の「ユーザーの追加」をクリックします。 3. インストールを選択します。 4. ドメインを選択します。 5. 「メール・ユーザーの検索」をクリックします。 メール・ユーザーを作成するには、次の手順を実行します。 1. 「管理」タブをクリックしてから、「ユーザー」サブタブをクリックします。 2. 「電子メール・ユーザーの管理」の下下の「ユーザーの追加」をクリックします。
3462443	ルーティング・プロセスを自動応答サービスに渡すときにエラーが発生した場合、ログに誤ったメッセージが記録されます。
3455629	セキュア SMDI モニターの配置および SMDI モニターへのローカル以外のホスト接続を防止する方法についてのマニュアルはありません。
3448087	「国際番号接頭辞リスト」スキームは、一部の地域の電話番号（桁数が追加されているもの）を正しい国際電話形式に変換しません。 回避策： 「国際番号接頭辞リスト」スキームは、地域の電話番号をそのまま使用して、固定の番号（通常は、国際アクセス・コード、市外局番および接頭辞で構成）を付け加えます。地域の電話番号に国際電話番号にはない数字が含まれている場合は、桁数を増やしてアカウントを作成してください。
3440787	Voicemail プロセスは、Temp コンテナにある一時ファイルを削除しません。

表 7-1 Oracle Voicemail & Fax の既知のバグ（続き）

Bug#	説明
3437014	NetMerge シンボル表の ReadChunkSize および WriteChunkSize のエントリに誤りがあります。 回避策： ノートパッドを使用して、C:\Documents and Settings¥Program Files¥Dialogic¥CT Media¥Symbols¥ctmssym.tbl を編集します。Container_ORCL_ReadChunkSize および Container_ORCL_WriteChunkSize の行で、シンボル名とシンボル番号の間にタブを 2 つ追加します。
3412677	NetMerge ログギングをトレース・レベル以上に設定すると、機密データが記録されます。 回避策： NetMerge ログギングを、長時間、トレース・レベル以上に設定しないでください。ログが作成された場合は、慎重に管理する必要があります。
3412623	UM アカウントを作成すると、Oracle Voicemail & Fax には必要のない権限 (JAVAUSERPRIV) が付与されます。 回避策： 各メール・ストアで次の手順を完了して、権限を取り消します。 1. SYSTEM としてログインします。 2. 次のコマンドを実行します。 <pre> REVOKE JAVAUSERPRIV FROM UM; CALL DBMS_JAVA.revoke_permission('PUBLIC', 'java.net.SocketPermission', '*', 'read,write');</pre>
3407951	空の FAX または壊れた FAX が配信されます。
3327772	OVF のシステム・クロックが OVF のメトリック・データベースと同期をとらない場合、メトリック・データは Enterprise Manager のリポジトリに送信されません。 回避策： OVF のシステム時間を、OVF のメトリック・データベースのシステム時間よりも 0 ～ 5 分早く設定します。
3285787	「ボイスメール /FAX 作業環境」 ページはハンガリー語のテキストに翻訳されていません。
3278384	韓国語では、31 日のボイスメール・プロンプトが誤って発音されます。

表 7-1 Oracle Voicemail & Fax の既知のバグ（続き）

Bug#	説明
3220773	サイレント・インストールが失敗します。 回避策: 1. <code>ias_core_top.rsp</code> に適切な値が設定されていることを確認してください。 2. 次のコマンドを実行します。 <pre>full_path¥setup.exe -silent -response full_path¥ ias_core_top.rsp</pre> 3. <code>\$ORACLE_HOME¥um¥scripts</code> ディレクトリに移動し、<code>findmailstores.bat</code> ファイルを実行します。 4. システムを再起動して、この構成を続行します。
3178808	リフレッシュ時に、アドバンスド・キューイング・メッセージ待機インジケータ (AQWMI) プロセスがデータベースの接続情報を再ロードしません。
3131415	「Mail store selection」ページと「End of installation」ページが翻訳されていません。
3070115	Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) へのアップグレード時に、Oracle Voicemail & Fax 用の Oracle Enterprise Manager ターゲット設定が正しくアップグレードされません。
3070186	Oracle Voicemail & Fax のアップグレード後、録音用アプリケーションが起動すると内部エラーが発生します。
3061500	Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) へのアップグレード時に、Oracle Voicemail & Fax 用の Oracle Enterprise Manager ターゲット設定が正しくアップグレードされません。
2947219	CTMedia 2.1 から NetMerge 3.0 へのアップグレードはサポートされません。NetMerge 3.0 と Oracle Voicemail & Fax を新しくインストールする必要があります。
2805349	休日応答メッセージ・アラームが再生されません。
2580875	MWI リクエストが適切に処理されないことがあります。
2209971	Windows ベースの Oracle Voicemail & Fax プロセスの停止後も、その Windows サービスが実行中の報告を続けることがあります。
1682964	一部のエラー・メッセージでは、ユーザーが割り込めないことがあります。

Oracle Web Conferencing

この章では、Oracle Web Conferencing 関連の問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)

8.1 新機能

リリース 2 (9.0.4.1) および 2 (9.0.4.2) Patch Set には、Oracle Web Conferencing に関する多数の新機能があります。すべての新機能の詳細は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1 (9.0.4.2.0)』を参照してください。

8.2 既知の制限および回避策

次の項では、Oracle Web Conferencing の既知の制限とそれらの回避策について説明します。

- データベース・サービス名に関する制限
- インストールおよび構成の問題
- ユーザー管理の問題
- ポップアップ・ウィンドウの表示の許可
- 既知のバグ

8.2.1 データベース・サービス名に関する制限

Oracle Collaboration Suite のリリース 2 (9.0.4.2) より前の Patch Set に付属のリリース 2 (2.0.4.2) より前の Oracle Web Conferencing では、SID を使用してデータベース接続を指定する必要があります。これは、JDBC 接続文字列の古い書式に依存するためです。OCS リリース 2 (9.0.4.2) Patch Set に付属する Web Conferencing リリース 2 (2.0.4.3) では、サービス名に依存する接続文字列を使用するように Web Conferencing を構成する手動の手順がサポートされます。ただし、OCS リリース 2 (9.0.4.2) Patch Set のインストーラでは、これまでどおり、インストール時のデータベース接続に SID を使用する必要があります。次に、サービス名およびその他の拡張接続文字列（RAC 用の複数リスナーのサポートなど）を使用できるように Web Conferencing を構成する手順を示します。

8.2.1.1 インストール

Patch Set のインストール時は、SID によって Web Conferencing データベースにアクセスできるようになっている必要があります。これは、インストーラが新しいサービス名機能をサポートしていないためです。RAC 構成では、インストール時に、Web Conferencing が直接 1 つの RAC インスタンスの SID を指すように構成する必要があります。

8.2.1.2 インストール後

特定の Web Conferencing インスタンスに Patch Set が正しく適用されると、このインスタンスを、サービス名、複数リスナーなどを使用して Web Conferencing データベースに接続するように手動で再構成できます。

1. 次のように入力して、現行のインスタンスのすべての Web Conferencing コンポーネントを停止します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl stop
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl stop -co OC4J_imeeting -v
```

2. \$ORACLE_HOME/imeeting/conf/imtinit.conf ファイルのコピーを作成します。
3. \$ORACLE_HOME/imeeting/conf/imtinit.conf を編集して、完全な JDBC 接続文字列を指定します。

警告： imtinit.conf ファイルの編集は、通常はサポートされていませんが、この手順では、このファイルを直接編集する必要があります。ファイル内の他の設定は変更しないでください。

次に、imtinit.conf ファイルの内容の例を示します。

```
#Wed Oct 22 01:34:42 PDT 2003
oracle.imt.database.sid=imtdb1
oracle.imt.instanceName=ocsmid1.ocsmid.host
oracle.imt.schema.password.encrypted=27250A0179786675780C0272534812
oracle.imt.database.hostname=ocsd1b.host
oracle.imt.database.port=1521
oracle.imt.schema.name=rtc_app
oracle.rtc.instance.version=2.0.4.3.0
```

デフォルトの構成では、Web Conferencing データベースの接続情報はホスト名、ポート、SID として指定されていることに注意してください。Web Conferencing リリース 2 (2.0.4.3) では、oracle.imt.database.jdbc.connect と呼ばれる新しいプロパティのサポートが追加されています。このプロパティが存在する場合、その他のデータベース接続プロパティ (oracle.imt.database.hostname、oracle.imt.database.port および oracle.imt.database.sid) は、たとえ存在していても無視されます。imtinit.conf ファイルに、次のプロパティを追加します。

```
oracle.imt.database.jdbc.connect=FULL_JDBC_CONNECT_STRING
```

`FULL_JDBC_CONNECT_STRING` に指定した値は、Web Conferencing リポジトリへの接続を確立する際に、変更または検証されことなく使用されます。つまり、この値が任意の有効な JDBC 9.0.1.4 接続文字列になります。`tnsnames.ora` エントリとは異なり、このファイルには接続文字列の全体を 1 行で指定する必要があることに注意してください。

次に、推奨する JDBC 接続構文の例を示します。HOST、PORT および SERVICE_NAME の値は、適切な値に置き換えてください。

```
oracle.imt.database.jdbc.connect=jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(ADDRESS_
_LIST=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=ocsdh.host) (PORT=1521))) (CONNECT
_DATA=(SERVICE_NAME=imtdb1.ocsdh.host)))
```

次に、IP アドレスによって複数リスナーを指定する場合の例を示します。

```
oracle.imt.database.jdbc.connect=jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(ADDRESS_
LIST=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=192.168.20.5) (PORT=1521)) (ADDRESS=(PROTOCOL=
TCP) (HOST=192.168.20.6) (PORT=1521))) (CONNECT_DATA=(SERVICE
_NAME=imtdb1.ocsdh.host)))
```

古いデータベース接続設定は、そのまま残しておくことをお勧めします。これらの設定は無視されますが、一部のコマンドは、検証のため、これらの設定の存在を前提としている可能性があります。

4. 現行のインスタンスのすべての Web Conferencing コンポーネントを再起動します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl start
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl start -co OC4J_imeeting
```

5. Web Conferencing コンポーネントが、新しい接続文字列を使用してデータベースに接続することを確認します。まず、次のように入力します。

- UNIX または Linux の場合：

```
grep "Database Connection Info" $ORACLE_HOME/imeeting/logs/imtcontrol/*.xml
```

- Windows の場合：

```
find "Database Connection Info" %ORACLE_HOME%\logs\imtcontrol\*.xml
```

検索したファイルの内容を確認します。古いファイルには、次のようなエントリが含まれています。

```
<record timestamp="2003-10-22T02:02:16.811-07:00" time-local="true"
severity="config" source-path="oracle.imt.application.db"
source="SrvDBConnProvider"><message>Database Connection Info:
jdbc:oracle:thin:@ocsdh.host:1521:imtdb1 (Schema rtc_app)</message>
```

最新のログ・ファイル (imtcctl start を実行したときに作成されたファイル) には、新しい JDBC 構文による次のエントリが含まれています。

```
<record timestamp="2003-10-23T02:21:27.994-07:00" time-local="true"
severity="config" source-path="oracle.imt.application.db"
source="SrvDBConnProvider"><message>Database Connection Info:
jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION= (ADDRESS
_LIST= (ADDRESS= (PROTOCOL=TCP) (HOST=ocsdh.host) (PORT=1521))) (CONNECT
_DATA= (SERVICE_NAME=imtdb1.ocsdh.host))) (Schema rtc_app)</message>
```

OC4J_imeeting ログについても同様に、次のエントリが含まれているかどうかを確認します。

- UNIX または Linux の場合：

```
grep "Database Connection Info" $ORACLE_HOME/imeeting/logs/application/*.xml
```

- Windows の場合：

```
find "Database Connection Info" %ORACLE_HOME%\logs\application\*.xml
```

新しいログ・ファイルに古い接続文字列構文が残っている場合は、前述の手順を再チェックして、正しいプロパティを指定したこと、正しいファイルを編集したこと、すべての Web Conferencing コンポーネントを再起動したことを確認します。また、使用する Web Conferencing がリリース 2 (2.0.4.3) 以降であることも確認します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtcctl versions
```

Web Conferencing が新しい接続文字列を使用していることがログ・ファイルに示されていれば、すべての手順は正常に終了しています。

8.2.2 インストールおよび構成の問題

注意： この項では、リリース 2 (9.0.4.1.0) をインストールして、インストールを完了する前に問題が発生したユーザーのための説明を示します。パッチ・セットを正常にインストールできた場合、次の手順を実行する必要はありません。また、リポジトリ内の Oracle Web Conferencing 用スキーマおよび Web Conferencing 用表領域が Patch Set によって変更されている場合には、次の手順は機能しません。

Oracle Web Conferencing のインストールは、妥当性チェックができないことによってインストール時に防ぐことができない不正な入力の原因で失敗する可能性があります。インストールは、様々な理由から、構成段階で失敗する可能性があります。この項では、これらの失敗の一部についてそのリカバリ方法と、手動による Oracle Web Conferencing の構成方法について説明します。

Oracle Web Conferencing のインストールでは、ユーザーのシステムから Web Conferencing にアクセスしようとするすべてのトラフィックが、すべてのポートで Web Conferencing ホスト・システムに自由にアクセスできることを前提としています。大半の企業にとって、これは Web Conferencing サーバー・システムが内部ファイアウォールを介さずにイントラネットに接続された状態を意味します。自社のインストール形態がこのタイプに当てはまらない場合は、インストール後構成をさらに実行しないと、インストールが終了しただけでは Web Conferencing にアクセスできない可能性があります。

関連資料： その他の場合に Oracle Web Conferencing を構成する方法の詳細は、『Oracle Web Conferencing 管理者ガイド』を参照してください。

電子メールによる会議への招待や『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for HP-UX PA-RISC (64-bit) , Linux x86, and Solaris Operating System (SPARC 32-bit)』に列挙されたその他の基本機能を有効化するために必要な、最も一般的な構成用のインストール後手順に従います。

8.2.2.1 クリーンな再インストールと削除

このリリースでは、Oracle Web Conferencing の再インストールおよび削除はサポートされていません。ほとんどの場合、インストール環境をインストール開始前の状態に完全に戻してから、インストールを再開する必要があります。これにより、クリーンなインストールが行われます。

この項では、Oracle Collaboration Suite インストールのクリーンアップの方法については説明しません。しかし、Real-Time Collaboration リポジトリの削除が必要になる場合があります。このリポジトリを削除するには、データベースから RTC 表領域も含めすべての Real-Time Collaboration オブジェクトを削除する必要があります。

8.2.2.1.1 データベースからの RTC リポジトリの削除 Real-Time Collaboration リポジトリの削除が必要になる場合があります。このリポジトリを削除するには、データベースから RTC 表領域も含めすべての Real-Time Collaboration オブジェクトを削除する必要があります。

関連資料： 特定のデータベースに対するこれらコマンドの実行方法については、『Oracle データベース管理者ガイド』を参照してください。

1. データベースに SYSTEM ユーザーまたは同様の権限を持つユーザーとしてログインします。
2. RTC ユーザーおよび RTC_APP ユーザーによるデータベースへのアクセスを許可しないようにシステムを変更し、これらのユーザーが新規セッションを開始できないようにします。
3. RTC ユーザーおよび RTC_APP ユーザーによるすべてのセッションを停止します。

4. RTC_APP、次に RTC を削除します。

- ユーザー RTC および RTC_APP を、これらのユーザーが所有するすべてのデータベース・オブジェクトも含めて削除します。
- 表領域 RTC_DATA、RTC_INDEX、RTC_BIG_DATA および RTC_LARGE_DATA と、これらの表領域に使用されたデータ・ファイルを削除します。RTC リポジトリがどのように作成されたかによって、データベースに RTC_BIG_DATA または RTC_LARGE_DATA があります。両方ある場合は、両方とも削除します。

8.2.2.1.2 手動リカバリまたは再インストール Oracle Web Conferencing では、Oracle9i (9.2 以上) データベースに常駐する Oracle Real-Time Collaboration (RTC) リポジトリを使用する必要があります。このデータベースは、カスタマ・データベースの場合も、RTC リポジトリが Information Store のインストール時にすでにシードされている Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.0) の Information Store データベースの場合もあります。次の場合、RTC リポジトリを使用可能にするには、それぞれ少し異なる手順が必要です。

- カスタマ・データベースに対するインストールの失敗: リポジトリを作成する前にインストールが失敗した場合、install_schema.cmd スクリプトを編集して、RTC リポジトリのために接続するデータベースの、Oracle ホームと SID の正しい値を代入する必要があります。

次のコマンドを発行します (1 行で指定)。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/install/db/install_schema.sh connect_string_for_database
SYSTEM_user_password rtc rtc_password rtc_app rtc_app_password RTC_DATA RTC
_LARGE_DATA RTC_INDEX directory_for_tablespaces
```

前述の *directory_for_tablespaces* は、表領域に対応するデータ・ファイルが作成されるデータベース・ホスト上のディレクトリで、通常はデータベース・ホストの Oracle ホーム内の oradata/instance_name サブディレクトリになります。

例:

```
/private/i902/midm72/imeeting/install/db/install_schema.sh
(description=(address=(host=crmdev07.us.oracle.com) (protocol=tcp) (port=1521)))
(connect_data=(sid=ia902dbd))) manager rtc rtc rtc_app rtc_app
RTC_DATA RTC_LARGE_DATA RTC_INDEX /u04/DBs/iA902DBD/oradata
```

- Oracle Collaboration Suite の Information Store に対するインストールの失敗: RTC リポジトリのダイアログに達する前にインストールが中断された場合、ここで使用されるスクリプトを編集して、Oracle ホームに適切な値を代入する必要があります。

1. 次のコマンドを発行します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/install/db/unlock_int_schema.sh connect_string_for_
information_store_database SYSTEM_password rtc rtc_app
```

例：

```
/private/i902/midm71/imeeting/install/db/unlock_schema.sh
(description=(address=(host=isunaaa17.us.oracle.com) (protocol=tcp)
(port=1521)) (connect_data=(sid=infom7))) manager rtc rtc_app
```

2. さらに、次のコマンドを発行します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/install/db/change_passwd_int_schema.sh connect_string
for_information_store_database SYSTEM_password rtc rtc_password rtc
_app rtc_app_password_of_your_choice
```

例：

```
/private/i902/midm71/imeeting/install/db/change_passwd_int_schema.sh
(description=(address=(host=isunaaa17.us.oracle.com) (protocol=tcp)
(port=1521)) (connect_data=(sid=infom7))) manager rtc rtc rtc_app rtc_app
```

3. 次の手順を成功させるには、RTC リポジトリを使用できるようにする必要があります。構成段階に達する前にインストールが中断された場合は、`imtctl` スクリプトを編集して、Oracle ホーム・ディレクトリに適切な値を代入する必要があります。

- `$ORACLE_HOME/imeeting/conf/imtint.conf` ファイルを編集し、`oracle.imt.instancename` に有効な値が設定されていることを確認します。これは、`ORACLE_HOME_name.fully_qualified_host_name_for_the_middle_tier` の形式で指定する必要があります。たとえば、`orahome1.bigsun1.mycompany.com` のように指定します。
- 次のコマンドを発行します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl updateDatabaseInfo -dbsid SID_for_the
RTC_repository_database -dbhost host_name_for_RTC_repository_database
-dbport port_for_the_RTC_repository_database -dbschema rtc_app
-dbpassword rtc_app_password
```

4. Real-Time Collaboration のコア・コンポーネント・インスタンスの場合、次のコマンドを発行します（1 行で指定）。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl addInstance -installtype midtier
-instancename oracle_home_name.host_name.domain_name
-hostname host_name.domain_name
-imthome $ORACLE_HOME/imeeting
-mxport any_available_port_between_1025-49151
-webhost Host_name_used_by_OHS
-webport Oracle_HTTP_Server_or_Web_Cache_listen_port
-websslport Oracle_HTTP_Swerver_or_Web_Cache_SSL_listen_port
-ldaphost OCS_infrastructure_OID_hostname
-ldapport OCS_infrastructure_OID_port
-oc4jname OC4J_imeeting
```



```
-imtpm_httpport any_available_port_between_1025-49151
-appname imeeting
-em_integrate true|false
```

Web Cache が有効である場合は、-webport および -websslport に Web Cache ポートを指定します。

-em_integrate オプションに **true** を指定すると、Enterprise Management Web Site に統合して Oracle Web Conferencing のステータスを表示できます。

例：

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl addInstance -installtype midtier
-instancesname midm71.isunaaa18.us.oracle.com -hostname
isunaaa18.us.oracle.com -imthome $ORACLE_HOME/imeeting -mxport 2400
-webport 80 -websslport 443 -ldaphost isunaaa17.us.oracle.com -ldapport
4032 -oc4jname OC4J_imeeting -imtpm_httpport 2402 -appname imeeting -em
_integrate true
```

5. Document Conversion Server および Voice Conversion Server の場合、次のコマンドを発行します（1行で指定）。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl.sh addInstance
-installtype voice|converter
-instancesname oracle_home_name.host_name.domain_name
-hostname host_name.domain_name
-imthome $ORACLE_HOME/imeeting
-orclhome $ORACLE_HOME
-voice_httpport any_available_port_between_1025-49151
-imtpm_httpport any_available_port_between_1025-49151
-appname imeeting
```

-installtype に **voice** を入力するとコマンドが Voice Conversion Server に発行され、**converter** を入力するとコマンドが Document Conversion Server に発行されます。

例：

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl.sh addInstance -installtype voice
-instancesname ocs7dv1.st-avenet-02.us.oracle.com -hostname
st-avenet-02.us.oracle.com -imthome $ORACLE_HOME/imeeting -orclhome
$ORACLE_HOME -voice_httpport 2042 -imtpm_httpport 2403 -appname imeeting
```

8.2.2.2 Real-Time Collaboration のコア・コンポーネント・インスタンスの一部としての OC4J RTC アプリケーションの作成

この手順は、Core Components インスタンス・ホスト上でのみ実行します。必要なファイルおよびスクリプトが正しく作成される前にインストールが中断または失敗した場合、これらのファイルやスクリプトを編集して、Oracle ホームに適切な値を代入する必要があります。このスクリプトで使用されるその他のファイルは、スクリプトと同じディレクトリにあります。

ORACLE_HOME およびライブラリ・パス環境変数を次のように設定します。

```
ORACLE_HOME=the_Oracle_Home  
LD_LIBRARY_PATH=$ORACLE_HOME/lib
```

その後、次のスクリプトを実行します。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/install/oui/deployIMT.sh
```

注意： このコマンドを実行する前に、
\$ORACLE_HOME/j2ee/deploy.ini ファイルが存在するかどうかを確認
します。\$ORACLE_HOME/j2ee/deploy.ini ファイルは、インストーラ
によって、%ORACLE_HOME%/j2ee/deploy.ini.some_number.bak と
してバックアップされている可能性があります。このファイルのコピーを
作成して、\$ORACLE_HOME/j2ee/deploy.ini として保存します。

8.2.2.3 Oracle HTTP Server の構成

次に示す変更は、すべて Web Conferencing の Oracle ホーム・ディレクトリの
mod_osso.conf ファイルに対するものです。

注意： mod_oss.conf ファイルの OsoIPCheck は、off に設定するこ
とをお勧めします。

HTTPS 配置に対するダウンロード機能の有効化

HTTPS を使用した配置の場合、Web Conferencing コンソール、ログ、会議資料領域に保存
された資料および録音データのダウンロードを可能にするために、mod_osso.conf ファイ
ルを編集する必要があります。

Web Conferencing コンソール :

```
<Location /imtapp/res>
    OsoSendCacheHeaders off
<\Location>
```

ログ :

```
<Location /imtapp/logs>
    OsoSendCacheHeaders off
    require valid-user
    AuthType Basic
<\Location>
```

資料 :

```
<Location /imtapp/app>
    OsoSendCacheHeaders off
<\Location>
```

録音データ :

```
<Location /imtapp/console>
    OsoSendCacheHeaders off
<\Location>
```

8.2.2.4 OracleAS Web Cache での PNG ファイルのイメージ圧縮のオフ設定

Internet Explorer 5.5 のユーザーは、Web Conferencing Application で表示しているドキュメント、または会議中にドキュメント・プレゼンテーション・モードで表示しているドキュメントから、イメージが欠落していることに気付く場合があります。これを防止するには、OracleAS Web Cache で PNG ファイルのイメージ圧縮をオフにします。

イメージ圧縮をオフにするには、次のようにします。

1. インストールされている Oracle9iAS の OracleAS Web Cache 管理者ページにアクセスします。これは、デフォルトで `http://apache_web_host:4000/webcacheadmin` にあります。
2. 管理者としてログインします。デフォルトのユーザー名とパスワードの値は `administrator` です。

3. ログイン後のページの左側に「**管理**」セクションが表示されます。下にスクロールして「**一般構成**」セクションを探します。そのセクションの「キャッシュ可能性ルール」の下にある「**Compression**」をクリックします。
4. PNG イメージの圧縮に関するルールのラジオ・ボタンを選択します。これは、デフォルトのインストールでは、2 番目のルール・セットです。
5. 「**Change Selector Association**」をクリックします。
6. ポップアップ・ウィンドウで、PNG イメージの圧縮に関するルールをクリックします。
7. 「**Remove Association**」をクリックします。ポップアップ・ウィンドウが閉じます。
8. メイン・ページで「**変更の適用**」をクリックします。
9. 「**再起動**」をクリックします。これで、変更が有効になります。

8.2.2.5 利用状況レポートの電子メールによる通知の構成

『Oracle Web Conferencing 管理者ガイド』の第 5 章では、Oracle Web Conferencing レポートの設定に使用する `imtreport` スクリプトについて説明しています。レポートに関するオプションを構成するには、このレポート・スクリプトの先頭にある変数を編集します。

次のように `imtreport` スクリプトを編集して、利用状況レポートを受信者に電子メールで送信するように構成します。

- `imtreport` の `export IMT_USE_BI_CLASSES` の行を、`export IMT_USE_REPORT_CLASSES` に変更します。この行を編集しないと、`NoClassDefFound` エラーが発生します。
- `SITE_ID` パラメータに、特定のサイトの ID、またはすべてのサイトを意味する `100` を設定します。このパラメータに空の文字列を設定すると、「`TODAYSDATE` は無効な識別子です」というエラーが発生します。
- 受信者を指定するカンマ区切りリストの後の空白は削除します。この空白を削除しないと、レポートの電子メールの送信先は、リストの先頭に設定された受信者のみにになります。
- `imtjvm` の先頭に、`DISPLAY` 変数を設定します。この変数を設定しないと、「コンストラクタ `javax.swing.plaf.FontUIResource` で問題が発生しました ...」というエラーが発生します。

8.2.2.6 カスタム・データベース使用時のデモのアップロード

Web Conferencing スキーマをカスタム・データベースにインストールする場合、RTC Configuration Assistant である「Create Oracle Real-Time Collaboration Repository」がインストール時に実行されている間に、次の例外が発生します。

```
Connected.
```

```
Connected.
```

```
Importing seeded demo conferences
```

```
LRM-00116: syntax error at 'address' following '('IMP-00022: failed to process
parameters, type 'IMP HELP=Y' for help
```

```
IMP-00000: Import terminated unsuccessfully
```

この例外は無視しても問題ありません。インストール後、次の手順に従ってデモをアップロードします。

1. Oracle データベースのインポート・ユーティリティ `$ORACLE_HOME/bin/imp` が、Real-Time Collaboration リポジトリとして使用しているホスト上のデータベースの Oracle ホーム・ディレクトリで使用可能であることを確認します。
2. Real-Time Collaboration のコア・コンポーネントの Oracle ホーム・ディレクトリからデータベース・ホストに、`$ORACLE_HOME/imeeting/install/db/imtseed.dmp` ファイルをコピーします。
3. データベース・ホストのシェルから、次のコマンドを発行します。

```
$ORACLE_HOME={database_oracle_home};export ORACLE_HOME
$PATH=$PATH:$ORACLE_HOME/bin;export PATH
imp RTC_ACCT_NAME/password_for_schema_rtc@database_connect_string
file=imtseed.dmp ignore=y commit=y buffer=40960000 grants=n indexes=n show=n
touser=$RTC_ACCT_NAME fromuser=rtc
```

8.2.3 ユーザー管理の問題

Oracle Web Conferencing は、Oracle Internet Directory を使用してユーザーを管理します。パフォーマンスを向上させるため、Oracle Web Conferencing は、次のユーザー属性のローカル・コピーを保持します。

- ユーザー名 : ユーザーがログインするときに入力する名前。この属性は、Oracle Internet Directory 管理者によって設定されます。
- ユーザー GUID: Global Unique Identifier。これは、ユーザーには見えない内部フィールドです。
- 名
- ミドル・ネーム
- 姓
- 電子メール・アドレス

リリース 2 (9.0.4.1) 以前、Oracle Internet Directory と RTC リポジトリのユーザー・データは同期化されていませんでした。リリース 2 (9.0.4.2) の Patch Set では、この問題が解決されています。次の表に、リリース 2 (9.0.4.2) の Patch Set をインストールしないと問題が発生する可能性のあるいくつかの状況を示します。これらの問題を解決する最良な方法は、この Patch Set をインストールすることです。

状況によっては、1 つの変更が複数の属性に影響を与えます。たとえば、Oracle Internet Directory でユーザー名を電子メール・アドレスにマップするように構成すると、ある従業員の姓の変更によって、そのユーザーの電子メール・アドレス、姓およびユーザー名の変更が発生する可能性があります。このような場合、当てはまる状況の解決方法をすべて適用する必要があります。

表 8-1 リリース 2 (9.0.4.2) の Patch Set が適用されていない場合のユーザー管理に関する問題の回避策

問題	原因	回避策の例
ユーザーが Oracle Web Conferencing にログインしたときにエラーが発生する	Oracle Internet Directory で、ユーザー名 (ログイン名) が更新されています。Oracle Web Conferencing は、ユーザーの古い GUID を保持しています。	古いユーザー名 : JANE.DOE@ORACLE.COM 新しいユーザー名 : JANE.YOUNG@ORACLE.COM 解決方法 : RTC リポジトリに rtc_app アカウントで接続して、次の SQL 文を実行します。 SQL> update rtc_users set user_name = 'JANE.YOUNG@ORACLE.COM' where user_name = 'JANE.DOE@ORACLE.COM'; SQL> commit;

表 8-1 リリース 2 (9.0.4.2) の Patch Set が適用されていない場合のユーザー管理に関する問題の回避策（続き）

問題	原因	回避策の例
表示されるユーザーの名が不正	Oracle Internet Directory で、ユーザーの名が更新されています。Oracle Web Conferencing は、ユーザーの古い名を保持しています。	古い名 : Jane 新しい名 : Jane2 解決方法 : RTC リポジトリに rtc_app アカウントで接続して、次の SQL 文を実行します。 <pre>SQL> update rtc_persons set first_name = 'Jane2' where person_id in (select person_id from rtc_ users where user_name = 'JANE.DOE@ORACLE.COM'); SQL> commit;</pre>
表示されるユーザーの姓が不正	Oracle Internet Directory で、ユーザーの姓が更新されています。Oracle Web Conferencing は、ユーザーの古い姓を保持しています。	古い姓 : Doe 新しい姓 : Young 解決方法 : RTC リポジトリに rtc_app アカウントで接続して、次の SQL 文を実行します。 <pre>SQL> update rtc_persons set last_name = 'Young' where person_id in (select person_id from rtc_ users where user_name = 'JANE.DOE@ORACLE.COM'); SQL> commit;</pre>
ユーザーが電子メールによる会議への招待を受信できない	Oracle Internet Directory で、ユーザーの電子メール・アドレスが更新されています。Oracle Web Conferencing は、ユーザーの古い名を保持しています。	古い電子メール・アドレス : JANE.DOE@ORACLE.COM 新しい電子メール・アドレス : JANE.YOUNG@ORACLE.COM 解決方法 : RTC リポジトリに rtc_app アカウントで接続して、次の SQL 文を実行します。 <pre>SQL> update rtc_persons set email_address = 'JANE.YOUNG@ORACLE.COM' where person_id in (select person_id from rtc_ users where user_name = 'JANE.DOE@ORACLE.COM'); SQL> commit;</pre>
これまで Oracle Web Conferencing にログインしていたユーザーがログインできなくなった	Oracle Internet Directory 内の既存のユーザー・アカウントが削除され、その後再作成されました。Oracle Web Conferencing は、これまでのログインで使用していた元のユーザー GUID を保持しています。	解決方法 : RTC リポジトリに rtc_app アカウントで接続して、次の SQL 文を実行します。 <pre>SQL> delete from rtc_persons where person_id in (select person_id from rtc_ users where user_name = 'JANE.DOE@ORACLE.COM'); SQL> delete from rtc_users Where user_name = 'JANE.DOE@ORACLE.COM'; SQL> commit;</pre>

8.2.4 ポップアップ・ウィンドウの表示の許可

会議への参加、記録された会議の再生など、一部の Oracle Web Conferencing タスクは、タスクの実行中にダイアログ・ボックスなどのポップアップ・ウィンドウを表示します。ポップアップ・ウィンドウのプロッカーを設定していると、このポップアップ・ウィンドウの表示が抑制されてタスクを実行できなくなります。

Oracle Web Conferencing を使用しているときは、ポップアップ・ウィンドウの表示を許可することをお勧めします。

8.2.5 既知のバグ

表 8-2 に、リリース 2 (9.0.4.1) の Oracle Web Conferencing での既知の問題を示します。

表 8-2 Oracle Web Conferencing の既知のバグ

Bug#	説明	回避策
2898506	Oracle Calendar を使用していると、ユーザーは Oracle Web Conferencing の「予定」タブで会議を予定することができず、Calendar ツールを使用する必要があります。	「予定」タブの表示を抑制するには、Oracle Web Conferencing 中間層で次のコマンドを入力します。 \$ORACLE_HOME/imeeting/bin/imtctl setProperty -system true -pname IsCalendarOCSInstalled -pvalue true
3019653	アラビア語を選択した場合、日付が正しく表示されません (Web Conferencing システムのロケールの形式で表示されます)。	ありません。
3033626	Oracle Collaboration Suite リリース 2 のインストール時に、ユーザーが Oracle Web Conferencing の構成を選択していなくても、一部の Web Conferencing (Real-Time Collaboration) Configuration Assistant が実行されます。Configuration Assistant は処理を完了しません。	この問題は、リリース 2 (9.0.4.2) の Patch Set を適用すると解決します。
3095910	韓国語を選択した場合、Oracle Collaboration Suite の Web 会議ポートレットにいくつかの英語の文字列が表示されます。	ありません。
3116499	インストール中に dcmctl updateconfig コマンドが実行されると、メモリ不足エラーが発生します。	Java Virtual Machine のメモリーを増やします。

表 8-2 Oracle Web Conferencing の既知のバグ（続き）

Bug#	説明	回避策
3117475	Site=0 の認証鍵がありません。	この問題は、リリース 2 (9.0.4.2) の Patch Set を適用すると解決します。
3124505	Oracle Enterprise Manager 中間層のサイトに iMeeting は表示されますが、そのページは表示されません。	Oracle Enterprise Manager Web Site を停止して再起動してください。
3133297	Oracle Collaboration Suite リリース 1 を Oracle Collaboration Suite リリース 2 にアップグレードした後、Oracle Collaboration Suite のホームページのポートレットから Web 会議を開始できません。	1. \$ORACLE_HOME/imeeting/bin にディレクトリを変更します。 2. ./imtcctl と入力します。 3. 次のように入力します。 <pre>setProperty -pname "ApacheWebPort" -pvalue "port_ number"</pre> Oracle Application Server Web Cache を実行している場合は、Web Cache のポート番号を指定します。それ以外の場合は、Oracle HTTP Server のポート番号を指定します。 4. Oracle Web Conferencing 用の OC4J を再起動します。 ポート・プロパティの設定方法および OC4J の再起動方法の詳細は、『Oracle Web Conferencing 管理者ガイド』を参照してください。
3263919	Oracle Web Conferencing スキーマがカスタム・データベースにインストールされていると、ユーザーがデモを起動したときにエラーが発生します。	詳細は、 8.2.2.6 項「カスタム・データベース使用時のデモのアップロード」 を参照してください。
3425113	ユーザーがログインして会議の作成または参加を試みたとき、ユーザーがログインしたばかりであるにもかかわらず、「セッション終了」のエラー・メッセージが表示されることがあります。	ユーザーのシステム・クロックの設定が不正であるか、Web Conferencing インスタンスのホスト・システムのシステム・クロックの設定が不正です。通常、現在の時刻より 10 時間以上早く設定されています。Web Conferencing インスタンスまたはユーザーのシステム（あるいはその両方）のクロックをリセットしてください。

表 8-2 Oracle Web Conferencing の既知のバグ（続き）

Bug#	説明	回避策
3482112	Netscape を使用している場合、このブラウザの言語に「日本語 [ja]」を設定していると、ポップアップ・ウィンドウの表示が抑制されて「取消」および「続行」ボタンが表示されないため、ユーザーは会議に参加できません。	Netscape を使用する場合は、ブラウザの言語に英語を設定してください。Netscape で、「編集」→「設定」→「Navigator」→「言語」と選択して、「英語（US）[en-US]」を選択します。
3502330	Netscape を使用してインスタント会議を開始した場合、言語が英語以外に設定されているとポップアップ・ウィンドウの文字が化けて、「取消」ボタンが機能しない場合があります。	Netscape を使用する場合は、ブラウザの言語に英語を設定してください。Netscape で、「編集」→「設定」→「Navigator」→「言語」と選択して、「英語（US）[en-US]」を選択します。
3509491	ロード・バランサ（LBR）を使用している場合、会議を再生すると、開始した直後に再生がクラッシュすることがあります。	会議の再生では、Real-Time Collaboration のコア・コンポーネント・サーバーに保存されたセッション・オブジェクトを使用して、ユーザー ID およびサイト ID を確認します。ロード・バランサが単一セッション中に異なる Web Conferencing サーバーにユーザーを送信すると、再生に必要なセッション情報を確認できなくなります。 単一セッション中は各ユーザーを同じ Real-Time Collaboration サーバーにルーティングするように、ロード・バランサを設定してください。つまり、ユーザー 1 がサーバー A にルーティングされた場合、ユーザー 1 はそのセッション中は継続してサーバー A に接続され、ユーザー 2 はそのセッション中はサーバー B にルーティングされるように設定する必要があります。「セッション」は、Web Conferencing にログインしたときに始まり、ログアウトしたとき終わります。

この章では、Oracle Collaboration Suite の OracleAS Wireless コンポーネント関連の問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [はじめに](#)
- [新機能](#)
- [Oracle Hosted Voice Gateway](#)
- [既知の制限および回避策](#)
- [Wireless & Voice の使用](#)
- [ドキュメントの訂正](#)

9.1 はじめに

このパッチ（このパッチの Wireless コンポーネントのリリース番号はリリース 1（9.0.3.2.0）は、Oracle Collaboration Suite リリース 2（9.0.4.0.0）または Oracle Collaboration Suite リリース 2（9.0.4.1.0）のいずれかに適用できます。各リリースに対応する Wireless のリリース番号は、それぞれリリース 1（9.0.3.0.0）および 1（9.0.3.1.0）です。

このリリースのバグ修正およびその他の重要な情報は、『Oracle Collaboration Suite Readme Release 2 Patch Set 1（9.0.4.2.0）』を参照してください。

9.2 新機能

この項では、このリリースでの新機能について説明します。

9.2.1 Over the Air（OTA）プロビジョニング

OTA は、この Patch Set で新しくサポートする機能です。system.properties ファイルを構成することで、この機能を有効化または無効化できます。デフォルトでは、この機能は無効になっています。

OTA を有効にして必要なキャリアおよびデバイス情報を構成するには、次の手順を実行します。

1. テキスト・エディタを使用して、
\$ORACLE_HOME/wireless/server/classes/oracle/panama/core/admin ディレクトリにある system.properties ファイルを変更します。useOTA の値を true に設定します。
2. \$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/marconi/marconi-web/WEB-INF ディレクトリにある carriers.xml および devices.xml ファイルを変更し、各 XML ファイルに含まれている例に従ってキャリアおよびデバイス情報を構成します。
3. owi.properties ファイルの次の設定のデフォルト値を変更します。
 - ブックマーク
 - MMSC
 - 電子メール
 - syncML
 - WAP

注意： ブックマークには、Google および Yahoo! の 2 つのデフォルト値が設定されています。OTA プロビジョニングを有効にするには、このブックマーク設定の名前と URL を両方とも Oracle Collaboration Suite の値に変更する必要があります。

ブックマークが 1 つだけ必要な場合は、bookmark.1.name および bookmark.1.URL (Yahoo! ブックマークに使用される) の両方の値をコメントにします。

OTA 機能のオンライン・ヘルプは、このリリースには組み込まれていません。次のリリースで組み込まれる予定です。

4. 中間層を再起動して変更を適用します。

9.2.2 任意のモバイル機器からのリアルタイムなブラウザ・アクセス

Oracle Wireless & Voice は、ブラウザ機能を持つ任意のモバイル機器からコラボレーション情報への非常に最適化されたワイヤレス・アクセスを可能にします。モバイル機器のブラウザから従業員が実行できるタスクには、次のようなものがあります。

- 電子メールとボイスメールのアクセス、返信または転送
- 予定の表示、変更、取消し、またはステータス変更
- 企業ディレクトリまたは個人のアドレス帳での検索の実行
- Oracle Files の参照と FAX 送信するファイルの選択

Oracle Collaboration Suite のワイヤレス・アプリケーションは、様々な機能を持つモバイル・ブラウザや異なるフォーム・ファクタのデバイス用に非常に最適化されているため、きわめて効果的でユーザーフレンドリな操作性を得ることができます。たとえば、モバイル受信ボックス機能では、緊急のメールのみ、過去 24 時間のメール、ボイスメールのみ、FAX メッセージのみ、選択した送信者からのメールのいずれかを受信する仮想受信ボックスをユーザーが作成できるため、より高速でパーソナライズされたメール・アクセスが実現します。

9.2.3 ユビキタスな音声アクセス

従業員は、Oracle Email の取出しと返信、予定の管理、電話帳に載っている人への電話などを任意の電話機から音声で行えるようになりました。Oracle Collaboration Suite に音声でアクセスするには、電話機から音声ゲートウェイに電話をかけて、音声インタフェースと対話します。Oracle Collaboration Suite の音声対応アプリケーションは、音声とプッシュホンの両方のコマンドに応答し、話者に依存しない音声認識機能を持つ任意の (Oracle に対応して機能する) VoiceXML ゲートウェイで実行されます。

9.2.4 SMS または電子メールからの非同期コマンドによる即時アクセス

このリリースでは、従業員は SMS、双方向ポケットベルまたは任意の電子メール・クライアントから、非同期コマンドを使用して Oracle Collaboration Suite にアクセスすることもできます。従業員は、SMS または電子メールを介して単純な非同期コマンドを送信することで、その日の予定を取り込んだり、会議の変更または取消しを行ったり、企業ディレクトリまたは個人のアドレス帳で従業員情報を検索したり、ファイル・カタログを参照して FAX または電子メールで送るファイルを選択したりすることができます。

たとえば、SMS を介して非同期コマンド `cal` を送信してその日のすべての予定を取り込んだり、`search joe harris` を送信して企業ディレクトリで Joe Harris を検索したりすることが可能です。

9.2.5 マルチチャネルでのアラートと通知

Oracle Collaboration Suite では、従業員が特定の電子メールまたはボイスメールを受信したとき、カレンダーで重要なイベントの追加または更新が発生したとき、Web 会議に招待されたとき、あるいは重要なミーティングや Web 会議のアラームとして、その従業員に通知が送信されます。従業員にとってのユニークな利点は、これらの通知を受信するチャネルを SMS、MMS、電子メール、ボイス・アラート、双方向ポケットベルおよび FAX の中から自由に指定できることです。

9.2.6 所在と連絡先の管理

Oracle Collaboration Suite の連絡先管理機能では、ユーザーが自分のプロフィールを作成して日中の所在とその場所での通知受信方法を定義できるため、ユーザーの管理が可能になります。従業員の連絡先情報は企業ディレクトリを通じて公開されるため、適切な権限を持つすべての人が、特定の従業員に任意のタイミングで連絡するための最善の方法を判断できます。

9.3 Oracle Hosted Voice Gateway

Oracle Hosted Voice Gateway を使用すると、Oracle Collaboration Suite Wireless のインストールと構成の終了後、既製アプリケーションや特注のボイス・アプリケーションにボイス・デバイスを介して即座にアクセスできます。詳細は、次の Web サイトを参照してください。

mservice.oracle.com

9.4 既知の制限および回避策

この項では、このリリースの既知の制限を示します。

9.4.1 ワイヤレス SMS 通知の問題

ワイヤレス SMS 通知に関する問題が報告されています (Bug#3314271)。この問題が発生した場合は、パッチを適用する必要があります。パッチの取得に関しては、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

9.4.2 連絡ルールの切替えポートレットの障害

Web Client と Wireless 中間層を異なるシステムにインストールすると、連絡ルールの切替えポートレットに障害が発生します。この問題を解決するには、次の 2 つの方法があります。

- Web Client と Wireless を両方とも同じ中間層にインストールします。
または
- `webclient.properties.template` ファイルを `webclient.properties` として保存し、Wireless のエントリを適切に構成します。

9.4.3 ワイヤレス電子メールのタイムアウト・パラメータの増加

タイムアウト・エラーによって断続的に発生するログインの障害を防ぐには、タイムアウト・パラメータの値を増やします。タイムアウト値を増やすには、次の手順を実行します。

1. Wireless Webtool を起動します。
2. 「コンテンツ・マネージャ」に移動します。
3. 「メール」に移動します。
4. 「サービス入力パラメータ」に移動します。
5. タイムアウト値を 2000 から 10000 に変更します。
6. OC4J_Wireless を再起動します。

9.4.4 メッセージの複数のコピーの生成

Bug#3174307 で報告されているように、Oracle Collaboration Suite リリース 1 のインスタンスのアップグレード（またはパッチの適用）を行うと、一部のユーザーに次の問題が発生する場合があります。

- アップグレード後、受信通知の **Wireless & Voice** 設定に設定していた古いルール（ボイスメール、緊急メッセージ、特定の人からのメッセージなど）が表示されなくなります。これらのルールはまだ有効です。インタフェースのリストに表示されなくなるため、古いルールを変更または削除する方法はありません。
- アップグレード後に、ユーザーが通知の複数のコピーを受信するようになる場合があります。Oracle Collaboration Suite インスタンスをアップグレードして、古いルール（表示されない）と同じ新しいルール・セットを作成した場合に、通知の重複が発生する可能性があります。このような状況では、システムがユーザーに適用されるルール・セットを 2 つ持つことになるので、その結果ユーザーは複数の通知を受信します。

この問題を解決するには、アップグレード後（パッチの適用後）に Oracle Collaboration Suite ホームページの **Wireless & Voice** 設定のページを開きます。**Wireless & Voice** のページを開くと、そのユーザーに属する古いルール・セットは自動的にオフになり削除されます。

9.4.5 Portal に戻る URL の構成

ユーザーが、最初に Oracle Collaboration Suite Portal のホーム・ページを通らずに、Oracle Wireless & Voice 設定ウィザードに直接アクセスできるようにするには、Oracle Wireless & Voice ウィザードでの設定完了後にユーザーがどこに移動するかを明示的に指定する必要があります。デフォルトでは、Portal からウィザードにアクセスした場合、Portal のホーム・ページに戻されます。Portal からウィザードにアクセスしない場合は、戻り先の URL を `$ORACLE_HOME/webclient/classes/oracle/collabsuite/webclient/resources/webclient.properties` ファイルで指定する必要があります。

たとえば、`portal=http://my.company.com/homepage` のように指定します。デフォルト値は、`portal=http://portal_host:portal_port/pls/portal/PORTAL.wwsec_app_priv.login` に設定されています。

9.4.6 Wireless Calendar

このリリースでは、ユーザーは音声インタフェースを介して新規の Wireless Calendar エントリを作成することはできません。

9.4.7 Wireless Files

このリリースでは、マルチバイトのユーザー名はサポートされていません。

9.4.8 停止中と表示される Wireless のステータス

Oracle Enterprise Manager では、中間層システムについて管理できるすべてのプロセスが表示されます。Enterprise Manager ページにアクセスして、中間層システムをクリックすると、Wireless に赤い下矢印が表示されます。これは、Wireless Server が起動していないためです。Wireless Server を起動するには、ブラウザで次の URL を指定します。

```
:@ http://machine_name:port/ptg/rm
```

これにより、Wireless Server が自動的に起動します。

9.4.9 マルチバイト・キャラクタとワイヤレス通知

Oracle Email によって受信されたメッセージのワイヤレス通知を受け取ることができます。元のメッセージの件名または送信者の ID のいずれかにマルチバイト文字が含まれている場合、これらのマルチバイト文字は、通知の中で正しく表示されません。

9.4.10 Wireless Webtool と Wireless Customization のための Oracle Portal プロバイダ登録の失敗

同じシステム上に Infrastructure および中間層の両方がインストールされていて、そのシステムで実行されている Enterprise Manager デーモンが Infrastructure ホームを参照する場合、Wireless サイトから「Wireless Webtool のための Oracle Portal プロバイダの登録」と「Wireless Customization のための Oracle Portal プロバイダの登録」を実行すると、`java.lang.NoClassDefFoundError` エラーが返されます。

Infrastructure のインストールの `orion-web.xml` ファイルでは、`pdkjava.jar` および `ptlshare.jar` は、中間層のインストール場所を参照します。

たとえば、Infrastructure が `/private/ias20_infra/` にインストールされていて、中間層が `/private/ias20_midtier/` にインストールされている場合は、Enterprise Manager デーモン `orion-web.xml` 内の次のエントリを置換します。

- `<classpath path="/private/ias20_infra/portal/jlib/pdkjava.jar"/>`
 - `<classpath path="/private/ias20_infra/portal/jlib/ptlshare.jar"/>`
- これらのエントリを次のエントリに置換します。
- `<classpath path="/private/ias20_midtier/portal/jlib/pdkjava.jar"/>`
 - `<classpath path="/private/ias20_midtier/portal/jlib/ptlshare.jar"/>`

`opmn` プロセスを再起動して、変更を有効にします。

9.4.11 Microsoft Internet Explorer 使用時に発生する一般的なシングル・サインオン・エラー

Oracle Wireless など、一部の Oracle9iAS コンポーネントに影響を及ぼす一般的なエラーがあります。このエラーは、Microsoft Internet Explorer を使用して、Infrastructure と中間層の両方がインストールされているシステム上の Web ツールにアクセスすると発生します。次のエラーが発生することもあります。

- ユーザー名およびパスワードを入力し「ログイン」ボタンをクリックして、Web ツールにログインすると、SSO 警告（エラー）が表示されます。ブラウザの「リフレッシュ」ボタンをクリックして、続行します。
- Oracle Wireless User Manager で、「作成」ボタンをクリックすると、SSO 警告（エラー）が発生します。Microsoft Internet Explorer の「戻る」ボタンをクリックして続行します（「リフレッシュ」ボタンをクリックすると、前述の状況と同じように続行することができません）。

9.4.12 外部リポジトリを持つ複数の ORACLE_HOME では使用できない Oracle Wireless プロセスのステータス

同じシステムに中間層と Infrastructure の両方をインストールし、Enterprise Manager コンソールから Wireless スキーマを、Infrastructure のインストールの一部として使用可能なものの以外のスキーマが指定されるように変更すると、Wireless プロセス・ステータスの変更は、Enterprise Manager コンソールに表示されません。この問題は、すべてのプラットフォームで発生します。

この問題を回避するには、スキーマが変更された中間層の Oracle ホーム・ディレクトリから、<middle tier ORACLE_HOME>/config/iasschema.xml ファイルの次の部分をコピーして、Oracle ホーム・ディレクトリ・ファイルの対応するエントリに貼り付けます（上書き）。

```
<infrastructure ORACLE_HOME>/config/iasschema.xml
<SchemaConfigData>
<ComponentName>Wireless</ComponentName>
<BaseName>WIRELESS</BaseName>
<Override>true</Override>
<SchemaName>the new schema name</SchemaName>
<DBConnect>the new DB connect string</DBConnect>
<Password>the new DB password (encrypted)</Password>
</SchemaConfigData>
```

その後、Enterprise Manager を再起動します。

9.4.13 サポートされない Jabber のマルチバイト・ユーザー名

Instant Messaging とともにバックエンドで使用する Jabber では、マルチバイトのユーザー名がサポートされないため、Instant Messaging モジュールでもマルチバイトのユーザー名がサポートされません。

9.5 Wireless & Voice の使用

この項では、Wireless & Voice の使用に役立つ情報について説明します。

9.5.1 SMS、電子メールまたは双方向ポケットベルから Collaboration Suite にアクセスするための ASK コマンド

Oracle Collaboration Suite コンポーネントにアクセスするためには、次のコマンドが使用できます。

9.5.1.1 Calendar

予定を表示するには、次の構文を使用します。

```
cal [day|week] [date]
```

たとえば、今日の予定を表示するには、次のように入力します。

```
cal
```

今年の 8 月 21 日の予定を表示するには、次のように入力します。

```
cal day 8/21
```

2004 年 8 月 21 日の週の予定を表示するには、次のように入力します。

```
cal week 8/21/2004
```

予定を作成するには、次の構文を使用します。

```
cal new title date start-time duration [location] [notes]
```

日付書式は「MM/dd/yyyy」で、年は省略できます（例:6/29）。

開始時間は「hh:mm」書式で入力します（例:1:30pm、9:20am）。

所要時間（分）を入力します（例:90）。

例：

```
cal new test 9/24 1:00pm 90 HQ "bring lunch"
```

9.5.1.2 アドレス帳

`find` は、電話番号、名前（部分文字列検索）または部署に対する検索を行います。ディレクトリ検索は、個人のアドレス帳で連絡先が見つからない場合にのみ実行されることに注意してください。

個人のアドレス帳または企業ディレクトリで連絡先を見つけるには、次のコマンドを入力します。

```
find string
```

次に各変数の意味を示します。

`string` は、カンマ区切りの名前のリストです（例: John,Jack,Smith）。

- 名または姓のいずれを指定してもかまいません。
- 検索では大文字と小文字は区別されません。

例：

```
find John,Jack,Smith
```

9.5.1.3 メール

次の Oracle Email 用コマンドがサポートされています。

- `send`: ヘルプ・メッセージを返します。
- `send help`: ヘルプ・メッセージを返します。
- `send recipients documents | text:text`: リストにある受信者にドキュメントまたはテキスト・メッセージを送信します。

例：

```
send jacob "text:This is a test message."  
send user@oracle.com /private/documents/roadmap30.ppt
```

9.5.1.4 FAX

次の FAX コマンドがサポートされています。

- `fax /help`
- `fax -help`
- `fax -h`
- `fax recipient_fax_number "text:fax message"`

例：

```
fax 16505067222 "text:hello world"
fax recipient_fax_number fileURL[,filePathInFilesOnline]
fax 16505067222 http://www.yahoo.com
fax 16505067222
http://www.yahoo.com,/private/john/mydoc/test.html,/private/john/mydoc/Spec.html
```

9.5.1.5 ディレクトリ

企業ディレクトリで連絡先を探すには、次のコマンドを使用します。

search string

次に各変数の意味を示します。

string は、名前（名または姓）、拡張子のないグローバル ID、電子メール・アドレスまたは電話番号のカンマ区切りのリストです。

9.5.1.6 ショート・メッセージ

任意のチャネルで短いメッセージを送信するには、`sm` コマンドを使用します。サポートされるチャネルは、次のとおりです。

```
sm <channel> <recipient> <subject> <message>
```

例：

```
sm voice 16505551212 Meeting Let's meet at 2:00pm-Sent as voice message.
sm email john.smith@oracle.com "Simple Subject" This is my message-Sent as an email.
sm sms 5551212 Meeting Let's meet at 2:00pm-Sent as an SMS message.
sm fax 16505067000 "Urgent Meeting" This is important-Sent as fax.
```

9.5.1.7 Instant Messaging

サポートされるチャネルは、音声、電子メール、SMS および FAX です。

複数の語を含む件名は引用符で囲む必要があります。

使用方法：

```
im command [param1 param2 param3 ... paramN]
```

例：

```
im send my friend "Hi, how are you doing?"
```

空白を含むパラメータは二重引用符で囲みます。

使用可能なコマンドは次のとおりです。

- `help`: 使用可能な `im` コマンドのリストを表示します。
- `connect`: ユーザーを `im` サービスに接続します。
- `disconnect`: ユーザーを `im` サービスから切断します。
- `groups`: ユーザーのグループを取得します。
- `addgroup 'name'`: ユーザーのグループにグループを追加します。
- `delgroup 'name'`: ユーザーのグループから指定したグループを削除します。
- `mvgroup 'oldname' 'newname': 'oldname'` で指定したグループの名前を `'newname'` に変更します。
- `online 'name': 'name'` で指定したグループでオンラインの友人のリストを表示します。
- `offline 'name': 'name'` で指定したグループでオフラインの友人のリストを表示します。
- `add 'friend' 'group' [Yahoo|MSN]`: 指定したグループに友人を追加します。リモートの Yahoo や MSN の友人を指定できます。
- `del 'friend' 'group'`: 指定したグループから友人を削除します。
- `mv 'friend' 'oldgroup' 'newgroup'`: 友人を `'oldgroup'` から `'newgroup'` に移動します。
- `statuses`: 主なステータス・グループのリストを表示します。
- `statuses 'statusgroup'`: 1 つのステータス・グループ内のステータスのリストを表示します。
- `status 'statusID'`: ユーザーの現行ステータスを指定したステータスに設定します。
- `msgs`: ユーザーに対するサーバー上のすべての未読メッセージを表示します。
- `arch`: ユーザーに対するサーバー上のすべてのアーカイブ保存メッセージを表示します。
- `msg 'msgID': 'msgID'` で指定したメッセージを表示します。
- `send 'friend' 'text'`: 指定した `'friend'` に指定した `'text'` でメッセージを送信します。
- `psts`: ユーザーのプリセット・メッセージのリストを表示します。
- `addpst 'text'`: ユーザーのプリセット・メッセージにメッセージを追加します。
- `delpst 'presetID'`: ユーザーのプリセット・メッセージから指定したプリセット・メッセージを削除します。

- `sendpst 'friend' 'presetID'`: 指定したプリセット・メッセージで指定した 'friend' にメッセージを送信します。
- `account 'username' 'password' [Yahoo|MSN]`: ローカル、Yahoo または MSN アカウント情報を更新します。
- `autologin on|off`: ローカル・アカウントの自動ログイン・オプションをオンまたはオフに設定します。

9.5.1.8 ファイル

指定したディレクトリのコンテンツを参照するコマンドは次のようになります。

```
files [<directory>]
```

例:

```
files /Private
```

空のままの場合、ホーム・ディレクトリのコンテンツが表示されます。

9.6 ドキュメントの訂正

次のドキュメントの項目は、最新のリリース後に変更されています。

9.6.1 Calendar Server

この項は、『Oracle9iAS Wireless 管理者ガイド』の有効値に関する情報にかわるものです。Oracle Collaboration Suite モードで、Oracle Collaboration Suite Calendar Server の名前およびポートを入力します。これらのエントリはコロン (:) で区切ります。Calendar Server のアクセスを指定するには、`http://mid-tier:port` に移動します。「Ports」タブをクリックします。ポートの表で、Oracle Calendar Server を探します。

Calendar 中間層で次のコマンドを実行しても、Oracle Calendar Server のポートを特定できません。

```
$ORACLE_HOME/ocal/bin/profilget -s ENG -k port
```

9.6.2 Wireless Configuration Assistant の表示

この回避策は、Wireless 中間層のインストールを開始する前に、Infrastructure データベース上で実行してください。

Bug#3232042 は、Wireless が Wireless スキーマおよびデータのバージョンを確認できないために発生します。この問題を回避するには、Wireless Configuration Assistant を実行する前に Wireless のバージョンを設定します。これは、Infrastructure データベースの、Wireless バージョン番号の PL/SQL プロシージャを実行することによって設定できます。次の手順を実行します。

1. Wireless パスワードを取得します。

このプロシージャは Wireless スキーマの一部であるため、まず OID から Wireless パスワードを取得する必要があります。取得するには、次の手順を実行します。

- OID 管理ツールを起動します。
- 使用する OID サーバーを選択します。(ias-pc2.us.oracle.com、port 389 など)
- パスワード welcome1 を使用し、orcladmin としてログインします。
- 次のパスをたどって、Wireless パスワードを取得します。

Entry Management → cn=OracleContext → cn=Products → cn=IAS → cn=IAS
Infrastructure → orclReferenceName=ias.. → orclResourceName=WIRELESS

- リソースをクリックすると、パスワード属性が表示されます。

2. Infrastructure データベースを修復します。

バージョンを正しく設定するには、WIRELESS ユーザーとして Infrastructure データベースに接続して、次のコマンドを入力します。

```
exec PTG_UPGRADE_PKG.add_schema_version('9.0.2.8.0');  
exec PTG_UPGRADE_PKG.add_data_version('9.0.2.8.0');
```

9.6.3 メッセージングを有効にするための Oracle Wireless の構成

『Oracle9iAS Wireless 管理者ガイド』のメッセージングの有効化に関する項では、Oracle がホスティングするサービスを紹介し説明しています。

Oracle がホスティングするメッセンジャ・サービスは、Oracle9iAS Wireless のメッセージングおよび通知機能を評価するために使用できます。Wireless インスタンスは、インストール時に、構成を追加しなくても、このホスティングされたインスタンスを使用するように装備されます。ただし、評価期間後、ユーザーは自身のメッセージ交換インフラストラクチャを設定する必要があります。

9.6.4 オンライン・ヘルプの表示

Customization ポータルからアクセスすると、オンライン・ヘルプのページには何も表示されません。

この問題を解決するには、パッチをインストールします。パッチの取得に関しては、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

9.6.5 Nuance 音声 Web サービス・ゲートウェイ

『Oracle9iAS Wireless 管理者ガイド』に記載されている、Nuance ソフトウェアに関する説明は古いものです。この機能には、<http://mservice.oracle.com> から入手できる Oracle Hosted Voice Gateway サービスを使用することをお薦めします。

9.6.6 Speechgenie ゲートウェイ

Voicegenie 音声ゲートウェイは、Voicegenie Inc. によってサポートも販売もされなくなりました。Voicegenie Inc. は、現在、Speechgenie 音声ゲートウェイを販売およびサポートしています。

